
ペテン使いは言靈遣い

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペテン使いは言靈遣い

【Zコード】

Z9946V

【作者名】

タナカ

【あらすじ】

少し捻くれた男子高校生、虚室対戯。そんな彼の特技は『嘘』。嘘つき、大法螺吹き、詐欺師、詭弁師、ペテン師…、親友には敬意をもつて『ペテン使い』などと呼ばれている。そんなある日学校裏の森の中でのんびりしていると、幼女が空から降ってきた。言葉と言霊の戦い。それと嘘つきな高校生の物語。

なんというか、人に恥じてしまつ人生を送つて來た。少なくとも、誰かに誇れるものとは言えやしない。

恥の多い生涯を送つて來ました。

例の人間を失格された物語を引用すればそうなるのだろう。まさにそれ。俺にとつて誇れやしない、恥の多い人生は、まさに失格されるべきだろう。まあでも、人間なのだから仕方ない、と例の作者と違ひ割りと樂観的に考えるのだから俺はまあマシなものだ。余計性質^{タチ}が悪いのかもしれないが。

友達…、親友といえるのだろうか、そいつが言つ俺についてのよく言つ言葉を使えば、

「君の話はいつも論理とかすつ飛ばしな法螺話^{ハスハジ}だよねー。ある意味尊敬するよー。」

やけに間延びした口調で言われた。

失礼な。けれど言い返せない。そうなのだ。俺は何を隠そつ、天性の嘘つき。

法螺話はお手の物、言い訳、だつてお茶の子さいさい。その上口も達者で口喧嘩には負けやしない。揚げ足取りも得意で、殴られる寸前まで相手を怒らせたりできる。

まあ、親友によくやりますが、と怒られるけど。

嘘。これが一応俺の日常の行動の中にどすんと座り込んでいく。

親友からは敬意をこめて『ペテン使い』などと不名誉な名をつけら

れでいるが、まだまだある。

大法螺吹き。

詐欺師。ペテン師。詭弁師。嘘つき。

：悪口だとは思わないようにしているさ。正直呼ばれ方はどうだつていい。

まあでもそう呼ばれるだけの実力はある。…実力といえるかは知らないけど。

だつて俺は嘘つきだつて有名なはずなのにそれでも引っかかるんだぜ？親友にはなぜか通用しないけど…、それでもそれ以外は簡単に俺の嘘にかかる。

俺の最大の特技。もう才能だつて言えるんじゃないだろうか。褒められることはないのだけど。

言葉は強い。それは簡単に人を惑わし、感情を左右できる。剣であり、盾であり、鎧だ。だから俺は嘘をつくし、やめるつもりは毛頭ない。だつて嘘は俺の日常であり、一部なのだから。

とりあえずでも、嘘を除けば俺は普通の一般的な高校生だ。超能力が使えるわけでも、魔法が使えるわけでもない、いたつて日常的にいる、高校生だ。…嘘を除けば。

性格は自分で言うが微妙。成績は国語が優秀。高校一年生の、健全な男子高校生。

虚室対戯。^{こむろたいぎ}それが俺の名前だ。

よし、もう一度言おうか。俺は虚室対戯、一般的な男子高校生、である。

面倒事は嫌いだし、人助けなんて自分に利益のあることしかやらない、一般的の少し性格の悪い捻くれた男子高校生、だ。

嘘ばつかで褒められる人生でもなし、面倒事はお人よしの、ヒーローみたいな、いかにも主人公のような奴がやればいいんだ。

そう、例えるなら今の状況。

「…………」

普段ならペラペラ動く口もこのときばかりはひくひくと、頬を痙攣させるばかりだった。

さて、なんのだろうかこれは。

…一皿で呑つのなら、

美少女と呼べるべき幼女が落ちてきた。

……だめだ、妄想の激しい人間だと思われそうだ。俺はいたつて健全です。ただ、これしか言えないのはどうしてだろうか。ちなみに呑うがここは学校。まああまり小さい子供が入り込まない場所だろう。

そして、ついでにその幼女の様子について一言。

傷だらけだった。

…一応呑うが俺がやつたんじゃなーぞ?…じめ、かつて悪い。ましてや小さい子供をだなんて。まさか虐待?いや不良が?いや、どこかの変態が…と、俺は立ちつくしてぐわんぐわん考える。

犯罪の臭いがした。なんせ田の前の幼女は頭から血を流しているのだ。

そして、それがちょうど俺の上に落ちてきた。妄想でも幻覚でもなく、現実だ。

さて、どうしてこうなったのかと言つて、話は数時間前に遡るのだ

が

⋮
◦

Episode 1 ペテン使いの優雅な日常との崩壊

嘘……事実でないこと。また、人をだますために言つ、事実とは違つ言葉。偽り。「をつく」「この話にはない」

校舎の裏で、カツアゲしている不良とされている気弱そうな少年の間に入り込む少年がいた。

琴羽野高校第一学年2組所属、虚室対戦。それがその少年の名前だつた。

「なんだよ、正義の味方のつもりか？」

口元を歪ませてさも悪役の典型的なタイプのように笑う不良A。かなり古いタイプのような気がするそれは、どうぞのアニメのキャラのように髪がモヒカンだった。

絶対学校で浮くだろうその風貌に微かな悲しさを覚える戯対。あのさ、それ全然イケてないから、と言つ言葉を飲み込む。

「生憎そんなもんじゃないですけど、そいつ俺の連れなんどりとりあえず穩便にすましてほしいなあと」

「ああ？ 友達思いなこつた」

俺の連れ、と戯対が指す少年、今絶賛カツアゲされ中な端渡代夜ははわたりじゅぎや
たいぎー、と情けない声を上げている。

ああこいつじゃなかつたら無視してたはずなのに、と対戦はため息をつく。いわゆる親友？と呼ぶべきだろつか、その代夜をただ歩いてただけなのに見つけて、代夜にも同様に見つけられてしまつた。ここで助けなかつたら後からぐちぐちと言われて、精神的に痛いと

ころをこいつはついてくるかもしね。この親友は対戯にとつて侮れない存在なのだ。

そのうえ、この代夜は、面倒くさがりの戯対がどうにもほつとけない人間だつたりする。

「あー…、あんたさあ、高三だよなあ

「はあ？ それがなんだよ」

「不祥事による学業停止制度つて知つてるか？」

一瞬、ぽかん、と不良Aの笑つていた口の動きが止まる。

「その名の通り不祥事を起こした学生への特別処置つていうとこつか。最近お偉いさんが決めたらしいんだけどよ、近頃いじめやそういう類での自殺やら事件が流行つてるだろ？ そういうのつて今問題になつてゐよな。いじめ、暴力、強奪、リンチ、…カツアゲだつてなあ。このくらいうつてことないだろ、つて思われるよつなことにも学校つてのは敏感になつてるんだよ」

「はつ、」

びくり、と不良の顔が強張るのを戯対は見逃さない。

「ビンゴ。その異常に目立つ風貌や、どうにもひ弱そうな代夜を狙つたところ、その上ここは校舎裏で人通りも少なく目に付きにくい。そして第一にこの不良Aはピアスも何も、体に穴を開けるようなものは使用していない、と言つ点だ。

つまり見かけだけの臆病者。怖がられたいだけで、避けられることに優越感を感じるタイプ。

どうせ自分より強いものには媚び詫つて、弱いものには偉そうになる。けれどその実、自分に不利なことがあつたら迷わず逃げる人間だ。

この学校は髪型に關してはかなり寛容だ。なんていうか、校長が自

分が染めたいばかりにいいんじゃね? こういう的な理由らしい。 ある意味尊敬するが。

つまり、この日の前の不良Aは、寛容な校則をいいことに髪形は好き放題やつてるだけ。 けれどそれ以外はノータッチ。 無駄な装飾具なんてつけてきていやしない。 でも髪形については、内申に影響しない、というJJとは、

この不良Aは停学や退学についての恐怖を感じている可能性がある、ということだ。

その対戦の予感は当たり、学校、といつ単語を出すとあからさまに不良Aの空気が変わったのを感じた。

わかりやすく、と内心で戯戯は突っ込む。 けれどそんな感情を表には出でず、あくまでにっこりと笑つてみせる。

「学校の不祥事つてや、学校のせいにされるじゃん? それつて結局学校の不利益になるわけよ。 そういう問題がかなりあるからさ、さすがに学校側も躍起になるだろ? つまり不良行為つていう生徒の勝手な不祥事のために、自分たちが迷惑かかるだなんてありえねえだろ、みたいな話なんだよ。 わかるだろ? それならどうこうことになるかさ。」

「な、なにが…」

「つまり誰かによつて被害を受けた生徒が、先生に、学校側の人間に泣きつけばどうなるか。 被害を受けてどう感じたか、肉体的にどうなつたか、心境的にどうなつたか、精神的にどうなつたか、そのせいはどう追い詰められたか。 考えてみるよ。 近頃の高校生つて案外ガラスのようなもんなんだぜ? 簡単にヒビが入つちまう。 そんなガラスを使い続けたらどうなる。 いつかはぶつ壊れるんだよ。 そしてその後始末のために手を傷つける人間もいたりすんだよな」

なあ、と対戦はにっこり笑つて朗らかに歌つみつこあげる。

「停学と退学、どちらが好み?」

+++++ +++++ +++++

「不祥事による学業停止制度、なんての僕聞いたことないよ

呆れた田で言つてくる代夜こ、むつと口を尖らせる対戦。
助けてやつたのになんだその田は。非難げに見つめれば慌ててばつ
が悪そりに逸らす。

「んー…あらううだと想つたんだけどな…」

「少なくとも僕の記憶の中にはないよ」

「あ、ならねーわ」

あらうからかんと、言つてのける対戦。

「どひせ嘘だし」

やつひつた田の前の少年にやれやれ、と代夜は首を竦めた。

虚室対戦の特技は『嘘』だ。

一枚舌ならぬ三枚舌。怒らせ惑わせ怯えさせ、感情操作はお手の物。
嘘だと疑う連中も騙される。ついたあだ名は数知れず。嘘つき、大

法螺吹き、詐欺師、詭弁師…エトセトラ。

この目の前の親友からは敬意を持つて『ペテン使い』などと呼ばれる。皮肉だとわかつてはいるが。

「…まあ、さ。助けてくれてありがとうね。助かつたよ」

「おお？ 素直に礼言つのか。めずらじ」

「僕は君みたいな天邪鬼とは違つからね」

「天邪鬼つて…それは違つとおもうんだけど」

「違つのかい？」

少なくともそんな可愛いもんじゃねえよ、と戯対は言つと代夜は母親のように優しく笑つた。

ああもう、この笑い方は嫌いだ、と、舌打ちしながらやつぽを向いた。

「ん…そろそろ休み終わると想つよ、戻ろつか」

「いや、俺はいいや、保健室にでも行つたつて言つといて」

「…もう、対戯つたら…」

しうががないなーと、やや間延びした口調で言つと、ううん、と一つ背伸びをしてからとことこと校舎の入り口に向かつて歩いていった。

途端に静寂がふわり、と浮かび上がるようになり対戯の周りに落ち着いた。

校舎裏は小さな森のようになつており、あまり人が近寄らない。なんにせよ高校生なのだ。冷暖房完備の校舎にいるほうがいい。まあ中にはそれこそ子供のように屋上や校庭を駆け回るものもいるが、大抵この場所には来なかつた。

だが対戯はそんなこの場所が好きだった。薄暗くはあるが、葉と葉の間から零れ落ちる光が優しい陽だまりを作り、緩やかにベールを被せるそこは、どこかしら特別な場所に見え、たびたび対戯は訪れる。

そのせいで代夜と不良Aのあの場面に出くわしてしまったわけだけど。

「ふわあ…」

大きな欠伸を一つし、かさかさと草の生えた道をのんびりと歩く。森をちょっと歩いた先にはちょうどいい広々とした空間があり、そこに小さなベンチが置いてあるのだ。

初めて見つけたときには汚れていたが、わざわざ雑巾を持ってきて綺麗に拭いたのだ。それはもう隅々と。

そのおかげでか、それは綺麗な光沢を放ち、座つて申し分ないものになつた。それに森とそのデザインが不自然のないくらいにマッチしていく、どうにも絵になる。

その場所に寝転がつて過ごすのが戯対は好きだった。だから今回も行こうとした。それだけ、だった。

：確率はいくつだろうか。偶然にしてはありえないことだった。もしくは、これを運命というのか。それとも神様が『あ、これおもしろそうじゃね？』みたいなノリで引き合わせたのか。

どっちにしろ言いたい。ふざけるな、と。

気づいたのは、がさつと葉と葉に掠れる音だった。風とは思えないような音だったので、鳥でもぶつかつたか？と何の気なしに上を向いた、瞬間顔に衝撃と共に暗闇が広がった。

「んなつ！……？」

いきなりのことに反応も出来ず、後ろに倒れこむ。顔と背中に同時に衝撃。痛つ、と悲鳴を上げようとしたが、顔の前にある柔らかい何かにその音が阻まれる。

なんなんだよ、と起き上がりながらその顔の前にあつた重くて柔らかいものをどかす。そしたら、

傷だらけの幼女だった。

「……………」

まっすぐに反応できないのはいうまでもない。

一応言ひうが、これは危ない妄想でも夢でもない。実際痛みはあつたのだ。そして幻覚でもない。現実であつて、リアルタイムで起きていることなのだ。

けど対戯の頭の処理速度が追いつかない。

幼女が空から降ってきた。

ちょうど自分の上に。

傷だらけで。

……………

「ダメだ、わからない。

「あの、だいじょーぶ、です、か？」

頭の中が真つ白で、混乱なまま、一応問い合わせてみる。幼女はうう、と身じろぎ、息もしていたので、死んではいないうらしい。それにはほっとする、が、おかしいことがある。いや、それは当たり前の疑問なのだが、なんで幼女が空から降ってきた?ということ。

木登りでもしてたのか?と空を見上げてみると、ちょうど対戯の上

の部分には、葉っぱは固まっているが登れるような枝はない。その上ここは高校だ。普通の小学生程度の子供が入ってくるようなところでもない。

びひじょひつか。

「…ほつとくか」

出たのはなんといつかまさに最低と言つべきその言葉。

傷だらけにしたの俺じやないし大丈夫だる、とあえて自分本位の考えでその場を立ち去るひつとする。

死んでるわけじやなし、生きてるのだ。それなら平氣だろ、と軽い気持ちで考え、幼女を自分の体からどかす。けれど地面の上もびひつかと思ったので抱き上げベンチの上に寝かせた。

呼吸も安定してるし、傷もそれほどまででもないだろひ、と觀察した結果を機械的に脳内に並べ、その場を立ち去るひつとする。

面倒なことには関らないほうがいい。平穏が一番なのだ。自分的人生に大きな岐路なんて必要ない。

幼女の眠るベンチを背にし、歩き出せうとした、その瞬間、

ばさり、

鳥の羽のような音が、天高くから聞こえた。

天高く？ そう考え不審に感じた。

空を飛んでる鳥の羽の音が聞こえるような大きな鳥なんていいたか？ 少なくとも、都會には、雀やカラス、時々ツバメが闇の山だ。なのになんだ今の羽の音。

対戯の耳にはノイズのような、ごみ箱をあさるような、不快を感じさせるような羽の音が、確かに聞こえた。

異質だと、何かが直感的に伝えていた。

現実的ではないと、伝えていた。

振り返つてはダメだ。振り返つてはいけない。本能のよくなそれはアラームを鳴らしながら危険だと知らせる。

そうだ、そうだよ、さつさと戻ればいい。代夜に言つたように保健室へ行つてしまえばいい。あそこの先生とは案外仲良いから大丈夫だ。振り返らず、何も気にせず、現実の中で生きれば良い。それが一番だ。それが良い。うじゅなきゃいけない。現実的に。日常に。平凡に。

あの女の子は？

「……つたく！」

生きてれば良い、生きている、それならほつとけばいいんだ。
けれど嫌な予感がした。嫌な予感ほど良く当たる、と誰かが言つて
いた。

考えてみたら、その嫌な予感には嫌な伏線もあった。
なぜ、幼女が空から落ちてきたか？

なぜ、鳥の羽の音が聞こえるのか？

ありえない。まるで妄想だ。けれど直感的に残つた予感は相変わらず警報を鳴らしているし、それは止みそうもない。心臓がばくばくと耳の奥でいやに響き続けている。

ありえないだろ、現実的に、考えて、そんなの、まさか。
対戯は振り返つた。

そして、その空に見た。

異形の、鳥を。

「つ……！？？」

それこそ幻覚じゃないか、と思う。ありえない事態が目の前で発生して、起こっている。この現実に。見慣れた現実に、混ざる異物。その鳥は、鳥とはいえなかつた。その羽は大人二人分の体をあつさりと覆うくらいあり、その体も2mを超えていた。

普通の鳥ではありえない、言うなれば化け物。羽は朱色に染まり緑色の鬚を生やしている。目は金色でぎょろりとしており、嘴は剣のようにも鋭い。

妖怪が現代に甦りました、的な？ありえない、ありえないありえない。ありえない。

叫び声を切れかけた理性で必死に堪える。頭の中はパニック寸前だ。まだぎりぎりで保つていられるのは、半ば予想できていたからだろう。まあその予想を軽く飛び越えてしまつものだつたのだが。

その鳥はばさばさ、と羽を振りながら地面に降り立とうとしてくる。その視界に入つているのは、多分、ベンチで寝かせた　　女子。

どうする、と自問自答する。もし助けようとしたとして、自分に何が出来る？所詮ただの高校生。すごいパワーとか、超能力とか、そんなの持つてゐわけじゃない。ただのペテン使いでしかない。鳥に会話なんて出来るものか。

ありがたいことに鳥は戯対には気づいていないようだつた。ただ、真っ直ぐに幼女を狙う。まだ幼い、傷だらけの小さな女の子を。別に家族でもなんでもなく、ただ自分の上に降つてきた迷惑なものじやないか、あんなの気にせず逃げればいい。最初はほつとくつもりだつたじやないか。全部夢にして忘れててしまえばいい。夢だ。ただ自分は森の奥に入ろうとして、それをやめて保健室に行つて、寝た。それだけだ。それだけなのだ。幼女が降つてきてもいいし、変な鳥も見ていない。だから逃げる。見捨ててしまえ。忘れる。忘れる。

女の子は、生きてるのに？

「ああもつなんだよくそおつつーーー！」

半ばやけくそのように大声で叫びながら対戦はベンチの方へ駆け寄り、その幼女を背負う。鳥はいきなり視界に入ってきた対戦に一瞬だけ動きを止め、それから起こったようにクエーッーーーと鳴いた。生きてるなら、ほつとけばよかつた。

でも、その生きてるものが、殺されてしまうかもしれないとしたら、天邪鬼、なんて親友に言われてしまつた意味がなんとなくわかつた気がした。

結局甘いのだ。生きるのはいい、死ぬのはだめ、と両極端に位置づけしたつもりなのに、その中間に関しては自分が不利になることを選んでしまつた。

ふざけるな、ちくしょう、ありえねえ、なんなんだよ、これ。

鳥は木々が邪魔だったのか、降りてくるのに時間がかかつたことが幸いして、背負う時間は簡単に確保できた。だが、鳥が地面に足をつけた途端、そんな安心は打ち消される。羽ばかりに気をとられていたが、その足は大きく普通より太い。そのため、走るスピードが半端なく早かつた。

「ちくしょう飛べるダチョウだあれーーー！」

ものす」スピードで駆けてくる鳥に似た化け物は、対戦に向かってくる。多分追いつかれたら、死ぬ。そんな恐怖を頭の中でぐるぐると回しながら、それでも逃げる。

女の子を落としてしまえば良いじゃないか、と何度も思つたが、そんな考えとは裏腹に体は動かない。

逃げるために戯戯は校舎とはさらに反対の、森の深い場所へ自分が走つてることに気づいた。しまつた、と思う。校舎の方に行けたのなら、助けが呼べるかもしない、そう思いながら、あれ、とふと

考えが過れる。

こんな大きな鳥に、どうして誰も気づかない？

え、と思った。せういえばそうだ。こんな大きく、異質な鳥、普通なら誰か気づくはずだ。あの不快な羽の音だつて。気づかないのはなんでだ？あれ、じゃあ、なんで俺は気づけた？

おかしい。おかしそう。空から降ってきた幼女。異質な鳥に似たもの。そしてその異常に気づかない者。

こんなキヤパシティが崩壊するくらい非現実的なことが起こつてゐるのに、それなのに今学校では平然と授業が行われてゐるし、相変わらず平和な街だし、変わらず世界は回る。異常すぎる。なんだよこれ。

「あ、れ…、なん、じゃ、ijihi…、背景が、移動、しておる…」

寝ぼけたような声が不意に後ろから聞こえた。なんだか年寄りが使うような言葉を使う幼女に、違和感を感じつゝも、おいつゝと対戯はその少女に向かつて叫ぶ。

「今、でつかい鳥の化け物に追いかけられてんだよ…」

「およ？へ？え？あれ？なんじゃ、これ？え？」

「なにパークつてんだ！俺が一番このありえねえ状況に困つてんだ！お前知つてんだろなんか！なんか言え！」

「む、なんという乱暴な言葉遣いじゃーぬし、私を古くから由緒正しき言靈遣いの名家、万葉家の行く行くは当主となりしこのやどり

「なんといつ乱暴な言葉を使うのじゃ…」

「ああもつそんな言葉言つてゐる暇あつたら後ろ見ろ後ろ見ろ…」

まつたくなんなのじゃ、と言しながらしづぶしづぶ背負われながら後ろを振り向けば、途端体をぶるりと震わせてきやあつと可憐らしく叫び声をあげながら対戯にしがみついてきた。途端に言葉の一つ一つに溢れていた自信に似たような声は、怯えの色を含ませたものに変わる。

「な、なんなのじゃあれば！…？とつとつと、鳥かのつ！…あ、あああそうじやあれば私を攫つた憎き鳥…怪鳥江蛾留侘じやつ！…ああぬし！もつとはよつ走れ！追いつかれてしまつではないか…！」

「無茶言つな！なんだよ偉そとに！お前は姫かなんか！」

「つつうつ、なんじやなんじやなんなのじやあ…」、このままでは食われてしまつ…」

泣きそうな声で言つてくるやどりと名乗つた幼女。確かに対戯の足はすでに疲れのためにスピードが遅くなつていて、鳥に似た何かはクエーッ！…と叫びながら相変わらずのスピードで走る。

「ぬう…仕方ない、一般人相手に気が進まんが使うしかないか、のう…」

ぼそり、とやどりが相変わらず泣きそうな声で何かを呴いた。対戯は特に気にせず、森を搔き分け走る。幸いこの森の中は熟知していた。ただ好きなだけじゃないのだ。どこに障害物になりそうなものがあるのか頭の中にしつかり入つていて、以前切れた不良に追い回されたときもこので上手くまいた。あの鳥相手に通用するかはどうかわからないが。

「ああくせ、足は速くてよかつたああ……！」

「ぬし、ぬし、「

「なん、だよっ……！」

ふ、とやどりが顔を戯対の近くに寄せた。耳元に息が微かにかかる。何だよ、と文句を言おうとした、そのときだつた。

「『もつと、速く』」

耳に何かが入り込んだ気がした。声ではない、何かもつと別の力が。え、と聞き返す前に足の力が一瞬抜けた。え、と焦りかけた瞬間、足に変な力が湧き上がつた。

「ぬなつ……？」

『もつと速く』、その言葉通りに走るスピードが格段に速くなつた。驚いてる間に、鳥に似た化け物を引き離していく。呆然となつて戯対の背中で、やつた成功じやつ一とはしゃいだ声をあげる幼女がいた。

「な、なんだよこれつ！？なんていきなり足が速くなつてんだおいつ！？これ俺のせいじゃないぞつ！？」

「なんてことはない、ぬしの体に私が告げたのだ、もつと速く走れ、とな！」

「はあ！？意味わかんねえ！？言つたからどうなるつてんだよー。」

「ぬつ！？ぬしは『言靈』を知らんと申すのか！？言靈と言つのは言葉による力、声に乗せ力と為すもの、じやー常識じやねつー！？」

「そんな常識俺の近くにはねーよっ……」

言靈、とか言葉による力、とか後ろでしゃんぎゃん騒ぐやどりの言葉を聞き流しながら、対戯は走り続ける。幸いに、偶然に、走る速度が上がったおかげで、鳥に似た何かをなんとか引き離せた。

後ろをちらりと振り返つても、あの派手な色は見えない。森の中であの色は目立つ、から、ないと思えばないのだろう。

逃げ切れた、と感じ、微かに息を吐く。このまま校舎のほうへ行こう、さすがに建物の中には入つて来れないはず、だ。それから警察に電話して、このやどりと名乗った女の子を引き渡して、それでもうオサラバ、だ。忘れよう。この女の子も、あの鳥も、それで日常の始まりだ。これは夢だった、そう思おう。

速く、速く、はやく。

ぱさり、と。

「…つー?ぬし、上じゅー…」
「…んなつー?」

迂闊だった。走る「」が出来たつて鳥は鳥。当たり前のよつに空を飛ぶ。体より大きなその一対の羽で、人間には出来ないことをやつてのける。

鳥の支配せしは空。

それを領域として、生きる。

「……は…やばい、な…」

「や、ややややばことはつ…？そんな、食われてしまつのかつ…？あああいやじやああああつ！私はまだ死にとつない、私は万葉家の当主となるべきものぞ！ぬぬう…私の言靈がせめて、物理的な力を持つものならいいのじやがあああ…！」

「暴れるな叫ぶな…！だいたいさつきからなんだよ『言靈』つて…」

「し、知らんとなつ！？言靈とは、言葉に宿りし力じや…それくらいの！」とも知らんのかこのあほんだらつ…」

「ああああもうつせえ…！…それよりあれどりすんだよ今にも

襲い掛かってきやうだぞ…！」

「ふにやあああつ、助けて葉桜あああああ…！」

「葉桜つて誰だよ…」

限界がきたのか、やどりはとつとつ泣き出しちしまつた。いや、今まで泣いていないほうがすじくないか？と思つ。まだまだ子供なはずだ。そう考えれば、この子はまあ、頑張ったのだ。だからとこつて、この場がどつにかなるとは言えないうが。ちくしょう、このまさかのHンドか？ありえねえ。ありえねえ。

ありえなさすがに。

今日初めて会つたよく知らない幼女と一緒に死ぬ？ふざけんな。なんでこんなところで心中しなくちやいけないんだ。死にたくない。死にたくない。

「……ぬし、私を置いて逃げろ」

「……は？」

一瞬意味がわからなかつた。

やどりは相変わらず泣いているし、声だつて喋り方は偉そつだが、声は弱々しい。

なのに、

「多分、あやつの狙いは私じゃ。私が走れば、やつだつて追いかけ
る。ぬしさこいまでよつやつしてくれた。もうよい。礼を言ひ。私を
置いて逃げる」

ぐず、と鼻を啜る音が聞こえた。

あーはいはい、狙いはやつぱりこいつだけってことか。ならこいつ
を置いていけば俺助かるじやん。

最初からそつすればよかつたんだよ、だいたい人助けなんて俺らしくない。

嘘だけついてればいいんだ結局。俺らしことを俺らしく俺がそ
うやればいい。

たつた、それだけなんだよ、それだけ、そ、う、それだけ。

「… どうか、ならやうさせてもいい」

びくり、と確かにやどりは震えた。けれど何も言わない。悲痛な意
思を固く貫いている。

馬鹿だな、対戯は思ひ。馬鹿すぎる。

「……教えてやるよ、せどり。俺のあだ名をな

「… ふえ？」

「俺はペテン使こせ」

対戦はやどりを背負う力を緩めるビンゴか逆に強める。え？え？
やどりは動搖したように目をぱちくり、とさせる。
さて、と対戦はこちらに狙いを定める鳥の化け物に視線を向けた。

ここに俺の嘘が通用するか。

なんてことはない、と自分に言い聞かせる。

俺はペテン使いなんだぜ？

皮肉を交えたその名を、嘘つきのその名を、今こそ俺はここに出す。
死ぬのは怖い。死にたくない。痛いのだって嫌だ。逃げたい。

なのに体はそつは動かない。後ろに背負った小さな子供を守りつと
動く。

死ななければいい。生きてるなら、いいんだ。
だから、守る。死なないよう、死なせないために。

対戦は、空にその羽を広げ、ぎょろりとした目で見つめてくる化け
物の鳥を見つめる。

体より大きな羽。発達した足。狙うのはやどり。そしてここは森
の中。
見つける。導き出せ。その答えを。どうすればいい。考える、考
え、考える。
ペテン使いの名に恥じぬよ。

「…御覧に入れて見せましょ、ペテン使いのその力」

「え…」

優しく、対戦は微笑む。

「騙してやるよ。あの鳥を、な

「ば…ばかか…ぬしはばかか…！」

背負つたやどりが泣き声で、いや実際に泣きながら叫ぶ。

「『言靈遣い』でもないぬしがどう勝つと…無茶じゃ…はよう私を降らせ…ぬしのような一般人に守られとうない…！」

「あーはいはい、黙れ黙れ。つてか言靈遣いってなんだよ…、職業？つたく意味わからんね…だいたい『ぬし』、じやなくて俺の名前は虚室対戯だつーの」

「たいぞ…つてそりでなく…そりではなくて、私が言いたいのは…！」

「つぬせー、ガキはおとなしくガキらしくしてればいいんだよ、
「ガキ…つー？」

ガキではないつーと怒り出したやどり。はいはい、と対戯は相手をせずには、返事だけをする。

やっぱり子供だな、と少しだけ安心したように息を吐く。
ぎょっとしたのだ。あのとれ、『私を置いて逃げる』と叫んだ、あのとき。

驚いたと同時に、恐ろしくもなった。
ほつとけなく、なつてしまつからじこな。

「お前はガキだよ」
「なつ…また…つ」
「だから、おとなしく守られとけ」

「…」ふええ？、とやどりは一瞬すく驚いたような顔をして、それから恥ずかしそうに両頬を赤くした。

「あ慣れねえ、と対戦は思つ。」

子供は子供らしくあればいいと思つ。けれどそれは自分の見ていいところで勝手にやればいい、などとも思つ。勝手に生きて、勝手に笑つてればいい。それを平和とこうのならそうなのだろう。でも、自分が関わる理由がどこにあるとこう。こんなのは、俺のキャラじやない。

なのに、この手を離せない、だなんて。

対戦は出来るだけ時間を稼ぐために走つていた。いくら鳥の化け物が空で自分たちを視界に捕らえていたとして、実際に捕まえなくてはどうしようもない。

その場合どうなるのか、食われるのか、引き千切られるのか、抉られるのか。嫌な想像が頭の中に過ぎつて、それを打ち消すように足に力を込める。

時折背中からやどりの声が聞こえるが、そんなの気にする余裕なんてない。

頭の中をフル回転で、自分のするべきことを考えた。

『嘘』。自分の持つ最低で最悪で醜悪で劣悪で、最大の武器。自覚はしてるからあまり煩く言われたくないけれど、少なくとも最も惨めな武器。

それが、人助けのために使われるとか。馬鹿みたいだ。そう思いながらも、必死に考える。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考える。

相手は鳥だ。言葉なんでもちろん通じない。

けれど言葉だけが嘘を作れるわけじゃない。

俺を誰だと思ってる。嘘で紡ぎ嘘で絵を描き嘘で歌い嘘で奏でるペテン使い。

憎まれ嫌われ疎まれたって、嘘を吐き続けて、そんな俺が、鳥くら
い騙せないわけがない。

怖がるな。恐がるな。何一つだって畏れるものはない。

お題は揃つた。鳥と森とやぢり、ここから生み出すものは？

「…やぢり、お前、走れるか？」

「へ？」

「耳を貸せ、俺が今から言つ内容をしつかり聞け。チャンスは一回。
この賭けに乗るか乗らないかはお前次第だ」

「ど、どうこうこと、じゃ？」

「そういうことだよ。お前の選択で決める。リスクのややある逃げ
方、ノーリスクの逃げ方、それと…ハイリスクでの倒し方。お前
が望むのを選べ。ちなみに走るつてのはハイリスクの方だから」

「…倒せる、とこいつのか？」

「わからねえからハイリスクつて言つたんだよ。失敗したら終了。
勝つか死ぬか。そんだけだよ。あー…なんだろう俺。達觀しすぎて
きたんだけど。今のテンション怖えー…、なんかこの状況悪夢に見
そうだわ。怖くて仕方ねえくせに、なあ」

「対戦…」

「どうする？俺はどれでも構わない。あの鳥むかつくから騙してや
りたい。だからなんだつていい」

「…ぬし、は…」

やぢりは何かを言いかけたが開いた口を、閉ざした。じばらく黙り
込み、考えるように目を瞑る。それから、開く。

おずおずと、とでも言いたげに、先ほどの偉そつた態度を引っ込め
て、小さく、呟く。

「あの鳥を、倒したい」

対戦は微笑む。

「了解、お姫様」

鳥はクエーッ！と高く雄叫びをあげながら、空をぐるぐると旋回する。森の中をその鋭い目で自分が狙うべきものを探す。万葉家の次期当主となる万葉やどり。それを攫うため鳥はいた。そして、いざとなつたら殺せ、といつ命令も鳥の中に存在している。それだけを考え鳥は探す。浚うべき、殺すべき、ものを。

他の事を何一つ考えず、ただ自分の遂行すべきことを。

『主人』の言葉に従い、『主人』の『言葉』の意のままに、『主人』の願いの通り、『主人』の望むことを。

それが鳥の化け物の存在する理由なのだ。

怪鳥江蛾留侘えがるたそれがその鳥の名前だった。鳥の姿を偽して、鳥ではなき物。怪鳥。

「うわあああああああつ…………！」

びくり、と自分が狙うべきものの叫び声が甲高く空にまで届く。大きな首をぐるりと回し、その声の出所を探す。ちょうど木々の境目に、微かに見えるその姿。攫え。できなければ殺せ。『主人』の命令が江蛾留侘を動かす。

ばさり、と朱色の羽を大きく広げ、体を下のほうへ向ける。ちょうど斜めになつた辺りで、羽を仕舞う。
やじつへと真っ直ぐ向かうなう。

今度こそ、仕留めるかのうまい手。

羽を仕舞い斜めにしたその体は、重力に従い落ちると共に、空気抵抗を少なくしそのスピードを速くする。

鋭い嘴で狙うように、方向を多少修正しながら風を切りやどりへと向かう。

ちようど向かつた先は、対戯のお気に入りのベンチの近く。
攫え、殺せ、攫え、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え、殺

ベンチの影に、それは、いた。

いきなりの乱入者に鳥の焦点はそちらに向ひ、ちよびせりを追つていた視界の真ん中に立たれて、化け物の鳥の単調な思考回路が混乱する。

一瞬だけ、鳥の体が揺らした。対戦に走り、と鳥を睨み一歩ながらその動きを見極める。

「俺流ペテン術、『どんな相手でも観察すべし』……」

化け物の鳥はやどりを狙つてきた。それはやどり自身も入れていて、初めて見たときも鳥はやどりだけを視界に入れて、対戯のことは見向きもしなかつた。

つまり自分の存在は鳥にとってどうものものなのか、と考えた。

邪魔な存在？殺すべきもの？必要のない？考えてみたが当てはまらない。それで、考えて考えた末の結論。

鳥にとつて自分の存在はないとされている。

見えているいの問題じゃなく、鳥にとつて対戯はそちらへんの石こりと同様の存在だということ。

つまりどうでもいい。それだけ。

かなりむかつくような結論だが、ちょうどいい、と対戯は思つ。

それだつたら無理矢理自分の存在を認識させればいい。

石こりだつて投げられればそれ相応の反応を人は返す。当たると痛いし、時には傷つく。それに人だつて殺せる。

もし眼前に取るに足らないはずのものだつたものが、存在を認識するしていなかつたものが現れたら、どうするか。

もちろん、慌てる。

「クエーッ！－！」

「黙れええええつ！－－－！」

怪鳥江蛾留侘は大きく口を開けて威嚇する。邪魔だ、どけ、消えろ、とでも言つよつ。に

その嘴で対戯を食いちぎりんと言わんばかりに対戯に襲い掛かつた。きつと化け物の鳥にとつて自分は弱くて脆いものにしか映らないだらう

だけど言いたい。石こり舐めんな。

「これでも、喰らええええつ！－－－！」

言葉通り、文字通り。その鳥に向かつて、投げ込んだ。

取るに足らない路傍の石を。認識すらされない石こりを。

その、大きく開かれた口に向かつて。

投げられた石は上手い具合に鳥の口の中に入り込む。その石はがき

ん、と嘴と嘴の間に挟まり、口を閉められなくなる。

いきなり起こつた不測の事態に、鳥はバランスを崩し、対戦のすぐ横を通り抜けて地面に激突する。

嘴の石を取ろうとするが、取れない。じたばたともがくがぴつたり嵌つたそれは少しも動かなかつた。

対戦は急いで重いベンチを引きずつて、鳥の足の上に倒す。今度は鳥はクエーッ！…と叫びながら足もじたばたさせた。

「チョックメイト」

やつきつた、とでも言いたげな顔で額の汗を拭う。石を外そつと地面に嘴を突き刺したり横に振つたりしてゐる鳥は足のことには頓着だ。

ダチョウのように発達している足を無防備に晒しながら、ひたすら自分のしなくてはいけないことのために嘴の石を取ろうとする。足を封じてしまえばその朱色の翼を羽ばたかせても足に置かれたものが邪魔で飛べない。かといってその翼ではベンチをぶかすことさえできない。

「俺流ペテン術、『騙しならぬ騙し討ち』」

完璧だ。やりきつた。てか疲れた。すじくテンションがあがつていてんだな、と自分でも思う。怪物相手に嘘つくとかまじありえねえ。どんだけ頑張つたんだ俺。久々だこんなに疲れたの。怖くて死にそうだつたのに一時のテンションまじすごい。意味わからないこの状況でここまで出来るだなんて、ペテン冥利に尽きる。

「…やどりー、そこで何突つ立つてゐんだ。さつさと来い。これどうにかしてくれ」

「ど、どうにかと、何を申すのじゃああ！…」

木の陰に隠れて怯えている幼女一名。

「そ、そこまだ動いておるのぢやぞつ！？怖いに決まつておるわ！」

「あーまあそりやそうだよなあ…でも俺もじうすりやいいかわかんねえんだ。え、なに、処理しあつてか?無理無理。」

ふはや あああ葉様ああああ

だから誰なんだその葉桜つて。

そにヤニで泣いて呟んでせその葉様のんとやらには来な

1

声が聞こえたがぶんぶん、と周りを見ても人影が見当たらない。え、あれ幻聴？と対戯は思つたが、不意に嫌な予感がして、上をむけば、そこには黒髪でボニー・テールの女が。

三

「空から降つてくるの流行つてんのかよつー?」

思わず突っ込んだ。いや突っ込むべきだよなこれ。

内申パークリながら空から落ちてきた女を見る。女は対戯の上に落ちてくるでもなくすたつ、と優雅に地面に着地する。それから頭上で括られた長い黒髪をふあさつとかきあげながら立ち

上がる。どうやら年上のようで、大人のような雰囲気が漂っている。ちなみに、言ひと美人だ。

首元まである黒いシャツにジーンズを履き、背中には長い棒りしきものを布に包み背負っている。

どうにも落ち着いたような雰囲気がある人で、それで……、

「やどりさまああああああこの葉桜、心配で心配で……ああああああお怪我をしていらっしゃるのですね、なんていうことを……やどり様の美しくも柔らかである肌を傷つけるなんてなんということでしょうこの葉桜がいながらにしてこんなことにならうとはああああ真に申し訳が立ちません現当主様になんと言えぱいいのかこの葉桜もう腹を搔つ捌いて……！」

……うん、幻想抱いてたよ。もちろん、さつきあんなに叫びながら落ちてきた人が落ち着いた雰囲気があるわけないじゃないか。気づいてた、けどなんだよこれ。キャラが痛すぎる。

ふつと暗い笑みを浮かべながら対戯はテンションの違いすぎる一人を見つめる。

葉桜といつらしい女は叫びながらやどりに掴み掛からん勢いで半泣きで捲くし立てる。一方のやどりはやどりが来てくれたことに喜びながら安心しつつも若干引いていた。

「せ……切腹はしなくてよい。や、それで葉桜、頼みがあるのじゃが

……、

「はいっ……この葉桜、やどり様のためならなんなりと……」

「あれ、どうにかしてほしいんじや」

「」

あれとは?と振り向いて、初めて気づいたような顔で化け物の鳥を見た。

「「」、これは怪鳥江蛾留侘！？！？そつか、これがやどり様を攫つたのですね……ああこの憎き鳥の分際でやどり様に触れるとはいつたいどうこう見で……んつ！？」

そこで葉桜の視線が対戯に向いた。いきなりのことびくつと肩を震わす。

「あなたですか」

「へ？」

「やどり様を攫つたのはあなたですかって聞いてんだよこの野郎！

！？」

「まさかの予想外に俺巻き込まれたつ！？」

いやいやいやいや何言つてくれちゃつてんの「」の人、と慌てていると葉桜は背中の長い棒をその背中から降ろし、布を取つた。そこから出でくるのは鋭利な刃。
薙刀。
なぎなた

それを、対戯に向けてくる。

ええええ。

「ストップストップ！！俺何もしてねーから！！人攫いとかしてねえし、幼女に興味がある危険な性癖もつてねえから！！」

「何を！？やどり様に対してもうこう目で見れないといふのか！？」

「お前怒つてるとこり違つくなつてる！？」

完全に周りが見えなくなつてる葉桜に、対戯は後ずさりながらも説明しようとすると、聞き入れてもらえない。

先ほども死ぬかどうかの瀬戸際だったのに、今もそんな状況に陥っている。今日は厄日か？と泣きたくなる。

「ちよ…、葉桜…！」

「お下がりくださいやどり様！…」の葉桜が、この不埒な悪党をぶつた切ってやりましょ！」

やどりの言葉も聞かず、間違った敬語を使いながら薙刀の刃を向けてくる葉桜。え、これ俺ピンチじゃね？とか思いつつも、体が動かない。

とこりか、むかついてくる。

命賭けて鳥を騙しぬいてやつたと思つたら今度はやどりの従者っぽいのか？冗談じゃねえ。

まあいいか。

自分本位の行動がそもそもキャラだ。遠慮することはない。

「あの人あ、あんたつて馬鹿？」

「は？」

人助けなんて柄にもないことしたばっかりに刃なんて向けられてさ。これでも危険だつたんだよ。それなのになんで怒られる必要があつて憎まれる必要があつて殺される必要があるわけ？

くだらなくてうざつたいし面倒くさい。

確かに俺は嫌われるべき人間だけどさ、これでも必死に守ろうとしてたんだぜ？子供の癖に大人ぶつてるあの小さな少女を。

嫌われるくらうなら構わねえぞ、でもよ。

「…もし、それで俺を刺したとして、その光景をやどりに見せる気が？」

「つ…！」

「やどり様やどり様言つてくせにお前はちつとも何一つ考えていなーな。怪我とか攫われたとかその事ばっかり連呼するくせに肝心なことはちつともだ。少しば思はないのか？攫われて怯えただろう

とか、殺されかけて怖かつただろうとか。俺に構う前にちつとはそんくらいの思いやりつてのを見せてみろよ葉桜さん、見苦しいよ守れなかつたからつてそんなことすんの」

こんなのは嘘をつく価値もない。怒つてゐるんだ俺は。

口喧嘩なら負けやしないし、今回のは、嗜好を変えて『正論』で勝負に出てみる。

「俺が悪党だつて決め付けて罪滅ぼしのつもり? せつきつて見当外れだし無意味だ。その上迷惑。こつちは必死にさつきまで走つていて疲れてんだよ。あんたが出来なかつたやどりを守り続けたのはこつちなのにさ、何も聞かずに薙刀向けるつて人としてどうなのはつきり言えば最低だよね。少なくともあんたの大切なやどりの話さえも聞いていないんだから」

「つ…え…あ…、ああ…、」

「結局あんたがしたかったのは勝手な自己満足。やどりがあんたを呼んだのだつてあの化け物の鳥をどじうにかしても「らうためだつたのにあんたは何勘違いしちやつてんの? けつきょくあんたはやどりこと何一つ考えてないわけよ。まったく、見苦しい見苦しい見苦しい。勝手な正義を振りかざして何がしたかったのかわからない。なさてその薙刀でどうするの? 俺をぶつた切るの? それをやどりに見せ付けるの? どうしたいの? 壊められたいの?」

「だ、黙れええええっ!……………」

あ、やべ、やつすぎたか?

ふ、と正気に返る。今まで口こじしていた言葉を思い返し、酷いこと言つてゐる俺、と氣づく。

イラついていたからと言つて、さすがに自分でも思つてらつこには女に對して傷つけるようなことを言つていたと思つ。

あの化け物の鳥のために頭を使つていたから、いろんなストッパー

が外れていたんだ。

やばいどうするか。いつもはぎりぎりで止めてたりするけれど、今回のはそれも出来てない。

「うう わー…、どうするか。

「わ、わたし、は…わたしは、そんな…！そんななんじや……！」

「あー…わかった、なら早くやどりのとこに行つてやれ。それとあの鳥どうにかしてくれ」

「わた…しは、わたしは…！そんな、わたし、は…！」

「あ、やべ、聞いてないわ、これ」

微妙に沸き起る罪悪感。さすがに女を追い詰めて喜ぶようなサディストではない。むしろ紳士的でありたいと思つてゐる。…嘘だけど。これは本気でぶち切れてその薙刀で切られるんではないか、と思うとなんだか氣分が沈む。怖いといつより、さつきまで上がつていてテンションが下がる感じだ。

どうするか。

「…う、」

「う？」

「うわああああああああんつ…！…！」

…………え？

…………えええ？

大人っぽかつた雰囲気を打ち消し、葉桜は耐え切れなくなつたとでも言つたげに酷く大きな声を上げて泣き始めた。

えええええ、これ、かなり予想外なんだけど。

「すみませんすびばせんなんん、わ、わだじのぜいでえええつ！

「――」

「あ、あんた大人の癖になに泣いてんだつ――」

「わだじまだじゅうやむんぞこでずひひひ」

「まさかの俺より年下と言つ新事実つ――?」

嘘だつ――?」んなさつきまで大人の色氣的なを出していたのにつ――?身長だつて俺より高かつたはずなのに……、ちくしょう。

「あ、あの……葉桜……」

いつの間にかいつりへと來ていたやどりが、対戯の足にじがみ付きながら泣き喚く見た目年齢20歳の13歳に対してもずおずと言つ。

「あんな、来ててくれて私は嬉しかつたぞ?だから、その……泣かないで、欲しい」

「やどり……やま……?」

「葉桜は、美人だから、笑つて、ほし……――」

顔を真つ赤にして、例のあの偉そうな態度をおぐびにも見せず、に葉桜にそう言つやどり。

ああこの子根はいい子なんだな……と対戯はほのぼのとした気分になつた。

……ん、でも、

「つてかお前ら何者なんだよ……」

従者みたいなを引つさげた次期当主とかなんとか言つやどり。

背中に薙刀を背負つた20歳に見える13歳。

そして今もなおじたばたとしてる化け物の鳥。

そろそろ誰か説明してくれ、と、抱き合つてこるやどりと葉桜を半

目で眺めた。

「真に、申し訳ございませんでした…」

そう言つて、正座の状態で地面に手をつき、深々と頭を下げる葉桜。

「こや、やうこりのこりか…」

そしてそれをうんざりした顔で止める対戯。

傍から見れば高校生相手に大人が何やつてるのだといつ話だがいかんせんさつきまでの内容がアレなのだ。まとめると、幼女が落ちてきて化け物の鳥もやつてきて倒したら見た目20歳の13歳が降つてきて…。

あやべ、意味わかんねえ。

それから、いきなり切れて、薙刀をこっちに向けてきた葉桜に、対戯が逆に切れた拳句、大泣きされ、この状況に移る。

「やどり様のお命を助けて頂いたのにそつとも知らず私はなんて失礼なことをしてしまったのでしょうかあああもうこりなつたらこの腹搔つ捌いて…！」

「癖みたに切腹しようとするなつ！？俺性格良い方じやないけどそこまで極悪でもねえから…！」

「ではどうすればいいといつのですか…！」

「どうもしなくていいから落ち着けええつ…！」

「めんどくせえ…！」「こつす！」「めんどくせえ…！」

説明を求めようとしても目の前の女は本気で天パつてこるよつだつ

た。責任取るための切腹？そんなグロいもの見せるな！！対戦は頭が痛くなつてくるのを感じた。
もうやだなにこれ。

いつその帰ればいいと思つただが、どいつもも説明をしてくれないと気持ちが悪い。

あの化け物の鳥の「いや、やどりの」と。どいつももおかしそうなこの状況。

「なーやはどりー。」「れどりにかしてくれよ…」

「は、葉桜は、真面目すぎて時折爆発するんじゃ…。ちゃんとさきになつたら、私でも手がつけられん」

「まじかよ…」

これじゃあ話が進まないじゃないか、といひながらの方が泣きたくなつた。

確かに先ほどはイラついた。いきなり刃物を向けられるとか、はあ？意味わからんねえ、ふざけんな、とか思つたが、さすがにそれを引きずる程でもない。

…殺されそうになつたくせに引きずらない対戦も対戦なのだが。だから別にもう謝られなくとも構わないし、逆にそこまでされるのも居心地が悪い。

真面目つて難儀だな、とため息を吐く。

ん？またよ、と対戦は思つ。逆にこれを利用すればいいんじゃないか？

「…つまり、お前は何か罪滅ぼしをしたい、とこつわけか？」

「…はい…やつてやります」

いよいよしゃべり「オオオオオッ！！！内申でガツツポーズをとりながら、対戦はさらに言葉を紡ぐ。

「俺としてほむつひうだつて構わないから、正直何もしなくていいんだけど、お前がそこまで何かしたいといつんだつたら俺も考えなくはないな」

「ほ、本当にりますかっ！」

「あああ、もむりん。やつぱり罪悪感つてのは苦しいものだからな。わかるともちりん。だから俺は別になんだつて構わない…けれど、考えてみるとやつぱりどうしても聞きたいことがあるんだよな」「はーーー！私でよろしければなんでもーーー！」

やつたかかった。隣でやどりがジト田でいひりを見てくれるのは気のせいだとしょひ。

かなり嫌な言い回しだったのに葉桜は心底キラキラした田で対戯を見てくる。そこで確信した。

真面目だけじゃなく異常に純粋だ、この子。

「まず、あの鳥の化け物はなんだ？」

未だ放置され続ける化け物の鳥を指差しながら対戯は尋ねる。鳥はもう疲れたようでぐつたりと地面にへばりついていた。

ああ、と今更思い出したかのような声を上げる葉桜。

「はーい、あれは怪鳥江蛾留侘えがるたです。古より言靈遣こじこまいの従者として付きて従つてきたものなのです。ですが最近はめつきり数も少なくなつてきつてあります。どうやらこいつはやどり様を狙うものの仕業で、無理矢理言靈で思考回路を遮断し、やどり様のことだけを考えるようにさせてしまひ、その上での命令、でしょひうね。あ、あなたにも見えたのはやどり様に触れたからでしょひうやどり様にかかつていた人から認識させなくなる言靈の影響を受け、あの江蛾留侘と同調してしまったわけですね」

「は、おこ、ちよつと、ちよつと待て」

今なんて言つた? はあ? 言靈ちよつと待て、確かにそれはやぢりも言つていたけども、どうこつことだ。今、眞面目な話だよな?

「も、もしかして厨一病患者とか?」

「はい? それはなんの病氣でしょ? うか?」

「いや、なんでもない、はは。あ、あのさ、その……言靈つて、なんだ?」

「知らないんですか? 言靈は、言葉に宿る力。発した言葉通りに現実とする力、ですよ?」

「いやいやいやいや、待て、待てよ、なんだそのファンタジー? やファンタジーと言えるのか? つていつか何だよ、言靈つて。」

「へ? ん……なんていうか、私たちは『言靈遣い』ですから、使って何もおかしくはありませんよ?」

「つ……! ?」

どうでも嘘をついているようにも見えなかつた。かといって、頭がおかしくなつたようにも見えない。

あくまで普通で通常で日常的に、葉桜は話してくる。
あの時も……

『もつと速く

「…………つ……! ?」

まじか? まじでか? 確かにあの言葉の後に、俺の足は不自然に速くなつた。

偶然でもなんでもなく、あの言葉のせいで?

言靈？

「…お前たちは…何者だ？」

「何言つてゐんですか？言つたでしょ、」

「言靈遣いであります」

「う…………」

まじか？まじなのか？これを俺は信じるべきなのか？

そもそも当たり前のよう言つてくる葉桜。自分たちは言靈遣いだと。言靈を遣うものだと。

ありえない。この現代にそんな変な能力的なものがあるのか？けれど、相定したくとも心当たりがありすぎだ。

「対戦、どうかしたのか？」

「やどり…、俺のキヤパシティそりそろダウンしゃつだよ…」

「やや、ややぱしてい？」

「ええと、言靈遣い、ですか…、あの、それ、どうこいつ職業ですか？」

「…なぜに敬語になるのじや？職業と言つぱは…言靈が使える者を言つのじやが」

「スキル系統かよおい」

すかね？と首を傾げるやどりをつやせみたいだな、とほのほのと思いつつも、現実的にありえない話のせいで、思考が拡散し、現実逃避の方向に逃げ込む。

超能力とか、靈能力とか、それに近い言靈遣い。

ありえねえ、と頭の中で繰り返し呟く、が、冷静な思考がこれは本

当のことだ、と静かに答えを出している。

認めなくてはいけない。聞いたのは対戯自身なのだから。

はー、と大袈裟なため息をひとつつき、頭をがしがしどかく。深く考えないようになろう。どうせもう俺とは関係なくなるんだ。

「まあ、信じるにしても、なんか頭の中ふわふわしてるよ‥‥、ところでその言靈遣いつてどうやつたらなれるもんなんだ? やつぱり血筋? みたいなもんか?」

「ぬ? 違うぞ、本来人間と言つものはそもそもと言靈とこつものが使えるものじゃ」

「へ、どうこいつことだ?」

「例えば‥‥、『頑張れ』と言つと、頑張りたくなる。『ありがとう』と言われば嬉しくなる。『じめんなさい』と言えば許したくなる。これだつてもともとは言靈の力じや。優しい心は言葉にだつて乗る。対戯の言つ嘘だつて言つなれば言靈と似ているようなもんじや。ただ、言靈と言つ概念を自覚しておれば、私の言つたように肉体を強化する」とや、物理的に何かをしたりすることも可能じや

「物理的?」

「炎を出したり水を出したり‥‥、

「それもはや魔術じやね?」

そつ言つとやらどは魔術に例えるなぞ心外じや、とでも言つよつて頬つぺたを膨らました。
失礼に値するのか。基準がわからない。

「‥‥ん、ちょっと待て、概念を理解すればなんか、そつに「變なの使えるんだよな」

「まあそつじやな。言靈の存在を理解してしまえば、言靈遣いとして資質があるものは使えるぞ?」

「俺概念理解しちゃってね?」

。

「そういやそうじゃな」

「ですね」

「予想以上の反応の薄さつ！？」

「まあ、かといって一般人にはそう使えるものでもないしか。余程のことが無い限り言靈を発動させたり使いこなすことなどありえん。安心しててもいいぞ？」

「まあ、言靈という概念と言うものを知らなくても、最初から素質ある人は無自覚無意識に使えたりしますから…、そういうのも無いらしいし大丈夫でしょう」

「…んなら、いいんだけどわ」

「…ことなく腑に落ちない点があるが、まあいいとしよう。さつき決めただろ、深く考えるなって。」

自分に言靈などと言つものが出来るとも思えないし、ただのペテン使いでしかない俺にはそれを使う理由も無い。

一般人なのだから。自分は。

「…ところであの鳥はどうすんだ？」

「ああ、江蛾留侘は万葉家に持ち帰り、刻まれた言靈を解除します。操られていただけなので、元を正せばちゃんと氣の優しい鳥になりますよ」

「あのカラーで氣の良い鳥、か…、まあいいけど。ついでに聞くけど、万葉家…つて？」

「万葉家はやどり様の実家…、言靈遣いとしての名家です。やどり様はその次期当主で…、そのせいで狙われることも多々あります…、あ、ちなみに私は楠木葉桜と申します。楠木家は代々万葉家に仕える身なのです」

「いわゆるぼ、ぼでーがーど、だな！！」「ボディーガードっていいたいのかそれ

ああもうなんだかどつと疲れた、気がする。

頭の中がパンクしそうだ。聞いた量じゃない、その内容のせいで、思考が回らなくなる。

言靈。

ああもう意味わかんねえ。わかるけどわかんねえ。

ふらふらと対戦は近くの木に寄りかかる。それから腕を組んできゅつと目を閉じた。

整理しようと思つ。まずは言靈の存在。これは実際に体験した上で聞いたのだから信じるほかない。疑いたくても疑う理由も無い。非科学的だ、と切り捨てることも出来ない。

現実に起こつてている。これは信じる以前の問題なのかもしれない。あの鳥だって、その言靈遣いのことを考えれば、そうおかしくないことなのかもしれない。だって言葉で何かが動くらしいあいつらの世界の中にはいたつて不自然でもなんでもない。非現実的なことに非現実なことは、同じでなくとも混ざり合わないわけでもない。理解しなくてはいけない。そうだ、理解しろ、それから。全て忘れてしまえば良い。

「あー、もう大体わかつた。もついいだり、帰れ」

「帰れ…！？いえ、私はまだ…！…」

「罪滅ぼし的には十分だから。俺はもうだいぶ満足したよ。やべり怪我してるんだろ？帰つて治してやれ」

精一杯の、人のよさそうな笑みを浮かべてみると、すると葉桜は瞳を潤ませて、酷く感謝したような顔を浮かべてきた。

対戦は内心でたじろぐ。先ほど酷いことを言つたといつ自覚はあるが、目の前の少女はそれを自覚しているのだろうか。純粹すぎるの

は少し恐ろしい。

嘘つきを信じてもいいとほも無いの」と

「あ、あの、対戯…、
「ん、どうした？」

「いや、その……、……ありがとうございます、な

「六、」

やどりは柔らかく微笑んで、そう、言つた。

「うん」

対戯はつい曖昧な返事を返す。やどりは訝しげな顔をしたが、すぐに笑顔に戻り、葉桜に行こうか、と手をとりながら背を向けた。葉桜ははい、と笑いかけながら、鳥のほうに近寄り、なにやらぶつぶつと呟いている。それからベンチをどかし、嘴に挟まつた石を取る。すると鳥はばたばたと羽ばたきながら、やどりには見向きもしないで飛んで行ってしまった。

それから二人は歩き出す。ときたま振り返りながら手を振るのを、対戯はぼーっとした目で見ていた。機械的な動作で振り返すやどりたちの姿が見えなくなるまで、対戯は立ち尽くしていた。先ほどの台詞を、頭に反響させながら。

先ほどの騒がしさは消え、元々の森の静寂さが戻る。

「…また、ありがとうございます、言われた…、」

ぽつり、と零れるよつて呟く。

二回目だ。今日代夜にだつて言われた。それなのになんだろう、こ

頭に不愉快な反響音と共に繰り返し再生される、その声がなぜか頭

の中にしつこく留まり続ける。

たつた一言なだけなのに。

「なんか気持ち悪い……」

さつさと全部忘れてしまおう。頭をがしがしこきながらそう決め
る。自分には自分の日常があるのだ。今日たまたま介入してしまつ
ただけで、本来ならば知ることもなかつた立ち位置なのだ。
知るだけ知つて後は忘れる。無かつたことにしてしまう。卑怯だろ
うか。でも、どうだつてい。俺の世界は俺だけのもの。
そう、それだけなんだ。

+++++ +++++ +++++

「へえ、なるほど……虚室対戯、ねえ」

見知らぬ女が対戯を屋上から見下ろしていた。大人として成熟した
色気の漂う風貌の女は、面白いものでも見るよう口元を歪めてに
やり、と笑う。かつ、と革靴の音を響かせてくるりと背を向け歩き
出す。

「いいもん見つけた。あれは面白い。対戯、大疑ねえ、良い名前
だ」

あれ欲しいかもなあ、とくづくづと喉を震わせ笑う。細められたサ
ングラスの奥の眼には怪しげな色と共に鋭さを持つた何かの暗い光

が紛れ込んでいた。

「嘘つき嘘吐き嘘憑き……嘘は憑いてまわる。過去も未来も現在でさえ。それをほぼ才能でやつてみせる、……面白い。面白い面白い面白い。あれ、買えないかな。あたしだつたら作り上げてあげれるのに」

傍から見れば意味不明な言葉を口から吐き出して、またにやり、と笑う。

「作りあがつていいくというのも、それもまた一興、か」

そう言つた顔は、酷く楽しそうで、ぎらついた瞳を隠そうとせず、懐からタバコを取り出して、火を、つけた。

+++++ + + + + + + + + + +

「言靈？」

帰り道に言靈つて何かわかるか、と聞くといきなりどうしたの、と代夜は不思議そうな顔をした。

まだ幼さが残る顔ですんな表情をされると、同じ年かたまにわからなくなる。

「いやいや、別になんでもないよ、ただちょっと聞きたかっただけ」

下手に嘘をつくとの親友は簡単に見破つてしまつて、言葉を濁

すことで踏み込ませなくする。

たまにこれ心読んでるんじゃね?と思つくらい鋭いときがあるが、こつすればその鋭さのあまり踏み込めない事情だと特に聞いてこない。

そんな代夜を内心ではす“いな、と素直に思つていた。

案の定、多少ジト目で見つめてきたくらいで、何も聞かなかつた。

「…言靈とは、日本において言葉に宿ると信じられた靈的な力のこと。言の魂と書いて言魂とも書く。声に出した言葉が現実の事象に対しても何らかの影響を与えると信じられ、良じ言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起るとされ、祝詞を奏上する時には絶対に誤読がないように注意された。結婚式などでの忌み言葉も言靈の思想に基づくものである。日本は言魂の力によつて幸せがもたらされる国「言靈の幸はふ国」とされた。…以上」

「さすが人間辞書。いや、辞書人間?」

「どつちでもいいよ…」

「いやいやお前記憶力もつ異常だぞ?なのにテストじゃわざと悪い点取るからなー。お前なら満点も楽勝だつてのに」

「えらく僕を褒めるね…、それにご機嫌だ。いいことでもあつたの?」

「…は?」「ご機嫌?俺が?」

「そうそう。なんだか嬉しそう。そうでなきや僕を褒めないよ。…

あれ?なんか自分で言つて悲しくなつてきたんだけど」

うーん、と悩みだした代夜を尻田に対戯は考え込んだ。

「ご機嫌?嬉しそう?どうして?思い当たる節といえど先ほどの言靈遣いやらなんやらのことだけど、そこに嬉しいことなんてあつたか?対戯は本気でわからなさそうに首を傾げる。

幼女が降つてきて、変な怪物がやつてきて、戦つて、倒して、そしたらまた変な女が降つてきた。あれ、おかしい。いいことなんて一

つもない。

…やつぱり機嫌よくないんじゃ…。

「対戦はさー天邪鬼だかんねー」

「…は、また言つか。いいかげんやめやつし言つての、

「ツンデレのがいい?」

「…天邪鬼で」

「天邪鬼はねー、本心とは逆のほうを言つちやう妖怪なんだよ

「知つてるけど…は？俺別にそんなことしてないぞ？」

「対戦はねー悪いことに気持ち的にも嬉しいはずのことを嫌なこと

だと考えちゃうんだよねー」

「どういつこと、だ？」

「せりに自覚なし。もう悲しすぎるよなんかー」

「はあ？」

意味わからんねえ殴るぞお前、と睨みつけながら言つと、あやーこわーい、などと茶化された。

へらへら笑つて代夜は謝る。が、嘘だ、とか冗談だ、とかは言わない。対戦はわかつていた。こいつは正直なだけ、と。正直者は本当のことしか言わない。ただ言えない事は隠すだけだ。その分代夜は自分とは正反対だ、と思う。

なんだかむかついたからばかり、と対戦は代夜の頭を殴りつけた。いつたあ、と情けない声を上げる代夜。

ふん、と対戦は怒つたような顔で代夜より先に進み始める。待つてよお、と弱々しい声が後ろから降つてくるが、無視だ無視、と振り向かず歩いた。

そんな時、だつた。

ばたん、と何か倒れる音が対戦の耳に聞こえた。思わず振り返ると、

そこで、なぜか代夜が倒れていた。

「…は？」

転んだのか、と思いきや、なぜか起き上がりない。
どこか調子が悪かったのか、と慌てて駆け寄ろうとしたときだ。

「『近づくな』」

声は違うはずなのに、どこかで聞いた響きだと、思った。
瞬間、体はがちり、と鎌で雁字搦めで縛られたかのように動かなくなる。

「つ…！」

この感覚に、どこか、覚えがあった。
体の内部に違和感。どこかがぎち、と締め付けられる。動けない。
足も、手も。動くのは口だけ。
これ、は。

「お前だな？俺の江戸留侘を邪魔しちゃつてくれたのは」

口調は軽いのに粘着質を纏わりつかせた声で、対戦の田の前に現れたのは、金髪に、顎に鬚を生やしたパツとみて柄の悪そうな男。口調とのギャップに一瞬背筋が凍つた。

ここにこと口元だけで笑いながら、ステップのように足で軽く跳ねながらやってくるそいつは、得体の知れないもののよつた気をする。

「困るんだな、勝手に邪魔してくれちゃあ。せつかく上手い具合に
いつてたのに、わざわざ俺が来なくちゃならなくなつただろ？…ど
う、責任、とつてくれるんだ？」

やばい、これはやばい、本気でやばい。頭の中の警報がフル稼動で
鳴り続ける。一歩一歩近づいてくる男は、時計の針のようにカチコチ、
とカウントダウンをしていくようだ。

もちろん向かうのは死。

なんだよこれ、俺また命の危機？とふざけて考えてみる、けれど笑
えない。

どうするんだ、時間を稼げ、俺。相手の動きを、少しでも、
だめだ、無理だ、そんなの、こんな、状態で、
もう無理だ、このまま殺されるんだ。そう、思った、対戦が本気で
そう思った、ときだつた。

「つああああああつ……」

だん、と男の体のバランスが崩れる。倒れてたはずの代夜が男に体
当たりを食らわせていた。

対戦は半ば呆然としながらその光景を眺める。

「対戦、逃げよつ……こつなんかやばい……」

そういうて代夜は大戦の腕を掴み、駆け出す。いとも簡単に体は動
いた。

どうして、と思う。なんで、動くんだ…？走りながら頭をフル回転
で動かす。

言靈あの男がやつたのは体を固めたのではなく動かなくさせると
いつことだつたら？

つまり一時的に体の動きを止めるが、それは自分の意思で動けなく

するだけであつて第三者による何かの衝撃で動けるようになるのではなくことなら。

「お、前倒れてたんじやつ……？」

「なんか頭にぶつけられて倒れたけど氣を失つてない……！」
あのヤバイ人誰！？知り合い！？またなんか変な嘘ついてちょっとかけたのつ！？」

「んなことしてねえよ！俺だつて初対面だつての……！」

氣を失つてなかつた？はて、と思う。倒れただけならあの言靈の声が聞こえていたはずだ。そのせいで動けなくなつて、ここまで駆けてくることなんてできなかつたんじや。

もしかして、あの言靈は対象を設定しないとできないんじや？そう、ふと思つ。標準を合わせるように設定しなければ、言靈の効果を相手に浴びせることができない。現に代夜は動いていた。

それに代夜に対しては頭を殴つて氣絶させたということは『言靈』と言つ存在を、先ほど知つた俺にはともかく、一般人の代夜に対してはあまり知られなかつた、ということ。

考える。この現状を打破する方法を。あいつは追つてくる。どうすればいい？

どうすれば、いい？

「『速度を上げ突き抜ける』」

がくん、と代夜の体が揺らいだ。

いつの間にか代夜を対戦が引つ張る形になつていたので、思わず自身もバランスが崩れる。

「……え？」

掠れた代夜の声が、ただ疑問の音を小さく漏らした。
世界がスローモーションのように崩れていく。目に映るのは、地面へと倒れていく、代夜の体と、

赤い、鮮血。

「し、ろや？」

わからない。意味が、なにも、わからない。

崩れてく風景がいやに現実味を帯びている。嘘だ。全部これは嘘なんだ。そうだろ？ そうじやなきや、なんなんだ。警報が、鳴り止まない。危険、危険だと。

崩壊、後悔、崩れて、崩れて、崩れて、何も、そんな、嘘だ、こんな、壊れて、壊れ、て。

「あ、はははははははっ！！！当たつちやつたな、簡単に入つて死ぬもんなあ？ パチンコ玉でこれだ」

なぜ男は笑つてているのだろうか。人が倒れたのに、血を流しているのに。

今にも、死んでしまいそうだった。なのに、どうして、平然としていられるのか。

警報が、アラームが、頭の中に響くのが止まない。

「たい、ぎ…、」

弱々しい声が、代夜の口から漏れるように溢れる。

「つあ、しろや…、」

「はや、へ、
「え？」

「はや、へ、に、げて…」

がん、と、対戦の頭の中の警報が、叩き壊される気がした。
男の笑い声と代夜の口から漏れる今にも途絶えそうな息。
狂つてゐる。こんなのが、おかしい。

こんなのが、間違つてゐる。

「あ、」

「こんな風に、回る世界も、

「ああ、」

それを受け入れてる奴らも、

「あああ、」

それを日常と、じまかしてきた、自分も、

「ああああ、」

全部、

「あああああ、」

間違つてゐる。

だつたらひやへ、じてなもの、壊してしまえぱーいか。

叫びを止めた対戯が、ふらふらと、前へと歩き出す。

西田平一に口元を正され、笑って口を閉じた先に、不意に笑って、怒りや悲しみよりも先に明確な、殺意を目の前の少年が出してくることだ。

「なんだ、その顔は、お友達に穴あいてそんなにショックだった？ そうか『めん』『めん』でもれ、彼のほうが悪くないか？ 俺の邪魔をして、こんな……」と……、「

喋っていた口が不意に、止まる。

眼は虚ろながらもひたすら男を映し出し、無表情ながらも、殺意の溢れ出すその姿。

普通の高校生には出せるものとは到底思えなかつた。そこまであの友人が大事だつたのか?とつい考える。
男にとって、そんなものはどうだつて良かつたのだが。

「代夜は、巻き込まれるはずじゃ、なかつた」

ん？

「俺だけなら、まだ、良かつた、けど、お前は、間違えた」

かつり、と一步踏み出す。

それからゆっくりと、対戦は口を開いた。

端渡代夜という少年は、良くも悪くも、対戦とは正反対な人間だった。

嘘つきと正直者。これだけの違い、これだけの大きな違い。

正反対の癖に、居心地が良かつた。逆の存在の癖に、酷く落ち着くその場所。親友と名づけるべきなのか、これまで唯一、対戦が守らなくちゃいけないと、思ったその人。

背筋をぴしりとして歩くくせに、ついついたらすぐ壊れてしまいそうで、酷い言葉を吐けばすぐ泣いてしまいそうな顔のくせに、いくら、どんな言葉を吐いても、彼は顔を少しも歪めることなく、飄々と笑つてみせる。

ある意味それは、対戦にとつて必要な存在だった。彼だけは何をしたって一変わることはない絶対的に、対戦にとつて存在しなくてはならないものだったのだ。

だから、今この状況を対戦は、理解してはいけないと思つていた。唯一絶対、変わることのないと断言できる目の前の少年から、鮮血が溢れ出し、その存在の終焉を迎えることなど、あつてはならないからだ。

そう、あつてはならない。

けつして、あつては、ならない。

「ははは、なんでそんなにキレてるんだ? おいおい、今は自分の命の方が危ないんだぞ? まったく、そんなにお友達ゴッコが楽しいわけか? 近頃のガキにしたらいい方なのかな?」

「……」

「まあなんだつていいさ、じちじらも本来の目的があるんでね。お前が助けた女の子を俺たちのところへ持つてこなくちゃいけないわ

けよ、わかる？お前のせいで台無しになつた計画が、や」

「……」

「だんまり決め込むわけ？まあいいさ。俺たちはお前が邪魔だつて踏んでる。なんたつて言靈遣いでもないお前があの江蛾留侘を倒したつて話、かなり話題になつてるんだよ。これでもし、あいつがお前に興味か何かを持つて……いや、これから死ぬ奴に聞かせる話じやないな」

「……」

「最後まで何も言わないのか？ふん、なら、せめていい悲鳴でも聞かせてくれよ、俺だつてすぐ向かわなくちやいけないからな。恐怖のどん底にでも落ちて悶えながら、死ねよ」

「……が

「……ん、」

「格下が」

ぴたり、と男の動きが止まる。

対戦の口から、温度のない言葉が次々と溢れ出す。

「弱者には強氣で戦いに望むか、典型的な下っ端だよなお前。どうせならさつきのパチンコ玉で俺たちが気づかれないうちに殺せばよかつたんだ、なのにお前はわざわざ俺の前に出てきた。それからグダグダと喋りやがつて、自分が優位に立つてるからつてそんなに余裕を振りかざしてさ、そんなの俺は見てもなにもすこいと思わねえよ、冗談じゃねえ。それほどまでに自分の力を誇示したいか、格下風情が」

「……なに、言つてんだ？そんなこと言える状か？」

「黙れ。代夜、……関係ない一般人巻き込んだ拳銃どつこいつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かつた。それなら、まだ良かつた。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かつたんだよ」

「はつ、…意味わからない、ね。それはお前の責任でもないといえるのか？」

「ああ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじやないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、

こいつは、代夜は、何も関係なかつた。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、」

「「じちや ごちや うえせえな…、そんなにお友達と一緒にいたいんだつたら、すぐに俺が送つてやるよ。あの世にだけどな」

口元をひくひくとさせながら、あくまで余裕の姿を変えようとはしない男。だけれど対戯の言葉はかなり男の怒りの線に触れていた。けれどそれをおぐびにも見せずに、男はにやり、と笑つてみせる。今すぐにでも殺してしまいたい衝動に駆られていたが、それでは面白くない、と頭の中で誰かが囁いた。

恐怖でひたすら甚振つてから、残酷な方法で殺してしまおつと。

「ぐだらない」

「…ああ？」

「お前の攻撃なんか、俺に効くもんか」

「本気で言つてるのか？それは」

「本気で思つて何が悪い？」

「…馬鹿が」

男はポケットから小さなパチンコ玉を取り出す。それを空に放り投げて、掴む。

最初は肩を狙つてやろつ。次は腕、足、腹、だ。

痛みに耐え切れなくなり、自分に泣きながら跪いて許しを懇願してくれば、その頭を踏みつけてやろつ。

そう考えればあまりの愉悦に口元がにやつぐ。

パチンコ玉の標準を対戯に合わせた。それからぴん、と弾く。

「『真っ直ぐに突き抜ける』」

力と成りし人の言葉。残酷な人間は冷たく人を文字通り『傷つける』言葉を吐く。

何も知らず、何もわからず、ある意味それはもつとも純粹な感情。だからこそ、ここまで非道になる。

放たれたパチンコ玉は真っ直ぐ対戦を貫くために発射され、勢いよく向かう。

このままでは代夜と同じように、体に撃ち込まれてしまつだらう。けれど対戦は避けようとなかった。ただ、すべて抜け落ちてしまつたように、ぶらりと虚ろな目のままでいるだけ。

けれど、ただ、ほすん、と。

「…………え？」

パチンコ玉が対戦に当たつても、貫かれることも無く、鮮血を溢れさせることも無く、ただ重力に従つて、落ちた、だけ。

「……は？」

慌てて男はポケットからパチンコ玉を取り出し、対戦に向かつて言霊を吐きながら投げつける、が、何も先ほどと変わらず、ぽん、と落ちる。

何回も投げても。

何度言葉を紡いひとつ。

玉は、届かない。

「どうこつ、ことだ…つ…なんで攻撃できない…」

男に焦りの色が見え始める。慌てながらポケットに手を突っ込むが、もつすでに使えるものは無くなってしまっていた。攻撃が、当たらない。いや、当たつてはいるのに、傷一つつけたことが出来ない。

「…言つた、だろ?」

酷く落ち着いた声で。色も光も感じられない空虚しか存在しない声で、対戯は、ただ呟く。

一步、踏み出して。

「と…、『止まれ』え…!…!

「…」

止まらない。

「な、なぜだつ…?なぜ止まらない?なんで、『止まれ』…!…!

『止まれ』ええ…!…!

「お前の、」

「と、とま、『止まれ』…!『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止

まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』!…!

!…!…!…『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』

『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』

『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』

「お前の、」

一步、また一步。言霊が確かに対戯に響いてるはずなのに。それなのに、何一つも対戯はそれに従わない。

狂ったように言葉を吐き出し続ける男。言い知れない不安が内部に暗雲のように広がり始めた。

にんまり、と初めて、酷く感情の感じられない顔で、形だけ、笑う対戯。静かに、咳く。

「『お前の攻撃なんか、俺に効くもんか』、つてな」

ただ、一言だけ。

それだけだった。

「は…？」

けれど、男を絶望させるのには、十分だった。

「…と…だま…だと…？」

「さあ」

「お、お前、普通の、人間なんじや…？」

「普通の人間だろ。言靈遣いだつて、所詮人間だ。汚く、穢れて、壊れて、狂つて、愚かで、イカれて、崩れた、…愛おしき、人間だ」

「…つ…？」

恐怖。目の前の、ただの少年のはずの対戯に、酷く重い恐怖を男は感じた。

言つながらば黒。深いその色の中に引きずり込まれていくような、闇ほど優しくもない、『黒』。

虚ろな、光を消したその瞳はただ冷たく男を見下すように見つめる。冷たく、冷え切つた、何も灯さない瞳。

ペテン使いは許さない。自分の大切なものを傷つける奴は。

嘯いてあげましょ。嘘さえも眞実にしてしましょ。ペテン使いは許さない。何一つだつて、許さない。

「… わて、どうじょうか？」

「は、」

「刺して絞めて斬つて抉つて千切つて？ いで潰して壊して崩して、どうされたい？ どれだけやつてやるうか？ お前が望んでたんだよなあ？ 残酷な殺し方。お前がやりたかったこと、全部俺が代わりにお前にやつてやるよ。それこそ、バラバラのぐりぢりやぐぢりになるまで」

「お、お前みたいにガキに出来ると思つてゐるのか…！？」

「出来ないとでも思つてゐるの？ 愚かな言靈遣い」

「… つ！？」

「… いつは本氣だ。男は思つ。

本氣で自分を殺そうとしてくる。一般人が。ただの、一般人に。なんなのだ、この不安は。恐怖は。絶望は。自分は言靈遣いではないか。言葉により力と為し、強く在るそれ。なぜ、なのだ。自分は強い。選ばれた存在だ。なのに、なぜなのだ、なぜ、なぜ？なぜ？なぜ？ は、一般人であり、普通でしかない、ただの高校生に、いつも、恐怖しているのだ。自分は強い。強いのだ。それなのに、なぜ？

男は気づかぬうちに一步後ずさつていた。その瞬間、バランスが崩れ、体の力が抜けて地面に尻餅をつく。

冷えた、軽蔑しきつた視線が男を貫いた。ぐわんぐわんと、男の搖れる視界の中、対戯が、やらり、と歩み寄つてくる。

やめろ、やめてくれ、お願ひだ、許してくれ。男は必死に喚ぐが、対戯はまるで聞こえてないとでも言つよつて歩みを止めることはない。

男との最初の場面のよつて。死ぬまでの、時計の、針のよつて。单调に。確実に。迫る。

恐怖や緊張などが交ざりに混ざつて、男はパニックを起こしていた。死ぬ、死ぬんだ。死ぬ。死んでしまう。なんなんだこいつは。死ぬ。化け物か？死ぬ。言霊遣い相手に。死ぬ。ここまで。死ぬ。するなんて。死ぬ。

自分の下半身が濡れていると気がつく。男は泣きながら叫ぶ。ただ対戯は冷たい眼でそれを見るだけ。

「格下が」

冷たく、そう、呟いた。

+++++ +++++ +++++

「つたぐ、あのおっさん、俺が代夜のためなんぞにあんなになるとお思いかなー…」

「え、それ、酷くない…？結構僕大怪我なんだけど。あのままだつたら出血多量で僕死んでたよ。まあでも結局僕を見捨てず助けてくれたもんねー」

「最後にあんな台詞吐かれて逃げたら俺ヘタレになつちまつだろ。お前なんざじつてことねーよ」

「うわ酷い…。まあ照れ隠しだつて知つてるけど」

「お前が眠つてる間俺死ぬかと思つてたんだぞ。まあ、さりさりだつたけどさ」

「そりいえばいつたい何してたの？あのおじさんって誰？」

「覚えてない。知らねえ」

「対戯い…」

腹部が血だらけの代夜を背負い、対戯は病院に向かって歩いていた。代夜の打たれたところは、急所を外れていたので一命を取り留めていた、のだが、さすがに顔は青ざめていて、時折顔を顰めていた、が一言も痛い、と漏らさなかつた。

とりあえず、田覚めた代夜の言葉に従い止血して、今に至る、と言ふわけだつた。

あの男は倒れたまま縛り付けて口にガムテープを端つて放置し、警察に不審人物を捕まえましたと匿名で電話をしておいた。

「ねえ、対戯」

「ん？」

「ありがとね」

「…」

「僕知つてるよ。対戯はさ、本当はこう言われるの苦手なんだよね」

「…苦手？」

「うん。知つてる…、と言つより、わかるんだ。僕は嘘が、わかるから」

「…」

「天邪鬼つていうより、対戯はさ、自分にも嘘つっちゃうから。だからさ、僕がどれだけ感謝しても対戯はなんにもわかつてくれないつての、僕は知つてる。だからさ、あんまり、言わないようにしてた、けどさ。これまでも」

「…」

「でも、たまに思うんだあ。それつて寂しくないかつて。今日不良に助けて貰つたとき、僕、『ありがと』って言つたでしょ？そのとき、対戯、どんな顔してたかわかる？…泣きそうな顔してたんだよ？」

「… まじか

「まあ僕にしかわからないだらうけどね」

「…」

「ありがと、対戯」

「…」

「あの時だつて、どの時だつて、僕は君に感謝してたんだよ。今しが言つときがないから、」いつの時じやないと君は聞いてくれないから」

「…ん」

「あ、素直になつた」

「お前の恥ずかしさにしんじくなつて血吐きだつたといひだ」

「酷つ！？」

「ひどくねー」

「ええー…」

軽口を叩きあいながら、病院への道をゆっくり歩く。速く歩いてしまつたときに、傷が痛むのか微かな呻き声を上げていた。出来るだけ傷に負担がかからないよう、歩く。

ふと見上げた空は、むかつくくらいに雲一つ無い。本日は晴天なり。くそつたれだ。

「ねえ対戯ー」

「んー？」

「何もそー、聞かないけどそー」

「…」

「氣をつけてね」

「…俺たまにお前がわかんない」

「人の心がわかる人間なんていないよ。僕だつてそれで歯がゆく思うときがあるや。でもさ、それでも氣づくことだつて、あるかもしない」

11

うに必死だつてのに

「お前が喋るから俺は喋らないの。人のせいにすんなボケ」「うう、やっぱ対戯酷いなあ…、やっぱ影で対戯はツンデレだつて広めるか」

「……地味に嫌なんだけど、
俺そんな萌えヌテークス頂いたことはございませんが」

一
いせん
電

でシンデレラ。案外女子に受けれるよ。そういうアニメキャラも多々いるとして」

「そういう乙女ゲー要素を俺に入れろ

「ううん、そういうのじゃなくてシンナーを全面に押し出す」との
がいいな…。ほら、よくあるじゃん。『お前は眼を離すと危ないか
ら俺の傍にいひ』、的な?」

いや無理。でいいからちかで言えば、この子は女子だ。金

子

「んー、僕は素直になれない幼馴染系で。『ほら、早くしないと遅刻するじゃない!』って毎朝起こしに来てほしい。僕幼馴染いない上に早起きだけど」

「ベタだなー…、

「それエロゲじゃないの…？あえての未亡人で来たか…、じゃあ僕は近くに住んでる大学生のお姉さんで。免許もつていて、たまに車乗せて行つてくれたり、彼氏に振られたとか言つて泣きついてきてそれに付き合つたり…最終的にいつのまにか身長を追い抜き男らしくなり、お姉さんを女として意識し始めた主人公にお姉さんが『あれ、私…恋してる？』って気づき始めて、それから姉と妹のようないいながらいいのか俺が…から…』

ものから、意識しちゃう関係性になつて行く、最終的には思いが通じ合つトウルーエンドで」

「それはギャルゲか…？じゃあ俺は病弱な妹系で。幼い頃から『お兄ちゃん好き！いつかお兄ちゃんと結婚するの！』って言ってくる近所の女の子件後輩。その女の子がある日入院。結構重い病気らしい。それを知った主人公は毎日病院を訪れるようになり。そこから近づいてく二人の距離。女の子は主人公のことが小さい頃から好きで、主人公は自覚が無い感じ。最終的には手術前に女の子が恐怖で病院から抜け出して、主人公がそれを追いかけ見つけ出す。主人公はそれでやつと自分の気持ちに気づき告白。勇気をもつた女の子は手術に臨み、成功。つでトウルーエンド」

「対戯感動モノ好きだよね…。ところで対戯は姉系と妹系どっちが好きなの？」

「ボクつ娘」

「予想の斜め上…、はつ、僕つ娘…？まさか対戯、僕のことを…！」

「うぜえ引き千切るぞ」

「どこをつ…？」

「病院見てきたぞー。そろそろ黙れ。あと言い訳俺が考えとくから適当に誤魔化しとけよ？」

「…りょーかい…」

盛大にいつの間にかずれていた会話に気づかず、病院の中に入りつていく二人。その姿は病院の中へと消えていく。
その姿を見つめる女がいた。

+++++ +++++ +++++

代夜はしばらく入院、という話になつた。

幸いにも傷は浅く、医者には改造した銃を持った不審者に襲われた、とそんな内容の話を説明しておいた。

警察に連絡、という件で、ありもしない不幸話を散々捏造し、同情を誘つた結果、通報やらなんやはなくなつた。

あの言靈遣いの男は今頃連絡を受けた警察に捕まつてゐるだろ。さすがにたくさん的一般人相手に簡単に言靈を使うというわけにもいかないはず。

もしこじういう連絡が警察にいけば、自分たちがいろんな説明をしなくてはいけないだろ。そうして、必然的に男との関係性が示唆される。

もしこじうちが知らないと言い張つても向こじうは知つてゐるわけだ。そうなれば、どうやって撃たれたかの話になるかもしれない。

改造された銃と説明したのだ。けれどそれは対戯の嘘。それがバレれば、面倒くさいことになりそつた。

言靈なんて非現実的なもの。

「つてかあれなんだつたんだろな……」

あのとき、どうして効かなくなつたのか、と思つ。

まさか自分が言靈というものを使えるだなんて思えない。いくら概念を理解したとかどうとかで……いきなりそんな風に使えるようになると、そうは思えなかつた。

動きの方は別だつた。手のひらにある鋭い傷跡。対戯はその石を強く握り締め、痛みを感じることによつて、一自分の意思と反する感覚を常に浴びせ、あの言靈に操られないようにしただけなのだ。

言靈を使った覚えは無い。

え、いや、自覚ないものなんですかそれ、え、俺使つりやつたんですか？と誰かに聞きたくなる。

やどりと葉桜はもうここにはいない。聞く相手はどこのにもいない。いふなればあの男、だけれどそれは却下だ。きっとまた殺されそうになるはず。

とりあえず誰か断言してくれ。俺は言靈を使ってないと。

「つて誰もいねえよな…」

「何が？」

「いやだから…つてえ！？」

返事が来るのは思つていなかつた。ぶんつと振り返ると、けらけらと笑うサングラスをかけた、対戯よりも随分と背の高い女性が立つていた。

「おっす」

「おっす…つてはい！？どひひひたまつー！？」

「あたしとのあの熱い夜を忘れたのか」

「身に覚えが無いつ！？」

「あたしとの関係はあの一晩だけだつたつていうのか…！…そこまで…あたしは安い女か…」

「え、悪いの俺？身にまつたく覚えが無いんだけど。初めて会つた気がするんだけど」

「その程度！？あたしはその程度なのか！…！」

「ああもう面倒くせえ！…！」

「まあ今日始めて会つたんだけどな

「やつぱりかよちくしょう！…一晩もたつてねえよ…！」

「けどあたしは見てたぜ…お前のこととな！…」

「あにそれ怖つ！…え、ストーカー？間に合つてますんで。ぜひともお帰り頂きたいのですが

「ストーカー！？」こんな可憐な美少女捕まえておいてなんていう言い草なんだ！？」

「よしつつコニビロたくさんあるぞおー？まあ、ビロが可憐だ辞書引け、それに美少女って自分で言つた！…そのうえ少女って年でもないだろあんた！…それから俺はあんたを捕まえてない声をかけてきたのはあんただろうがあー！」

「よし合格だ…お前に教えることはもつない…」

「何も教えられてねえよ！？てかなんだそのキャラ、ビロの師範かつー？」

「お前よく喋るな、疲れねえのかー！」

「あんたのせいだろがー！」

なんだこれー？すぐ疲れるー？と、対戯は膝に手をついて大声の出しすぎで荒くなつた息を整える。田の前の女性はけらけらと豪快に笑つている。

なんなんだ。なんなんだこの人は。

ふいー、と背筋に嫌な予感が駆け巡つた。あれ、この知らない人と変な風に出会うパターン、これで何度目？嫌な予感がした。いや、目の前の人からは嫌な予感と言つか、変人オーラをびしばし感じて、出来たら関わりあいたくないタイプだ。

「で、では俺はここの辺で…」

「いや待てよ」

がしり、と肩を掴まれた。ちくしょう、いきなりで不自然すぎたかー！対戯は舌打ちして睨み付ける。すると田の前の女性は一瞬ぽかんとして、やだな見つめるなよ照れるじやねえか、と頬を染めた。…勝てねえ。この数分の会話により対戯は直感した。

「まあまず自己紹介からだな。あたしは蘇鉄縁そでつえいしつてんだ。苗字だけ

だと男の名前みたいに思われるかんな。気軽にえんちゃん、えにぴー、えにえに、えつちゃん好きな呼び方で呼んでくれ

「わかりました縁さん。帰つていでですか

「つれないねえもつと女性には紳士的に接するものだよ

「淑女とはかけ離れたあんたにそんな対応をしようと

「つたぐ、ほんつと可愛くないガキだ。まあその方が可愛げがあるんだけどよ

「言つてることが矛盾してゐんじや…」

「はいはい、じゃあそしらぬフリはそろそろやめりう

縁のサングラスの奥の目線がふいに鋭くなる。思わずびく、と肩が小さく揺れた。

「うすうす気づいてんだろ？虚室対戯。あたしがどういう方面の人間なのかを。お前はそこまで頭が悪いわけでもねえだろ。少なくとも今日はお前にとつて信じられねえもんばっかだつたもんなあ？」

「な、名前、なんで…」

「まあお前みたいな人間は面倒」とあまり突つ込みたくねえタイプだよなあ？自分の世界観を壊したくないつつー奴。その癖して自分的世界に存在するもんは何が何でも傷つけたくない。いまどきああ珍しいもんだとそんな捻くれたフリした臆病者

すらすらとそつと対戯のことを簡単に語つてのける縁。

何故か吐き氣がした。先ほどまでの軽い調子とは裏腹に、どこまでも底の見えないその笑みの奥で、何を考へてるといつのだらうか。

「…何が言いたいんすか」

「何か言いたいわけじゃねえよ？お前みたいな奴は面白えつてだけ。あたしは気に入ったもんは全部あたしのもんだからな。だから今ここにいんだよ」

「それどうこうう俺様発言つすか…」

「くく、でも坊ちゃん、知りてえんだら、お前にどうしての疑問。あたしなら教えてやれるぜ？多分お前の考えはあつてるからよ。なあ？」

「…」となく悪魔の囁きのよつた『氣』がする。にやりと浮かべる笑みの奥底には、こいつたいなんの企みが沈殿しているのだろう。

恐ろしくもあり、好奇心を刺激する甘い言葉。

知りたいだらう？なら教えてやるよ。

多分対戯の考える縁といつ女性の属するものが何なのかは見えている。そして、縁はそのことに『氣』づかれてると知つたうえで、睦言のよつた囁きをしかけてくる。

教えてやる。単純な言葉でも、『…』となく深い裏側に通じてる『氣』がした。

「…何を企んでるんですか」

「企んでる？心外だな。親切心さ」

胡散臭さを抜けさせないまま、外面を完璧に貼り付けて、突きつけてくる誘惑の糸。

知りたい。知りたいともちろん。けれど、今度知つてしまえば、何かが変わる。もう戻れなくなる。

「…」言つておぐがあたしは悪魔でもなんでもないぜ？そんなとつて食いやしねえし、そんな怖い眼で見んなよ。照れるだろ

「…照れるんですか…」

やつぱりこの人はよくわからない、と対戯は思つ。

重い威圧感を湧き出させたと思つたらいつのもにかそれは軽く明る

い雰囲気へと変えてくる。

「それとちつともお話ですが…お断りをせて頂きます」

「へえ、なんで？」

縁は値踏みするような視線を向けてくる。

「俺は普通のままいいんです。知らない世界は知らないままがいい。深く突つ込みすぎてもいいことなんかないんです。何一つだつて」

「言つねえ。でもお前、随分と一般人ながら踏み込んできてるぞ？ 例えはわざと襲われるくらいには、な。もし言霊の効果が切れなかつたら、お前今頃体中穴だらけだぜ？」

「…やっぱり、あのパチンコ玉の効果が切れたのあなたのせいだつたんですね…」

「おや？ どうしてそり思つ？」

「わざとしが考えられません」

「まあ正解だけどな」

くくくと縁が瞳を細めて笑う。

「あたしがまあ、それで聞きたいことがあつたんだよ。お前もし、あたしがいなかつたらあのまま打ち抜かれて血まみれだぜ？ なんのになんであんなこと言つたんだ？」

「…なんていうか、血がどんどんだけ出よひどいだけ痛からつて、絶対立つていよひつて、だけ」

「はあ？」

「なんて言われよひとか、あいつ、すくなくかついたから、負けられないつて…、そんだけつすよ」

「…案外単純だなお前。さすがのあたしも驚きだわ。わりと熱血な

「…じるもあんのな」

「…別に、そういう人が、いたから」

ふい、と対戦は目線を逸らす。縁はふーん、と簡単な相槌を打つた。それからまたにやり、と満足の笑みを浮かべる。

「そんな人のいい虚室対戦くんにあたしは、頼みたーーことが、あんだけよなあ…？」

「…はあ？」

「お前なーんにも聞いてくれそつにもなーし、こいつなつたら、押し付けちゃえ的な？」

「はあつー? んなの嫌に決まつてゐるでしょ? うがーーー！」

「まあまあ、諦めろよ」

「つーなんであんたに勝手に決められなあやーーー！」

つい、と。額に指を指された。

ついびくじ、と体の動きが止まる。にたにたと笑みを浮かべていた顔が、その一瞬のうちに冷たく色を無くす。

「あたしがお前に拒否権を^{レジストラン}うけとまつつか? ペテン使い」

「…つー?」

なぜその渾名を。口を開きかけたが、すぐに閉じる。

「面白いネックネームだよなあ。嘘^{ベラン}使い。臆病者の嘘つき。情けないよな。嘘をつかないと自分を守れないなんて」

「…つ、」

「内心は弱いくせに。弱くて脆くて壊れやすくて傷つきやすい癖に、嘘で全部を塗り固めて、それでも嘘をつぐ。情けねえよな、ペテン使い。お前の本心はどこへ行った?」

「だ、まれ……」

「強い振りして嘘をつき、これまで歩いてきて何を手に入れた？外
面だけを取り繕つお前を誰が信じる？…あああの親友くんか。でも
あの子でさえ守れたか？その嘘で。生きてたからまだ良かつたもの
の、下手すりや死んでたぞ？」

「…」

「いやあ一一番わかつてるのはお前自身か。いいか、それでもお前に
あたしは言つてやるよ。お前はあの子を守れなかつた。何一つ、な
？」

「…つーあんた、は…何が、言いたいんだ…！？」

「簡単や。お前は強くなりたいとは思わないかつてな

「は…」

縁の手が優しく対戯の髪を撫でる。

「お前には、素質があるんだ。言靈遣いの、な

最悪だ。

最悪、最低、絶望、だ。

メランコリックな感情という程優しいものじゃないこの感覚はなんのだろうか。

ああ氣分が下がる一方だ。

「んー？ 対戦ちゃーん何してんだー？」

「うつわざりに面倒くさい奴がきた」

対戦がぼんやりと窓の外を見ていると、いきなりへらへらと笑いながら、ヘッドフォンを首に巻いた男がとたと歩いてきた。

芙蓉京。どれだけ対戦に騙されても平然と近寄つてくる人間。代夜と違い簡単に騙されるはずなのになぜだか対戦に懐いているようだつた。

「アンニコイな氣分とかー？ 対戦にもそんなときがあるんだなー」「うぜえ近寄るな消えろきもいつぜえ」

「ひどつ！？ つてかうぜえつて一回言つたしー！」

「はこはい、わかつたから消えろ消えろ。しつしつ」

「うわお前絶対酷い！俺のこと嫌いなのつー？」

「…」

「なんで黙るのつー？ 否定してよーーつわああん俺一人ぼっちいい

いつー！」

「あーほら餡やるから騒ぐな」

「あー餡貰つた … つて俺高校生だよつー！ いくつだと思つてゐのー？」

「…」

「だからなんで黙るのぉ……」

「わわわー、わわわーと騒ぎながら、それでも京は対戦の横にまでやつてくれる。はあ、と対戦はため息を一つつき、もう特には何も言わない。明るくていい奴だといつのは対戦は理解はしていた。けれどそれだからよくわからない。なぜ自分のところに来るのか。こつちはそれなりに酷いこと言つていたはずだけれど。最近こつはマジやないのかつて疑い始めてる。

「……はー……」

「ため息つゝと幸せ逃げるよー?」

「わわー」

「……ほんとそれしか言わないの……? なんていうか辛辣……」

ため息の原因といつのはいつまでもなく、昨日のことだ。
蘇鉄縁と名乗った女性に、散々言われて、最終的には勧誘された。
言靈遣いにならないか、と…。

とりあえずなりたくない、と答えて逃げた。
まあ他にもいろいろ言われたが、全て忘れることにする。
けれど、こりいろありすぎて、忘れられないのが今の惨状。
結局その憂鬱な気持ちをため息に吐き出しているのが今だ。

「なあ、もし…えーと…いきなりお前には勇者の資格があるから勇者になれって言われたらどうする?」

「いきなりだな…、なんだよそれ、RPG?」

「うつせえ」

「なんだよー…、えーと魔王とかいないの?」

「ん、いない」

「えーと、敵は?」

「特に」

「…それ勇者になる意味あるの?」

「ないから困つてんだよ。なのに、えーと…長老っのが『なりりが
つー』って結構有無を言わせない感じで脅してくんだよ」

「随分おつそろしこ長老だな…それなんのゲーム…?」

「お前ならどうする?」

「かなり答えに困る問題だな…」

「だろ?」

「理由もなんもないのに勇者なんかになれないしねー

「…だよな…」

「で、対戦じーしたのー?」

「逃げた」

「く?」

「長老から逃げた」

「ええー…」

「だから追つてくるかも知れない」

「だらうねー…」

理由が無い。そうだ。そうなのだ。

そもそも、靈遣いになる理由もないし、勧誘される理由も無い。
空欄のままで、ただの気まぐれで誘われたとしか思えない。

自分はただの嘘つきでしかないのだ。

縁が何を考えているのか、対戦にはさっぱり理解できない。

「んーでもさー、」

「ん?」

「理由無くても、やりたいって思ったならやればいいんじやないの
かな?」

なんて」とのないよつて京が呟く。

「ほり、やつて後悔、よつやうなくて後悔の方が辛いっていつじゅん?」

「…」

「そもそも勇者になんないとさ、物語始まんないし」

「別にならなくて始まるんだけどな」

「…ねえやっぱそのゲーム何?人生ゲームとかなんかなの?」

京はやはりゲームのことだと思っているようだった。
やつぱり何も知らない奴に聞いてもな…、とげんなりする。
少しでも他者の意見が欲しかった。けれど、例のことはあまり言つ
わけにはいかない。

非現実なことを、誰が信じるというのだ。

あの親友だけは、対戯の嘘を見破つてしまつて信じてくれるだろ
う、が、彼をそう巻き込むわけにはいかないのだ。ただでさえ傷つ
けて。

「はあ…しんじ…」

「ん、ゲームの攻略上手くいかないの?」

今こいつをすいへ殴りたくなつた。

+++++ + + + + + + + + + +

「よう、昨日ぶり」

「…」

「なんだ?照れてんのか?愛いな奴めー」

予想してた、予想してたさ。うん、もちろん。
名前知ってるくらいだし？俺見てたくらいだし？そりゃあ来るだろ
うなあとかはそう思つてたわ。
でも、でも…、

「なんていうかもう来たことはどうでもいいっていうかあんたなん
だよなんでこここの制服着てんだよ成人してる癖にいいいいいい
…………！」

「うるせえな、似合つだろ？」「

「せめてならグラサンとつて手に持つた煙草捨てろ…！」

「無理、グラサンはともかく煙草はあたしの命の糧なんだ、それを
奪うつてのか！？」

「ただの二コチン中毒者だらうが…！」

なんだこれ、なんだこれ。本気で頭を抱える対戦。

もう本当全てが夢だと思いたい。

学校が終了し、特に部活には入つていない対戦は、そのまま帰ろうつ
としたときに、遭遇してしまった、今一番会いたくなかった人。
はつきり言つて浮いてる。なんかいろんな人がちらちら見てる。ち
なみにここは学校の敷地内。
なにこれもうやだ。

「ん？あたしと会えて嬉しいかー？この美少女アイドル、蘇鉄縁ち
やんに会える機会はあんまりねーぞ？」

「生憎俺アイドルとか興味ないので」

「なあ、アイドルつて、宗教用語で、崇拜するものつて意味なんだ
ぜ…？」

「崇拜しろつて言いたいのかあんたは…！」

「え、してるだろ？」

「その勘違いを海の彼方に放り投げたい」

「よし、靴を舐めさせてやるよ跪け」

「なんのプレイつ！？俺の言つてたこと聞いてましたかあんたは！」

「！」

「ん？あたしがいかに素晴らしいかってことだろ？」

「うんわかった何も聞いてないねこの人」

「わかつたならよろしい。もうするなよ」

「え、何これ俺が悪い流れなの？おかしくね？」

「さあ！あなたも言靈遣いになりませんか！？」

「あああ何その勧誘つてかやっぱりその話しに行くのかよちくしょうううううううう！」

もうやだ、すいぐやだ！「ここ」と笑ひ田の前の女性を見ると

対戯は泣きたくなつてくる。

これ強制イベント？回避無理なの？

「しょうがねーだろー？」ちとら人員不足なんだよ、だから少しでも有能な人材とか有能じやないけどいると役立つ人材とか、無能な上に役立たないけどパシリくらいには使える人材とか、」

「ツツコミたくなかつたけどあきらかに最後の絶対おかしいだろ！」

「！」

「大丈夫だつてー、いくらなんでも高校生を殺すような真似しないつてー」

「今明らかに爆弾発言したこの人！？え、なに、あんたらつてそんな殺されるような物騒なことしてんの？」

「…あ」

「何いかにも口が滑りましたつて顔おおおおおお！？断ります

！、全力で俺断るんで！まだ高校生だし、死にたいとか考えてないので！」

縁に背を向けて全力で走り出す対戦。だが、それ以上のスピードで縁は追いかけてきて、たやすく対戦を捕まえる。

「まーまー逃げんなよー？ なあ？ いいじゃねえか？ もう少し話し聞いてくれたつて、なあ？」

「嫌だ！…命がけとか無理！ つてか何あんた、ただの高校生に何させようとしちゃってんですかっ！？ 生憎俺は非日常とかファンタジーとかあんま興味ないんで…！」

「残念だつたな、あたしは興味ある」

不意に縁が声のトーンを落とす。

うぐ、と一瞬対戦の動きが止まった。苦手だった、この声が。

全てを見透かし、それでもなお深くまで入り込んでくるこの声が。

「別に無理矢理つてわけじゃねえ。誰だつて人権つてもんはあるからな。つまり、あたしはお前に対しで、無理矢理はできない…、でも、それだけだろ？」

「…は？ 何が？」

「つまりお前が望めばいいわけだ。言靈遣いになりたいと。強くなりたいと」

「…？」

言つてゐる意味がわからぬ、と対戦は首を傾げる。
縁は意味ありげにふふん、と鼻を鳴らした。

「男は誰だつて強くなりたいって思つときがあるもんなんだよ、ばあか！」

それだけ言つと、くるり、と背中を向け、かつかつ、と革靴の音を立て歩いていつてしまつた。

ひらひらと、振り返りず、手だけでさよならと言つ縁。
残された対戯は、しばりくぽかん、と口を開けていた。

「…なんだつたんだ…？」

どうしてもわからない。

強くなりたいと思つとき、なんだそりや。

それだけじゃない。その言葉を呴いたときの、嫌に、寂しげなサン
グラスの奥の眼。

わからない。なんであんな顔をしたのか。

ああ、もう、面倒くさい。

「…なんこしたつて、言靈遣いになる氣ねーし…」

忘れよ、とこれまで何度も何度思つたか。

忘れよ、と思つても、何も忘れられなかつた。

あの鳥の化け物。やぢりの笑顔。葉桜の泣き顔。言靈。縁。あああ

ああ、もひづさつたい。

なんどどうして、関わつてくるんだ。介入してくるんだ。俺はこの
までいことこつのに。

生温い日常の中で、日々を変わりなく過ごしていく、それでいい。

それがいい。十分なんだ、それで。

強くなりたいつて思うときがくるときはあつと、それら全てが崩壊
してゐんだろう？

そもそもしなけりや、対戯は言靈遣いになる氣はない。

対戯の世界は対戯のものであつて、他のものが干渉していいはずが
ない。

いろんなものが混ざり合つてしまつ世界だなんて、認めない。

自分は自分のまま生きていく。重荷なんてものは背負わずに。

そうやって、今まで來たじゃないか。

『 の、めに、私は嘘をつくんだ』

桜の散っていたあの時、あの人だつて言つていた。

『傷つけられないために、負けないために、な を、
くために』

ところどころノイズがかかり、上手くは思い出せないが、自分の憧
れだつた人が言つていた言葉だ。

あの人からはいろいろ教えてもらつた。

丸い眼鏡をかけて、年下の俺にも敬語で喋り、男なのに髪が長く後
ろで縛つていて、いつも優しい笑みを浮かべていた、その人。

あの人言葉通りに今俺はやつてきている。

けれどあの人望んだ形になつてているだらうか、と不安にも思う。
自分はあの人にはなれない。

対戯の記憶の中に色濃く残る、桜の似合つあの人。

『 対戯くん、君は、』
「対戯
つ、帰る一つ？」

は、と意識が現実に戻る。振り返ればへらへらとした笑みの京がこ
ちらへ駆け寄つてくるのが見える。

「なにしてたんだ？ 対戯帰んないの？ あ、そつそつ俺も代夜のお見
舞い行きたいんだよ一緒に行こうぜー？」

「あ、ああ…」

つい返事がしどろもどろになつてしまつ。けれどそんな対戯の様子
に気づかず、ほら速くー、と氣の抜けた声をかけてくる。

日常が、全てを流してくれればいいのに。

ため息をつくのを堪えて、対戯は歩き出す。

一瞬視界の端に、桜の花びらが見えた気がした。

+++++ +++++ +++

「頑張れ私頑張れ私頑張れ私頑張れ私！…きょ、今日…」

柱の影と重なり、ベタと呼べる位置から対戯の姿を見つめる一人の女子。

ショートカットにカチューシャ、地味な部類に入る少女だが、眼は丸丸と大きく、可愛い普通の女子高生だった。

「湯里…、またストーカーしてんの…？」

「え、えみちゃんつ…ち、違うよ、私はただ、あの、その…ストレッヂを…」

「言い訳が苦しいよあんた…、話しかけるならさつさとすればいいのに…」

「そ、そんな…！用も無いのに話しかけても、変な人になっちゃうの…」

「…今のあんたの方が変な人だから。…はーつ、あのペテン使いのどこがいいのか」

「ペ、ペテン使いとかいつちやだめだよ…ただよつと嘘吐きなだけで…」

「あんたね…嘘吐きをオブラーートに言つた渾名がペテン使いだつてのに、あんたが嘘吐き呼ばわりしてどうすんの」

「あう」

「話しかけるんなら、さつさとしちゃこなさい。ほら、もう行きそ

ה'גנ'?

顔を赤くして項垂れていた湯里だが、ふと戸惑いのような声を上げ、キヨロキヨロと周りを見回し始めた。

友達の少女は訝しげに湯里？と声をかける。

「今、着物着た少女の子一三歳がいた。」

「はあ？ なにそれ

いや、なんか細長いもの背負つた、髪の長い女の子が、走つて
気がするの。どこ行つたんだろ……

……あなたもしかしてそれって……

5

「あの…この世にその
ないものっていうか…」

や一つと勢によく湯里の顔が青ざめていく。

「ええええええええ、そんば、甚ざかつ!?

11

咄たよね？わ
和の見聞遣ししや
…！？

湯里が叫んでる頃、もうすでに対戦は京と共に学校を出ていた。

あの人は優しい人だつた、と思い出す。
優しく、いい人の見本そのものだつた。

桜の待つていたあの日、の人とであつた。

低いトーンの静かで落ち着いた声はよく耳に馴染み、丸い眼鏡の奥の瞳は、真つ直ぐな光を宿していた。

の人になりたいと、いつも思つていた。少なくとも、小さい頃の対戯は。

けれど、今となつては、それは遠い記憶の中の忘れ去られた感情に過ぎない。

の人のようにはない。それを酷く痛感していた。

「…………」

そう、の人のようにはない。の人のように見ず知らずの人間に優しくなんて。

見ず知らずじゃなくとも、会つて日の浅い人間に優しくなんて。

…………。

「対戯……また会えたな！」

「…………はい」

代夜のお見舞いの帰り道、京と別れたあと、そのまま家へと歩いていた。そして今、目の前にいるのは、小奇麗な着物を着て、背中に細長いものを背負つた、…幼女、もといやどり。

はい、昨日振りです。すぐ早い再会です。また会つなんて思つても見ませんでした。

…………。

「なんでだつてかどうしてこうも巻き込まれたくないものに巻き込まれるのかね俺ええええええええええつつ……！」

「ふう、
ふうえ？」

大袈裟に仰け反りながら対戯が叫ぶと、やどりが驚いたように身を震わせる。

まじか
まじてか
とふーふーと咳きながらかくじと地面に膝を
つく。

「どうしたのじゃ対戦…？どこか痛いのか…？」
「あ…いや…なんでもないよ…」

そしてどちらも悪こことし、元のやじつこな向故か対戦は強こじと
を言えなかつた。

『逃げる』、と自分に言つてのけた少女を、案外対戯は気に入つてたと同時に、誰かが守らなければいけない存在だと思つていたのだ。そして対戯自身が、その性格に似合わず子供好きという点も入つて

「…それで、どうしたんだ?こんなとこまで一人出来て…」葉桜は

？あの過保護心配してんじゃねえか？また狙われるぞ」「うう、今は口、ぬき、ぬき、うつ母二郎

! !

卷之三

「見合にしる」と書われた……

え、見合いつて、男女が机を間に向かい合つて、ご趣味は何ですか
とか聞くあの見合い?

「こんな小さい子が、あの…見合い？」

「お前、まだ子供だよな…」

「むう、子供とは失礼な…！…でも、最近私が狙われることもあるくなつて、その、親が心配してな…。将来のことを考え、許婚と見合いをすることになつたのじや…、でも…」

「許婚はいるのね…、でもどうした？不安か？」

「…違う。やはり、結婚する相手が決められてる、とこのは、少しだけ…寂しい、と思つたのじや。…私だって、女の子なのじやぞ？」

「…お前、」

「まあ不安というのもあるがな。でも、少しくらいわがままを言つたつて…いと、思うんじや」

少し瞳を揺らしながら、悲しそうにやどりは笑つた。
ああ、名家つてのは、そういう思いをしなければいけないんだな、
と氣分が沈むのを感じた。

「だから、ちょっといたずらをな、しょとと思つのじや…」

「んで、一人でここに来た、ってわけ？」

「それだけじやない。ここに背負つてるものは、言靈刀と呼ばれる代々言靈遣いの家に伝わる名刀じや…！無くなつたら多分すく困ると思うのじや」

「…刀、ですか」

「刀じやが、でもな、どうにも、抜けない刀なんじやよ。だから無くとも構わないと思うんじやが…、昔、私の兄？だった人が使つてた、らしくての？」

「なんで疑問系？」

「私が生まれてすぐ、死んでしまつたらしいんじや。覚えていないがの

「…」

悪いこと聞いたかな、と思うが、やどりは全然気にしていないよう
に見える。

やはり、生まれてすぐだから記憶がなく、知らない人間が死んだと
聞かされても、何も実感が沸かないのだろう。それが実の兄だとし
ても。

「はあ、まあそっちの事情はよくわかんねえけど…、お前がしたい
ようにすればいいんじゃないか？で、なんで俺のところにあたんだ？」

「…他に近くにいる知り合いがおらんのじゃ…」

「なるほど…」

「それに対戦ならなんとかしてくれると懇うつて…」

「…なんか信頼されすぎくて怖い」

「ふえ？」

「はあ…まあいいか。その刀重いだろ？…とりあえず持つてやるよ。
あと、ジューースくらいなら奢つてやる」

「おお！…ありがとう、対戦！」

「…またありがとうつて…」

「対戦？」

「はあ…なんでもねえよ、じゃあ自販機まで行くべや？」

「じはんき？なんじやそれ？」

「…まじか」

ため息をつきながら、対戦はやどりが持っていた布に包まれた刀を
受け取り背負う。

それで、自販機のある公園まで行くべつ、とやどりに呼びかけた。

…『言霊』刀が何かつてことは絶対突つ込まねえぞ…！

「ところで、あの鳥どうなった？」

公園まで歩く途中、対戯はある鳥の妖怪、江蛾留侘と呼ばれた鳥のことをふと思い出し尋ねた。

「江蛾留侘は強制的に唱えられてた言靈の効力を完全に消したら懐かれたのでな、万葉家の遣いとなつてゐるぞ？ちなみにメスで名前はキヤサリン」

「…なんでそんな外国人っぽい名前を…」

「母上がつけたのじや」

「母上…おま…」

他愛も無い話をしながら対戯とやぢりは歩く。

二人とも、これから何が起こるかなんて、さっぱりわかつていなかつた。

二人の話を聞いてにやりと口元を歪めた影。

そして一人より先に進んだ姿。

何も知らなかつたし、気づかなかつた。

そう、何も。

+++++ +++++ +++++

血が、溢れた。頭から流れてくる鮮血は、眼の中に入り、視界を赤く染めた。

倒れた対戯を搖さぶりながら、泣き叫ぶやぢり。その体は、対戯の血によつて赤く染まつていた。

なんで、こうなつたのだろう。

周りには、人とは違うモノが、いたるところに存在している。

枯れ木の色とそれに似た姿で、布を纏つた鬼の顔。青黒い姿をてかてかと脂つこくぬめつた粘液で縄を体に巻きつけた骸骨に似た何か。普通じやなかつた。尋常じやならないくらいに、恐怖が沸きあがつた。

「対戯……！対戯つ……！」

泣きながら、やどりは必死に対戯の名前を呼ぶ。初めはただ、普通に公園に入つただけだつた。けれど入つた瞬間、普通じやない何かを感じた。

背筋に寒気が走り、鳥肌が全身にたつ。

そして、現れた、化け物。

「しつかり……しつかりするのじや……、頼む、頼むから……、死なないで、くれ……！」

頭が真つ白になつたと思つていたら、化け物の持つていた棍棒で殴り倒されていた。ぎりぎりで後ろに倒れたのだが、額が刀で切りつけられたようにぱくりわけ、血が溢れ出し、その場に倒れた。じんじんと熱を灯しながら痛むそれ。真つ赤な視界の中から、化け物の姿が離れない。

この異常な光景の中、人が入つてくる気配も、人が公園前の道を通り様子もなかつた。今は学生の下校時刻だといつのに。

どうせまた言靈なんだろう、と霞む意識の中で思う。

感じたことの無い鮮烈な痛みが、体中を支配し、体を動かせなくする。

助けを呼ぼうにも、ここは対戯の日常とは切り取られた世界らしかつた。ここには、自分と、化け物と、やどりしかいない。どうにもできない。

この異常な空間の中、狂ったような笑い声が轟いた。目線をそつちに向けると、真っ黒のタキシードに似た服を着た男が立っていた。

「お迎えに上がりましたよ？万葉家のお嬢さん。我々と一緒に来ていただけますか？」

にこにこと、食えない笑みを浮かべた一見優男に見えるそれは、ゆるりと細めた瞳の奥に、酷く歪んだ狂気を携えていて、ぞくり、と

こいつはやばい人間だ。
直感的に確信する。

「だ、誰がお前なんかに……！」

卷之二

着いていくものか、といいかけたやどりの口が止まる。それに気を良くした目の前の化け物に似た人間は、にこり、と人のいい笑みを浮かべた。

「ところで彼、特に言靈遣いじやなかつたんですね。てつきり、楠木などの従者とばかり…。ただの弱い人間だったのですか。これは悪いことをしましたねえ」

ちつとも悪びれない口調で、遠まわしに対戦を馬鹿にする男。
確かにそうだ、と対戦は思つ。守るべき子供だ、と対戦は思つた。
そのはずなの[元]。

「違う！！」

けれどやどりは叫んだ。

「対戦は弱くなんか無い！！私を仕立つとしてくれたのじゃ……お前に対戦を馬鹿にする権利なんて無い！！！」

涙でぐちゃぐちゃの顔で、それでも、凜と叫び放った。

対戦の手に、力が籠る。

「私なら着いていく。だから、だから対戦は……！対戦だけは帰してくれ……！！！」

だけってなんだよ。

お前はどうなんだよ。

「……まあいいでしょ。他ならぬやどり様の？頼みですしねえ。いやら僕でも関係もない人間に関わってる暇も無い」

さあ、こちらへ来てください、と言い、手を差し出す男。
やどりは、もう涙を零さぬかといつまつに、唇を噛みながら、男に近づいていく。

だめだ。

行つたら駄目だ。

対戦の手に、さらに力が籠つた。

駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だつ……！

「待……！」

ん?と男の視線がこちらを向く。やどりが驚いたようにひざを振り返った。

考える、考える、考える。

お題は揃つた。『言靈』に『万葉冢』に『従者』。

そして背に負う、『刀』。

勝てるとは思えない。むしろ死ぬんじゃないか、と対戯は心の片隅で思つていた。

言靈遣いでもなんでもない自分。

化け物に囮まれ、手も足も出せずに、ただ倒れた自分。

頭にずんと、重く熱い痛みが走つて、役に立たない自分だけれど、ここにただやどりが連れられてくのを見過ごすわけにはいかなかつた。

俺はやどりを守つた?まさか。

やどりが俺を守つたんじやないか。

情けないままペテン使いは終われない。

『男は誰だって強くなりたいって思つときがあるもんなんだよ、ばあか』

今更わかつたよ。でも結局、日常は壊れた。

死ぬかもしれない、けれど、ここで逃げる方が嫌だった。

所詮嘘しか自分はつけない、と思つ。

なら、嘘を吐き抜いて見せましょう。ペテン使いの名にかけて。演じて見せましょ。言靈遣いを。

「お前、本当に、俺が、関係ない、ただの人間だつて、思つてんのか?」
「?」

背に持つた布に包まれた刀を杖のようにしてのろのろと立ち上がる。

痛みが頭から駆け巡り、今にも倒れてしまいたくなる。けれど、出来ない。

「本当に、従者じゃ、ないとでも……？」

「な、何を馬鹿なこと言つてゐるのじゃ 対戯！」

「もつ演技はやめよつぱり、やどり。いくら俺を逃がすためとつて、お前がそんなことをする必要は無いんだぜ？」

「な……つ……！」

「普段はやどりに着き従つてゐわけじやない……ましてや万葉家のものでもない。けれど、俺たちは代々万葉家に仕えるべき者……こじでやどりを守りすに、どうじりとこつんだ？」

「……くべ」

適当に喋つた言葉を聞き、男の顔が、面白いものでも見たかとも言つよつぱり、元通りにやつと呑む。

もつ、こじまで来てしまえば、逃れる」となんて出来ない。正直、怖くて怖くてたまらない。

震えるのだって我慢してたし、今すぐ逃げ出しそうになる足だって必死に耐えて押しどどめた。

「それで、吾はどりするつもつだい？」

「やどりを連れてい行かせるか、バーカ」

布に包まれた刀を取り出す。

やどりの言つ、『言靈刀』。

ペテン使いを舐めるな。

勝てなくても、守りきつてやるや。

対戦は挑戦的な顔で笑つた。

Episode 5 帰るべき者（後書き）

万葉つてのは万葉集からとりました。
…いらない知識…。

目の前には化け物がいて、化け物よりも恐ろしい人間がいて。意味がわからなかつた。けれど、頭をフル回転させて、やどりを助けることだけを考える。

なんでこんなことをしているのだろう、と対戯は思う。見捨ててきたことなんてたくさんあつた。例えば不良に絡まれてる気の弱い人間。

学校でいじめられた人間。

いまこの状態に比べれば、それらはなんて自分にリスクの少ないことか。

今、このとき、対戯は絶えず命の危険があつた。次の瞬間には、化け物たちが襲い掛かってくるかもしれない。わかっている。自分は馬鹿なのつくづくくらい。酷い偽善者だ、と自嘲する。本来ならば、こんな人間ではないはずなのに。

中途半端な人間なのだ。結局のところは、優しくするのは苦手だ。自分と言う人間を勘違いされるから。

「対戯つ！――！」

でも、泣きそうな、目の前の少女を見ると、それでもいいかな、と思えてくる。

布から出した刀はやどりの言つたとおり抜けなかつた。抜けない刀。どうせなんかの力がどうたらこうたら、とでも言つんだろ。

その刀は黒色の鞘に、桜のような花が彫られており、その刀身は十分に長かつた。

何物騒なもん持つてんだ俺、と対戦の冷静な思考が砾く。

「無理じゃ……その刀じゃ何も出来んつ……頼むから……頼むからやめてくれ……もともと家をでた私のせいなんじゃ……頼む、対戦

……」

「はいはい、うつせーな。姫さんは黙つて待つてろ」

一応刀を引っ張つては見るけれど、少しも動かない。接着剤でこれでもかつてくつつけてるみたいだ。

これであの化け物倒せねえのか。少しだけ考えて、思いつく。ならもう、抜かなくてもいいんじやねえ？

「最後の対話は終わりましたか？従者さん。じゃあ、死んでくれますか？」

にこり、と笑つた男。その次の瞬間、一斉に化け物が襲い掛かってきた。

ここでもし、ヒーローみたいな奴だつたら、なんか力が覚醒したりして、あつという間に敵を薙ぎ倒すんだろう。

だけれど生憎、自分にそんなヒーロー性は持つていない。

でも、やらなければいけない。

対戦は刀をしつかり握り締めて、強がるよつて口元に笑みを浮かべた。

ケンカは弱い方じやない。

足も遅い方じやない。

運動神経も悪い方じやない。

でも、負けられない。

「う、おりやあああああああつ……！」

一步地面を踏み出して、刀を、鞘がついたまま敵に切りかかった。驚いたようなやどりの顔が視界に映る。

せめて棒の役目でも果たせればいいと思つてた、けれど、案外敵が真つ一いつにばつさり斬れる。

「…あれ？」

なんだ、斬れるじゃん、と思つてると、後ろから、自分を殴りつけようとしたあの化け物が棍棒を振り上げ襲い掛かってきた。横薙ぎに払つてくるそれをしゃがんで避け、刀をそのまま立ち上がると同時に突き立てる。

化け物は、ぐおあ、と低く人間の声帯では出せないような声を上げると、細かい粒子になつて消え失せた。

「…まじでか」

十分戦えるじやないか、鞘でも。見ればやどりが瞳を真ん丸にしてるのが眼に入った。にかり、と笑つてみせる。そつすると、やどりが泣き笑いのような表情になつた。

化け物は次々やつてくる。

剣を突き立てたり、そのままぶつた斬つたり、ただがむしやらに刀を振り回す。

生と死と、ぎりぎりの境目で、ひたすらと。ときおり化け物の爪が肌を掠つた。だけれど、怯んでいる暇なんて無い。

「対戯…」

やどりが呆然と対戯を見ていた。どうして、と小さく口から漏れる。

なぜあの人は自分のために戦つているのだろう。やどりの瞳が潤み始める。

「もう…やめるのじゃ…」

ぱりり、と大きな瞳から透明な霧が零れる。

タキシードの男は化け物がどんどん倒されていくところ、元の「う」と「こ」にこと笑つたままだ。むしろ楽しんでる様子さえも伺える。化け物の腕がついに対戦をとらえ、そのまま吹っ飛ばされる。やどりは小さく悲鳴を上げた。けれど対戦は、それでも立ち上がる。

「もう…もう…のじゃ…お前がそんな怪我しちばりする…！頼む、頼むから、もう、やめて…」

やどりの体に重い衝撃が走る。息が一瞬止まった。腕の勢いのままに、地面をやわらかと擦りながら少し離れたところまでやどりの体が吹き飛ばされる。

「ひ、ああっ！…」

やどりの体に重い衝撃が走る。息が一瞬止まった。腕の勢いのままに、地面をやわらかと擦りながら少し離れたところまでやどりの体が吹き飛ばされる。

「あ、うう」

酷い打撃の痛みと、擦れた肌。また、近づいていく化け物。やどりは、震えた声を上げる。

「…う」

刀を持ち、化け物を切っていた対戦は、ちょうど視界に映ったそれをスローモーションで見ている気分だった。

代夜のときのように。

傷ついてく、者が。

頭に、血が、上った。

だめだ。

これは、だめだ。

対戦は眼を見開きながらすゞしい勢いでやどりの方へ向かった。途中、化け物が立ちふさがつてきたが、対戦は無言のまま、高く飛び上がりその化け物の脳天に突き立てる。

小さい化け物は薙ぎ払い、大きい化け物は突き立て、他に何も見えてないという状態で、やどりの方へ駆け寄る。

やどりはすごい速さでやつてきた対戦に抱きつくる。対戦は片手でやどりを抱えた。

化け物からは悪臭が漂い、口元からは涎に似た液体をぽたぽたと垂らしている。

けれど、それでも対戦は眼を大きく開きながら、ただ化け物を見つめる。瞳孔も開いているようだった。無表情、無言のまま、ただ、見つめる。

恐怖なんでものはどこにもなかつた。

ただ、腹の奥から酷く冷たい怒りが湧き上がつてくるだけ。

殺したい、壊したい、崩したい、殴りたい、蹴りたい、刺したい、打ちたい、潰したい、沈めたい、落としたい、千切りたい、抉りたい、そんなただの、怒り。

化け物が腕を振りかぶる。そんなよつすを、やどりは怯えながら、対戦は、ただ冷たい眼で見ていた。

それが、振り下ろされそうになつたとき、対戦の口が、小さく、動いた。

ただ、その一言だった。

その瞬間、化け物は粒子になつて消え去つた。
どくり、と対戦の内部が脈打つ。

次の瞬間、額の傷なんて比じやないほどの痛みが、体中を駆け巡つた。

「う、ぐう……」

それを唇を噛むことで必死に耐える。全身を鋭い刃で斬りつけられたかのよつこじんじんと痛むそれ。

けれど、対戦は倒れなかつた。口の中に血がせり上がつてきて、それを地面にペッと吐く。

頭の中がくらくらとした。今、自分が何をしていたのかもわからなかつた。

ただ、田の前の化け物が消え去つたという現実のみしか、頭の中に入らない。

「ぐ、はは、はははははっ……！」

男が腹を抱えて笑つた。ゆらり、と対戦が男の方を向く。
素晴らしい、と男が呟いた。

「言靈を使えないかと思っていたのに、まさに危機一髪、ですねえ
「」と、だ、ま…」

「でもなんですか君のその言靈は。言葉として曖昧なはずなのに、どうして、君の思うように言靈を放つことが出来た?本来、言靈とは、意味を持つ言葉を正しく使うことによって意味を成すはずなのに。そこがわからない」

「…」

「答えない、ですか?まあそれもいいでしょう」

ぱちり、トワインクして男は一歩後ろに下がった。

「君は面白い。多大な可能性を秘めている。これは万葉家にちょっとかけをかけるより、面白そうですねえ」

「な、にを…」

「ここは見逃してあげましょう。まあ案外人を殺すといい気分がしないものです」

先ほどまで本気で殺そうとしてきた人間がなんというか。

対戯は瞳孔の開いたままの眼で、今にも飛び掛りそうな様子だった。正気が失われたかのような状態で、それでも片手でやどりを抱きしめている。

「この世界の人間というものは、酷く面白い。もがき苦しむ様、絶望しきつたその顔。それでも諦めようとしない愚か者。不安定なくせに一定のバランスを保ちながら生きていぐ、なんて滑稽で醜い。けれどどうしようも愛しく思えるのですよ、その姿は」

くすり、と男が笑う。

「……まあ、人間を捨てた男が言ったとしてどうなるのでしょうか?」

瞬間、対戯の意識が正気に戻る。

冷や汗が止め処なく流れしていくのを感じた。

人間を、捨てた？

なんだこいつ、なんなんだこいつ。声を発しようとしたけれど、対戯の喉が乾いて張り付き、上手く出すことが出来ない。

「おおっと、勘違いされたは困るのですが、私は人間ですよ？正直正銘、四肢の揃つた五体満足の愛しき人間。けれどですね、どうしようもなく私は人間という枠から外されてしまったのですよ。結果的に私は人間と区別することが出来なくなってしまった…、いいえ、させられなくなってしまったのでしょうか？愛しき人間は私というモノを人間と分けなくなってしまった」

「なんだよ、それ、意味わかん、ねえ…」

「意味なんてものはわからずともよいのです。そもそも理解させようとしていませんから。でもたまに考えるのですよ。私という人間だったものが愛する人間というのは、自己中心的なエゴイストばかりだった…、とね。だからこそ欲してみたくなるのです。私の考える、本当に、面白い人間というものを。だって考えても見てください。人間と化け物の違いとはなんですか？人間こそ化け物の素質を持つてているというのに、圧倒的な線引きで分かたれた世界を、否定して否定して否定して。なんてつまらない。面白くもない。でしょ？」

同意を求めるように男は対戯に問いかける。対戯は無言のまま、男を睨み付けた。

「その中で、私は君を面白いと思つた。従者だなんて嘘でしょう？いくらなんでも、この子に敬語を使わない従者なんているものですか。万葉家というのはそれほどの力を持つているのですよ？従者と名乗るからには、せめて敬語を使ってくれませんと」

「…」

「まあいいでしょう。別になんだって構わない。でも、その行動に私は目を引いた。あなたは見たところ事情を知っているだけの一般人にしか見えなかつた。けれどどうこうことでしようか。命を賭けてまで、万葉家の子を守ろうとし、仕舞いには言靈を使って見せた。予想外ですよ。面白い。とても面白い。だから、いいでしょう。私はもう貴方たちを狙う真似をしません」

は、と一瞬だけ息が止まる。対戯は呆然とした表情で男を見た。男は表情が何一つも変わらないまま、ただ、笑う。

「そうだ、私のことは入鹿いのかとお呼びください、また会うときが来るのでは」

そんなときは来なくともいい、と思うが、その願いは叶うことがなさそうだ、とほぼ確信的に思う。

そんな対戯の心情を見透かしたかのように、それでは、と演説の終わりのよくな声を上げる。

「行くも逝くも貴方次第。面白いものには愛の手を。それでは失礼またいつか」

帽子を脱ぐ仕草をして、サーラスの団長のように片手を前、片手を後ろ、と片足を軽く下げるペコリ、とお辞儀をする。

しゅんかん、ぼふん、と大きな音がして辺り一面白い煙に包まれた。視界が煙るが、すぐにそれは消え去る。

そこにはもう、誰もいなかつた。化け物も、あの、化け物に似た人間も。

「あ…、」

対戦の視界がぐらりと揺れる。

暗転していく世界。

気の遠くなつていく意識の中、やぢりの声が響いた。

+++++ +++++ +++++

桜が舞つていった。視界が桃色で埋め尽くされ、淡い木漏れ日の中、そこは優しい匂いがした。

相変わらず世界は綺麗な振りをしているけれど、ここは本心から綺麗だ、と思える場所だった。

『ここは秘密の場所です』

さんが言つ。

『ここでなら自分に素直にいいのですよ。ここは人が人であることを、全て赦す場所ですから』

さんはにこり、と笑つて俺の頭を撫でた。

俺はなんだか照れくさくて、つい俯いた。その手を振り払うなんてことはしなかつたけれど。

父のような、兄のような、さんは舞い散る桜を見上げ、呟く。

『もし悲しいことがあっても、泣くな、とは言いません。けれど、忘れてはいけないのです。貴方が零す涙の分だけ、心を痛める人が

いるということを『

『そんな人、おれに、いるの?』

『ええ、現に、今だつて目の前にいるじゃないですか』

ほらね、と優しく笑う。

『…』

ああこんなにもきれいなひとがいるのか、と思つ。悪意も憎悪も、この人からは自分から逃げていく。人の痛みを自分の痛みともとれるこのひと。

世界はこういうひとを愛するんだと、なんとなくそう感じていた。人を引き寄せる力をもつていて、人の心を暖かくする力を持つている。

すこぐ、強いひとだ。

泣きそうな心で、そう思つてた。

『対戦、』

『なに?』

『貴方の、幸せとは、何を指しますか?』

『しあわ、せ?』

『そう、幸せ』

『…おれには、ちょっと難しい』

『なら、いつか見つけてください』

『どうして?』

『いつか、それが、貴方の力に、なりますから』

そう、 -さんが言つた瞬間、俺の視界は淡い桃色に全てが染まつた。

世界がぐら、と揺れる。

優しい世界が、暖かい世界が、あの人気が、崩れしていく。

必死に手を伸ばした。

やめろ、行くな、行かないで、置いていかないで。
ひとりに、しないで。

+++++ +++++ +++++

「あ……」

薄ぼんやりと、意識が覚醒していく。

そこには、桜も、あの人も何もない、見慣れぬ天井が対戯の眼に映つた。

無意識のうちに手を伸ばしていたらしく、微かに眼の端がじわりと濡れていた。

「生きてる、のか……」

伸ばしてた手で、そのまま眼の周りを拭う。

だんだん思考がはつきりしてきたのを感じ、辺りを見回した。

障子、畳、掛け軸、など、いわゆる和風と言つべきものが一通り揃つていて。

悪くない記憶力の中辿つても、こんな家、見たことがなかつた。

「あれ……」

よく見ると、視界の端に動くものが。

それは暖かくて、小さくて、生きている、もの。

「やどり…？」

そう名前を呼ぶと、むむ…と微かに身じろぐだけで、その他に反応はなかつた。

もしかして、と思つて重い体を上げると、そこに対戯の布団に寄り添う形ですやすやと眠るやどりが。

微かに瞼が赤く腫れていて、泣いていたんだな、と簡単に想像がつく。

少し申し訳ない気持ちになりながらも、優しくやどりの頭を撫でてから、起こさないようにそろり、と布団からでた。

先ほどより痛みは引いていたものの、まだじくじくとじつこく痛んでいて、体を動かすのも少しだるかった。

どうやら体には包帯が巻かれているようで、服の下に微かな違和感を感じる。

忍び足で部屋から出ると、そこは縁側のような場所で優しい光をその場所に差していた。

庭はよく手入れされているようで、落ち葉はほとんどない。

「…やどり…」

少なくとも安全な場所だろうが、見慣れない場所なぶん不安感がかなり強い。

やどりがいるのだから、多分そういうところだらう。

本能的に、ここからすぐ離れた方がいい、とそんな気がする。

あのときの痛みが、微かにぶり返すように疼いた。

変えれも帰れもしないあのとき。間違つたことはしなかつた。けれど、自分に合つていない行動だった、とつい苦笑する。まったく、可笑しそぎる。

「　　誰だ」

不意に鋭く、冷たい声がどこから聞こえた。

対戦がえ?と周りを見渡せば、不意に首元に冷たい感触。振り向けば視界に映える白と赤。え、と考える前に、首筋のものを考える。

ナイフ。

は、と掠れた声が口から漏れた。

「…お前は、誰だ。なんの目的で、ここにいる」

「いや、あの…」

「答えろ」

ぐいっと冷たいナイフを押し付けてくる人間。やべえこれどうじょうか、と思いながら、相手のことをまじまじと見てみると、あれ?と違和感。

よくよく見れば、その人間は、対戦と同じくらいの歳で、そして、白い髪をしていた。その上赤い眼。

間違いない、アルビノ美少年か。

…混乱しているのだろう。家にあるゲームの情報が雪崩れ込んでくる。

綺麗だなー、と半ば現実逃避しかけたといひで、慌てて思考を回復させれる。

どういう状況だ、これは。

「えーと…あの、どちら様、ですか?」

「ボクが聞きたい」

ですよね。

なんだらうが、と対戦は頭を抱えたくなる。

多分こいつはこことの関係者だ。いや、違つたら怖い。
んで、自分は、本来ここにいるべきではない人間。
。。

怪しからいつて対戯のほうが分が悪い。

ここ最近自分はどれだけ命の危険にあつてゐるんだ、とげんなりするが、どうもこうも言つていられない。

「俺、特に怪しい奴でも危険な奴でもないし、ただちょっと嘔吐きなだけのお茶目さんです」

「刺されたいのか」

「…少しフレンドリーに言つただけなのに…、俺は別に悪い奴でもなんでもねーぞ。ただちょっと氣がついたらここのただけ。そんだけ」

「…」

「そんな睨み付けられても困るんだけど…、つてかナイフ下ろしてくれね？俺別にどうこうするつもりも何もないから」

「…信じられると、先ほど自分のことを『嘔吐き』と自称したお前が？」

「あ…」

「答える」

これはどうするべきか。大きな声で部屋にいるやどりを起こすのが手っ取り早いのだが、そうした瞬間にこのアルビノ美少年に喉を搔つ切られない。

…なんか感覚が麻痺してきてないか…？と最近起つた尋常でない出来事を思い返す。

対戯は一つ小さくため息をついて、まっすぐ目の前の人物を見る。睨み付けないように、と気をつけながら、小さく息を吸う。

そうして、にっこりと、笑つた。

ぱちり、と目の前の赤が瞬く。多少驚いた様子を見せてゐるその様

子に、内心対戯は喜んだ。

やべえ表情筋辛え、などといつ考えはおぐびにも圧さず、きわめて落ち着いた風を装い、それをわざとらしくあるようじにだしてみせる。予想通り、微かにアルビノ美少年の顔が僅かに強張った。ナイフが少し喉の方に近寄る。

「一作り話だけれど」

「…？」

「あるところに、一人の男子高校生がいて、なんでだかそいつは訳のわからないことに巻き込まれて、訳のわからないことをやるはめになつて、訳のわからない化け物とか力とか、その眼で、その身で体験してきたのよ。そしたら、なんやかんやで空から降つてきた幼女を助けちゃうし、その帰り道変な男に襲われて、親友が病院送りになつたと思つたら、グラサンかけた変な女に勧誘されて、仕舞いには公園で幼女と一緒に化け物オンパレードってかフルボッコにあつたのね？わかる？」

「…」

「つまりまあ、普通の人は体験し得ないことが奴に降りかかつた。なんか幼女には懐かれるし、その従者には結構酷いこといったのに感謝されるし、本当意味わからないことばかり。少なくとも速く忘れちまおうつてことが、いつの間にか忘れたくてもうんざりするくらい忘れられなくなつた。まったく酷い話だよな？日常を俺は信じてたんだよこれでも。俺が信じるとか信じないとか言うの似合わねえけど、このありふれた毎日が壊れるとかそんなことも考えてなかつたわけ。こりやあ馬鹿らしくなるほどちつとも。不变な毎日を今日も明日も明後日も明々後日も変わらずに進んでくつて思つてた。だつてそうだろ？まず空から幼女が降つてくるなんてことからありえねえ。あんな化け物だつてありえねえ。言靈だつてありえねえ。そもそもそんなこと頭の中になかつた奴が、いつの間にかここにいるんだぜ？」

すりすりと。そりゃあすりすりと。

「ちりを疑つてぐる奴にはそれ相応の対応を。混乱するべからず」と葉を並べる。

「さて、じゃあ聞くけど」

勤めて、笑顔で。

「嘘吐きな俺は、どうに嘘を吐いたでしょう？」

「はあ……？」

ナイフの力が緩む。

よし、今だ。

「もし、あんたがここの人だつたとして、万葉家の次期当主、やどり様にどう思われるかな？自分を助けてくれた人間が、他の奴に物騒なもん突きつけられていたんな！」

「……」

ようやく意味に気づいたらしく、嫌悪感と微かな同様が、赤い眼に走る。

対戦はそれを見逃さない。嘘を吐くとき、相手をよく見ることが大事なのだ。僅かな隙に、言葉を捻りこむ。

まあこの話は嘘でも何でもないんだけどな、と内心舌を出す。けれど言葉に、少しあざけを利用してゐる気がして、なんだか悪い気になる。

「はつ、そんなの……」

「嘘だと思つてる？」

「…」

「最初に言つたよな？——これは作り話だつて」

「つ、」

「さて、嘔吐きで捻くれものの俺が、作り話をわざわざ作り話とうでしようか？かといって、あなたの言つよつに俺は嘔吐きです。醜く卑しく愚かなペテン遣いです。けれど、もし、嘔じやなかつたら、あんたはどうするつもりですか？」

「なつ…！」

驚いたようにアルビノは眼を見開く。

成功、と対戯は心の中でガツツポーズをする。

多分このアルビノは、従者か、それに近い何かだ。

だから、やどりの名前を出され、対戯がそのやどりを助けたことが本当だとしたら、自分のやつていることは万葉家にとつての行為として最低なことだ。

それにはすぐ気づいたらしく、アルビノは強い視線で射抜かんばかりに対戯を睨み付ける。その上小さく舌打ち。しぶしぶといった具合にナイフを下げた。

おいおい柄悪くねえか…？つい文句を言いたくなつたがそこは堪える。

ここは上手く切り抜けることが大事なのだ。
葉桜のとき思つたが、従者というのは妄信的にやどりを信奉していた。

もしかしたらあれば葉桜限定だったのかも知れないが、一人でもそんなことがあるというなら、無論目の前のアルビノだつて例外ではない。

「…誰だ？」

「…」
「不機嫌そうな顔でナイフを下げたアルビノは、先ほどの質問

をまた対戦に繰り返し問つた。

「人に名前を聞くときは最初に自分の名前を名乗れって教えてもらわなかつたか？」

「…」

「すいません調子に乘りました」

無言でナイフ向けられた。まじ怖え。

「えーと…虚室対戦、普通の一般的で日常的な高校生です」

「…普通の高校生がここに来るとでも？」

「…ですよね…」

「…」

「あの方、俺教えたんだからお前も言えよ
「なんで？」

「なんでって…それが礼儀だろ普通」

「なんでボクが君に礼儀を向けないといけないの？」

「…」

うん、こいつ俺のことすげえ嫌いだ。

てかもともと怪しい奴だと思われてた上に、まあ、いろいろ言つたから、果てしなく嫌われた。

「おい つす！んー？何やつてんだー？」

元気な女の声。え?と振り向くと、そこには予想通り女が。スポーツ少女のような爽やかな笑顔で駆け寄つてくるその人。多分年以上だ。そして美人で。

金髪で特攻服で木刀を抱えていた。

「……………？」

思考一時停止。

思わず顔が引きつる対戦。ちら、とアルビノを見れば、半眼でその女性を呆れたように見ていた。

……なんで言靈遣いやらそれに関係する奴らはみんな変な奴が多いんだろ！？

軽く絶望のような感情が湧き上がるのを感じた。

Episode 6 言靈刀、桜、アルビノ（後書き）

新キャラ続々投入です。

対戦くんの『あの人』のこと、早く書きたいなー…。

前略。海外の父さんと母さんへ。

息子は巻き込まれました。

「おおーっー？ あんたなになに？ やどり様が言つてた子？」

慣れなれしく、木刀で特攻服を着た女が、すじへじにこと氣味が悪いくらいの笑顔でこっちに近寄つてくる。

なんですかあれー。不良ですかー？

泣き出したくなつたのはきっともう今までの変人の方々にさんざんな目に合わされたせいだ。

降つてきたり刃物向けられたり殺されかけたり勧誘されたり死にかけたりまた刃物向けられたり。

対戯は全力で逃げ出したくなつたが、そしたらそれでこのアルビノ美少年に不審がられ刺されるかもしれない。どつちにしろ平穀の道はないのか。

「んー？ なかなかの可愛い顔じゃねーか、ちょっとあたしとデートでもしにいかねーか？」

「全力で断ります」

「まあ遠慮すんなよ。おねーさんが奢つてやつからさ？」

「いやあの…、どうやら様つすか」

「ん？ あー そうか、 言つてなかつたよな」

にかり、とそれはもう純粋に眩しい笑みを浮かべる。これで服装があれじやなかつたらドキッ みたいしたことになつてたんじやなかろうか。

…服装以前にここにいる人間にそんなラブコメはあるのだろうか。家にあるアレンゲームがなんだか愛おしくなつてくる。

「あたしの名前はー…」
「姉ちゃんあああー…」

あーまた聞き覚えのある声がー。

す」ぐ戯は振り向きたくなかったが、しようとしないので首だけ向けると、全速力で走ってくる黒髪ボーテールの大人びた顔の中身中学生のあの子。

「おおー葉桜ー」

「まつたく！ 対戯様になに絡んでるのー！ 失礼なこと言つてないで
しょうね！」

「まつたくよお、葉桜は真面目すぎんだよ。近くにいい男がいるんだつたら誘惑しろ誘惑。お前のその見た目ならオールオッケーだつて」

「姉さんーー！」

会話を聞くに。

は、聞きたくないけど聞いた結果、この時代遅れのヤンキーみたいな人

「あ、自己紹介まだだつたな！あたしの名前は楠木青葉あおぎやうへんだ！」

あの真面目な「Jの、姉、とか…、

「Jの展開ゲームで見たことがある…」

対戦は深くため息をつくのであった。

「ああああ、そりゃなくて！ 対戦様に用があるのでした…」

ひとしきり姉に説教をしていた葉桜。 真面目に聞こうとしない姉にまた腹を立て、 それの無限ループに陥ろつとしていたが、 自分のするべきことを思い出したようで、 近くにいる対戦に大きく声をかけた。

ああやつぱり俺に来るのね、 と半ば諦めのよつに苦笑する。 ほろりと涙が零れそうだった。

ちなみにあのアルビノ美少年はいつの間にか消えていた。 対戦のことは葉桜とのやり取りで危険人物ではないと判断したのだろう。 あくまで前聞いてないな、 と後から思い出す。

「JがJです」

それから、 葉桜に案内され、 この大きな屋敷の中を歩いていく。 どうやらここはやはり万葉家の屋敷らしく、 先ほど大きな、 と言つたとおり、 でかい。 それなのに埃一つない。 高やうな掛け軸や壺がいたるとこにあり、 なんというか… 金持ちの屋敷の雰囲気をふんふん漂わせている。

「Jの部屋にどりだわ」

葉桜が対戯に声をかけ、扉を横にすつと開く。対戯がそこに入れば、中には、一人の女性と若い男が。

女性の方はそれはにこにこと笑っている。けれど男の方は、すくく対戯を睨み付けている。

「なんで俺男の方には嫌われるのかな。」

先ほどのアルビノ美少年のときといい、じつにも万葉家の男は自分が嫌いなのだろうか、とぼんやり思う。もうこいつをどうだつていいのだけれど、ついため息を吐きたくなる。

「あら、あなたが対戯くん？ やどりがお世話になつてますねー」

「あ、ああ、はい…」

やどり？ 呼び捨てつてことは従者じゃないのだろうか。対戯が首を傾げてると、続けて女性は言つ。

「初めまして、やどりのやどりの母、^{いわい}祝と申しますー」

あーなるほど母親母親ねえ…、…ん？ 母親？

改めて対戯は母親と名乗る女性を見る。

長い髪は緩やかにカーブしており、田髪のようなものは無縁に思える。

肌も白く綺麗で、しわ、シミ、たるみ一つもない。

その体も同様。胸大きい。

確かやどりには兄がいたといつていた。

それで、一人の子持ちと仮定して、

「…嘘だろ」

「あら？」

「こんな若くて綺麗な人が母親なわけあるかーー」

盛大に突っ込んだ。

その瞬間、その部屋の中にいた男に強く睨まれた。けれどその男は、いかにもな麻呂眉に、侍のように、短い髪ながら高く括つており、大きめの目なので、それほど怖くもない。どうにも同年代のようだ。

「あらあらあら、若くて綺麗？嬉しいわあー」

「奥様、喜ぶんじゃなく、注意した方が…」

「奥様っ！？違うだろ！？子持ちに見えねえっ…！絶対詐欺だ！」

「あらあら、もしかして私口説かれてるのかしらー」

「奥様…」

対戯は若干の混乱で、自分が恥ずかしい」とを言つてゐることに気づいていない。

けれど目の前の奥様といわれた人は、20代…、いや、20歳程にしか見えない。

若くして奥様？一人の子持ち？

「もつ、しょうがないわねー？ちょっとこいつちにいらつしゃい？」

「へ？」

「耳貸して？」

「はあ…」

対戯は言われたとおりにする。そしたら、祝が近づき、耳元に吐息を混ぜ込みながら何かを呟いた。

。 。 。 。 。

「…人を見かけで判断するもんじゃありませんね。すいませんでした」

「わかつてくれればいいのよー」

何を言われたか知らないが、急に対戦の口調が改まり、もつ騒ぐことはなかつた。

それを葉桜はどこか達観した様子で眺めている。慣れているのだろうか。

「それで、俺がここに呼ばれた意味ってなんですか?」

「あ、そうそう、そうよねえ。まずはねえ、お礼を言いたいの。やどりを助けてくれてありがと」

「…いえ」

「それで、言靈遣いになる気はない?」

「いきなり話が飛躍した気がするんですけど」

あの怪しげに笑うサングラスの女性の姿が脳裏を過ぎる。いやいやいや、とそれを振り払つた。

女人はいまだにここにこと笑つてゐる。いや、そんな笑顔になられたつて、そんなん…。

「お断りします」

「どうして?」

えー。

「いや、言靈遣いになれと言われましても、俺、一般人ですし、ただの高校生ですし、」

「ただの高校生が言靈を使えるかしらー」

「いや、あれは…」

「たまたまとか、偶然であるものなのかなしさねえ」

顔は笑顔のままで、じちらに迫つてきている気がする。
あ、この人強いわ。直感的と言つか確信的といつか、そう対戯は思う。

「なんでこう面倒くさい女ばっかりなのか…。

「まあ、その話はひとまざいわー、でも、やつてほしことがあるのよー」

「やつてほしこと…ですか？」

「そう身構えなくてもいいの。ただねー少し実験?といつか…、リトマス紙つて知つてる?」

「…はい?」

「まあねーそれみたいなものよー。葉桜ー」

「はいっ!…」

「どうだ、と葉桜が対戯に渡してきたのは一枚の正方形の白い紙。和紙のような手触りだが、なんとなく違うような気がする。なんですかこれ、と視線だけを祝に向けた。

「これねー、性質を調べる紙なのよー」

「…?酸性とか、中性とか、ですか?」

「違うわよー、言靈遣いとしての性質」

「…なんでそんなこと、」

「いいじゃない!お試しよー。やつて損はないわー」

「…はあ、どうすればいいんですか?」

「あのねー、その紙を両手に挟んで強く念を送るのよー、わづかればいいのー」

「強く念つて…」

言われたとおり対戯は、両手に紙を挟み、強く田を瞑る。

念…、念つてなんだよ。どういうもんだよそりやあ。言われた言葉を対戯は考える。

強い念…、強い感情? 良いものだか悪いものだかわからないけれど、そういうものが念と呼ぶのだろうか。

感情…、念…、……。

『対戯』

… あの人。

「 そろそろいいでしょ。開いて見せてください」

しばらくたつてから、さう祝が言った。対戯は言われたとおり、両手を開き、中の紙を見るように出す。

え、と後ろで小さく戸惑つた声を上げる葉桜。祝もぱちくり、と大きく目を瞬かせて、部屋にいた麻呂の男も、驚いたように眉毛を吊り上げた。

桜。

紙一面が桃色に染まり、桜が描かれていた。うわ、まじでか、と息を呑む。

紙を触つていただけで、本当に記憶の深くに根付いてるあの光景が反映された。改めて、現実的でない力を田の当たりにして、思いつき現実逃避したくなる。

「 …予想外ねー」

「 はあ…何がですか?」

「 だつて、普通紙には、文字が浮き出るはずなのに、あなたの紙には、絵が浮き出たのですから」

「えー…と、おかしかった、ですか？」

「ええ。そもそもその文字で判断するものだけれど、これほどひすれば…、…あの子以来ねえ。絵が浮き出たの…。あの時も困ったわあ

昔も自分のよつに絵が出た人がいたのか。なら別に、おかしくはないのだと…思いたい。

いやいやいや、普通は文字が出るとかいって知りませんよ」とち
は。

「ますます言靈遣いにしたくなつたわあ

えええええ。

「勘弁してくださいよ…、そろそろ帰りたいんですね」

「あらあら、確かに親御さんも心配してるでしょうねえ」

「いえ…親は今海外出張中なんですね」

「あらーならまだここにいてもいいわよねえ」

しまつた、墓穴掘つた。どうもこの人だと調子が狂う。
にこにこと絶えず笑みを浮かべてゐるのを見ると、敵にそういう
んじやないか、と思えてくる。

「…奥様」

「こひで、今まであまり喋らなかつた男が、口を開いた。
鋭い眼光で対戯を睨みつけながら、丁寧な口調で祝に話しかける。

「なあに? 櫻みやざか」

「わざわざこのものに執着する意味がわかりかねます。このような

やる気のないものに任せるより、この家のものでさりに鍛錬をしていくことの方が大事だと思われるのですが」

グッジョブ。とりあえず禊と呼ばれたあの男に親指を立てたい。いくら内容が、こいつやる気ねーから俺らでやつまおつせ、みたいなものでもすごく嬉しい。

「なんだかやるせなくなつてきた。

「でもねえ、わかってるでしょ? 長い年月、万葉家は言靈遣いの名家として繁栄してきた、けれどねえ、時は変わらずに過ぎて行き、対戯くんのように、言靈遣いという存在を知らない人間ばかり。不思議な力というものは科学とかいろんなものに押しつぶされ、忘れ去られていく。だから、私は少しでも他の人に理解ある人間がほしいの。面白可笑しく広めるような人間とは違い、意味を正しく理解し、私たちの生きている証を後世に語り継いでくれる人が

「…奥様、それは…」

「確かにねえ、言靈と言つものは大きく広めてはいけない。言靈と言つ概念を理解してしまい、間違った使い方を、特に鍛錬もなく、無意識、無自覚のうちに発してしまった人が出てきてしまうから、そういう決まりを作った…、けれどねえ、それは時としてむなしく感じるものよ。私たちがいるということを、言靈遣いという人間がいることを、誰も気づいてもらえないのだから」

「あ、あの、ちょっとといいですか?」

「あら、なあに? 対戯くん」

「いや、あんたたちがそこまでいづ…言靈遣いって、いったいなにをしてるんですか?」

「あら、知らなかつたの?」

「え、ええ、まあ…」

「そうねえ、説明しなくてはねえ」

対戯の疑問に快く答える祝。
禊はむすつと黙つてゐる。

「しいていうなら…鬼退治かしら」

「…は？」

「だから、桃太郎でいう、鬼退治をしてるのよお

「……」

「あ、でもねえ、宝は貰えないのよ、残念ねえ」

「…はい？」

「奥様！俺が説明しますから！」

我慢ならなくなりました禊さん。

嫌われているけれどこの人はいい人だな、と対戯は思う。絶対いい人だ。すごく嫌われてるけど。まあ嫌われるのは慣れてるし。

「鬼退治、…まあ間違つてはいない。むしろ、スズメバチを駆除するようなものだ。鬼と言う存在は…、知らないか？」

「…鬼、といわれても、そんなの昔話の中しか…、」

「見た目は鬼に似てない。総称してそう呼ぶだけだ。あいつらは人の感情。闇。そのものだからな」

「…？どういうこと？」

「人の感情の塊なんだよ、鬼という存在は。嫌悪、憎悪、殺意、嫉妬、悲愴、崇拜。まあ、強い、…強すぎる感情が鬼を作り出す」

「いまいちイメージできないんだけど…」

「つまりだ、よく言つだらう？人を憎しみにより殺す人間は、それ相応の感情があつたわけだ。自分の手首を切る人間はそれ相応の悲しみがあつた…、それほどまでに強い感情には、何かしらの力が宿る。それが鬼だ」

鬼。…鬼。

対戯は顎に手を当てて考える。強い感情。

今更もう、嘘とか、妄想とか、本来の自分であつたら信じじょうもないものが、すんなりと体に浸透する。

これはもうしようがない、と諦めを持つて、今の楔の説明を吟味した。

あの紙みたいなものだろうか。

強く念じればあの紙に桜の絵が描かれた。つまり、強い念や、感情と言つものはなんらかの感情を及ぼす。

つまり、あの紙が鬼として、考えてみればいい。

…強い、感情？

いや、と対戯は考える。

知つてている。強い感情を、俺は、この田で、田の当たりにした。つまりどういうことだ？それは、つまり、鬼と言う存在が、作られていたんじゃ…？

「…俺、そういう鬼がでてくるの、見たことないんだけど」

「当たり前だ。鬼は言靈遣いしか見ることが出来ない。もし常人に見えていたら今頃町中は大混乱だ」

「結構そこらじゅうにいるもんなの？」

「否定はしきれない」

髪を真ん中に分けていて額が広かつたので、説明中、思わずその手口をつつきたくなるのを耐え、鬼と言う存在を改めて考える。考えてみれば見るほど、まさにありえないと言いつがいい話だ。鬼？なんてファンタジーな、と一笑できたらどれだけいいか。一般的な俺の感性よ、カムバック。いい子だから戻つてきてくれ。

はあー…と大きく息をつき、対戯は祝に向き直る。

「知りたいことも知れたことだし、俺、帰ります」

「あらー、こちらの情報を『』えるだけ『』えて、タダで返すとでも?」

え、? そういう展開?」

「まあ『冗談』なのだけ?」

「冗談なのかよ!」

「そんな怖いこと私に出来るわけないじゃないー」

「その割にはすごく似合ってたんだけど…」

「何か言つたかしらー?」

「いえ、別に」

「でもねえ、帰つてもらわると困るのよー?」

「はあ…、なんですか?」

「あなた、言靈を、使つたでしょ?」

「」ここで初めて祝から笑顔が消え、困つたような顔になつた。

「もし、無意識に、無自覚に、一般的な場所で使われてしまつと、それはすごく困ることなの。こちら側にも、あなたにも…」

「いや、まさかそんなこと、」

「あるのよねえ。あなたはないと言つて切れるのかしら?」

「う、と対戯は言葉に詰まる。」

あのときは、無我夢中で、とにかくせざりを守らなければいけない、
と思っていた。

けれど、それ『』、無意識であり、無自覚である。
言葉は武器だ。それが具現化してしまつて、言靈。
誰かを傷つてしまわないといえるのだろうか?

「正直ねえ、こちらとしても予想してなかつた事態なのよ。やどりの話を聞いてもねえ、そつそつ考へないわ。いくら概念を理解したからといって、言靈を遣えるようになる人間はほく少數。私たちは代々言靈遣いの血統だから、そういう人をあまり見ないのよ」「つまり俺は…結構はた迷惑な存在つてことですか」「なんだ自覺はあつたのか」

「黙れ禊」

「なつ…！？お前！敬語を使え！」

「あ、悪い。あんたどうにも童顔だから」

「ぬなつ…？人が気にしてることを…！…ぼ、僕は15歳だ…ちゃんと15歳だからな…！」

「あ、俺と同い年だろ。敬語いらぬーじやん」

「貴様！お前その態度は…！」

「あらあらすつかり仲良しだんねえ」

「奥様、なぜそう見えるのですか…」

「葉桜、用意お願ひねー」

「了解いたしました…」

やれやれ、と首を振りながら葉桜は部屋を出て行く。
あれー、と対戯は微かな暗雲に似た何かが背後から迫つてきているのを感じた。

…用意とは、なんでしょうか。

聞きたくない聞きたくない。対戯さんは聞きたくないよー。けれど、でも、目の前の掴みどころのない女性には、勝てない気がする。これこそある意味絶体絶命といつんじやないでしょうか？

「ちようじねえ、今日は土曜日でしょ？」「フッキーねえ。今のうち

に言靈の制御と叩き込んでおかなーいと」

「あ、あの、俺の選択肢は…？」

「学校の友達にふとしたときに言靈で傷つける可能性があるとして
も、貴方は拒否するのかしらー」

「うー」

「禊ー、頼んだわよー」

「…やはり僕ですか僕なんですか奥様。話を聞いてるだけまさか
と思つていましたが、僕なんですね奥様」

「あら? 貴方も拒否するの?」

「滅相もございません」

即答。やはりこの女性は最強だ。もうほぼ諦めきった頭の中でもう
思う。

わかつた、もう降参だ。おとなしくこいつとおりにします。ええしま
すとも。

きっと外堀から埋められてくんだ。逃げられないんだ。

グッバイ、俺の日常。

+++++ +++++ +++++

「しりやん調子はどうお?」

「んー、よくわからないけどなんか今一瞬盛大に突つ込みたくなつ
たんだけどなんだろうね」

「んー? なにそれ」

「ところで君また来たの?」

「そりゃー友達が入院してるんなら来なきやねー」

「友達…?」

「うんともだ……え？もしかしてそう思つてたの俺だけってパターン？え、なにそれ辛いんだけど、え？」

「対戦は来ないのかなー」

「無視つ！？無視なの！？」

となりでぎやんぎゅん騒ぐ京を無視して、代夜はふう、とため息をついた。

最近、対戦の様子がおかしいことには気づいていた。長い付き合いだ。気づいてはいたが、わかつていた。自分に知られたくないものだつてことに。

この親友は、危険なことには決して自分を関わらせようとはしない。嘘で平気で人を傷つけるくせに、その嘘で平気で傷つけた人間を守る。

そんな対戦だからこそ、自分は友人でありたいと思つたのだ。

そして、自分は、彼の嘘がわかる。いや、彼だけではない。人の嘘がわかる。自慢できるような特技ではないが、それだからこそ、気づくものがあった。

けれど彼だけは、嘘吐きでありながら、他の人間と違つていた。わかるからこそ、代夜は、対戦を理解している。でも、だからこそ、辛いこともあるのだ。

この怪我も、彼は気にしてしまつてゐるようだ。

「大変だなー……」

「なにがあ？」

「いや、なんでもない」

おそらく、だけれど。おそらく、自分の推測であるが、対戦は、変なことに巻き込まれている。

あのひねくれものの癖に、いやに優しいところがあるあのペテン使い。

話してはくれないんだろうなあとはほんやりと呟つ。さすがに嘘は見抜けても心を見ることなんて出来ない。でも、わからぬからこそ、もどかしい。

「なーなーしろやん、悩み事か？」

「んーそうだねえ」

「対戦もなんか変な感じだつたしー、なんか悩み事でもあるのかなー。…俺またぼっち? 辛いうえに寂しいんだけビー…」

おや、と代夜は京をまじまじと見た。

なんでか対戦に懐いてるのは知っていたけれど、ちゃんと理解してくれてたんだなあといこで思わず実感する。

…自分は彼の母親か?と苦笑もしたが、それでもやはり、嬉しいと思つ。

そのうえ京は案外自分のことも好意的に思つてているのも確かだ。この少年は本当に素直に喋る。それはもつたまにイラつとくるほどに。自分は嘘をつかないが、そのぶん本音を隠す。言わないけれど、自分も、対戦も、京を好ましく思つているのだ。たまにうざいのは確かだけれど。

「…んー? 今しろやん腹の中で黒いこと教えてなかつたー?」

「あはは」

「え、なんで笑つて誤魔化したの? え? え?」

「あはははは」

「しろやんんんんつ! ?」

「あー隣のベッドに眼帯美少女とか来ないかなー」

「うわああああ誤魔化されたあああああ」

「病院では静かにしなよ」

「つづつ諭された…。それにしてもしろやんも、対戦も結構ギャルが好きだよね…、キャラに合わないんだけど」

「失礼な。エロゲも好きだよ」

「うん、眞面目に言われて困るな…」

呆れたような顔で返された。いいじゃないか別に。好きなんだから。そつ言おつとした瞬間につきん、と頭が痛んだ。

あー、いつもの。と慣れた痛みに半ば諦めに似た気持ちを持つ。これが案外痛むのだからたちが悪い。

「ん? しりやん頭痛いの?」

「え、あ…まあ、うん」

え、気づくの?

慣れすぎて頭痛が起じてもすっかり顔に出なくなつて、対戯以外気づかなくなつたのに…、気づいた、だと?

京という男はそういうことに鋭いんだな、とつい感心する。

「こつものじだから平氣」

「え、頭痛もちなの? 大変だなーしりやん。痛いの痛いのとんだけーつ、てか?」

「どうせなら美少女にやつてほし」

「…顔に似合わざるやん女の子好きだよね…」

「君、男にやられて嬉しいの…?」

「あ、俺の方が失言だった。女の子がいいです。心配そうな顔で、一生懸命言つてほしいです」

「いい線いつてるじゃないか」

頭はずきずき痛むけれど、原因もわかつてゐるし、特に気にするこ
ともない。

酷いときは吐き氣もするし、倒れた時だつてあつたけど、それはも
ともとの病弱さも原因だと思つ。

情けないが、自分の体は病弱な上に貧弱で貧相で…あれ?なんか泣きたくなってきた。

「体の方は大丈夫なん?」

「うん、そこまで深い傷じやなかつたからすぐ退院できそつだよ」「不審者に襲われたんだつて?怖いな一世の中は、対戯は無事だつたらしいけどさ、もしかしたら、明日一人ともに会えなくなるかもしけなかつたじやん。おつそろしーわ、そんなの」

「ほんと君僕らのこと大好きだよねえ…」

「おう…」

「…そつはつときつ言わると照れるんだけど」

光は輝き空は青い。当たり前の当たり前で当たり前でしかない目の前の光景。

ふとたまに考える。僕がそう思い込んでいるものは、他の人にとつては、まったく違うように見えるのではないかと。

昔の絵描きたちがそうだつた。彼らには、彼らの見え方があつた。彼らには彼らの世界があつた。

そう考えてみると、僕のこの田の前にあるものが、全て偽者のような気がした。

頭の中に降り積もつていぐ、偽者かもしないもの。輝く光も、青い空も、もしかしたら酷く汚れたものかもしないと。

だから、けして、目の前にはないものを否定してはいけない。

そう、この場所にいない彼のことも。

「はあ…」

京が帰つた後、病室で代夜は顔ごと枕に沈めた。

頭がずきずきと痛み、苦しかったが、それでも思考の海へと身を投じる。

代夜は対戯と違い嘘をつかない。

だから隠す。

それが、なにもならないとしても。

『黙れ。代夜、…関係ない一般人巻き込んだ拳句どういうつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かつた。それなら、まだ良かつた。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かつたんだよ』

『ああ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじゃないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、こいつは、代夜は、何も関係なかつた。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、』

「…いつたいなにしてるんだよ、対戯」

小さな咳きは、そのまま静かな病室内に溶けて消えた。

「では今から非常に不本意だけれども、この白樺櫻しらかばざくらが、お前の鍛錬かんれんをつけることとする」

「わーぱちぱちー」

「…やる気ないのか」

「…あると思うのか?」

「……奥様に悪気はないんだ」

連れてこられたのは道場のような場所だった。周りの壁は木の板で張られており、床は畳。掛け軸には一球入魂と書かれていた。あれ? おかしくね?

少なくとも、柔道や空手の練習をするのには最適な場所だろう。俺何しに来たんだっけ、と一瞬対戦は思つ。まあわかっている。わかつてているのだが、こうもとんとん拍子に自分の望まぬ話が進んでいくと、どうもこうも現実逃避以前に思考が遮断されていく。知つてこるや、無駄だということに。なんだこれ、泣けてくる。

「では、まずは簡単な言霊の出し方だ…、ほら」

「ん…紙?」

「そう、それを浮かせろ」

「え、なんだよそれ、超能力?」

「こ・と・だ・ま・だ!! 言霊のことは知つてゐるだろ? 意味を持つ言葉は力となる。言葉の力は外部にも作用する。そういうことだ「俺にはさつぱり理解できねえんだけど…まあいや、つまり浮け、とか言えばいいのか?」

「そうだ。まあだが、言葉の中に意味を持たせないと作用しない。

考えるんだな」

つまり浮けつて考えながら言葉を発せつてことだな、となんとなく理解して、対戯は口を開く。

「うけ」

しーん。

……。

「『』の紙おかしいんじゃね？」

「んなわけないだろ『うがーー』！」

ペッちーん、と良い音をたてて対戯の頭が叩かれる。
いつてえなーと対戯が文句を言えば、お前が可笑しないことをいうからじやないかーと怒られる。

「あのなあ、言葉の音は確かに『うけ』、となるがな、言葉は意味を持つと言つただろ？『うけ』にもそれぞれの意味がある。『浮け』だけでなく、『受け』、『請け』、『享け』……。これほどまでにたくさんの意味を持つてこる。言靈遣いはそれを正しく理解し、言葉を遣わねばならない」

「ええー…めんどくせー…」

「もし言葉が、…傷をつける言葉が、力を持ったとすれば、どうする」

「大切な人を、傷つける」とになるんだぞ？」

そう言つた襖の顔は、ざっとなく暗く、何かを堪えているよつたな気がした。

はあ、と対戯はため息をつきなくなる。だから嫌だったんだ。
重いもんなんて、背負いたくねえんだよ。

「…『浮け』」

ふい、と紙が音も立てずに田の前に何の支えもなく浮き上がる。
正面の襖が微かに田を見開いた。

それを対戯は特に感情の籠もらない田で見つめながら、内心舌打ちをする。

「面倒くせえ。

言靈にも、結局のところ甘い自分にも。

「…ふん、出来るじゃないか。じゃあそれを前に進ませる」
「え、あー…っと、『前へ進め』」
と、見せかけて後ろのにバックしたり。とか。
なんてな。

ビュッ

「え
「あ

前に進むはずだった紙は何故かすごい勢いで逆方向へと進み、壁に突き当たり、へりりと情けないような姿で地面に落ちた。
…あれ、俺前に進めつていつてなかつたつけ？

「…もう一回だ」

「だから取り出したのか、また紙を取り出して渡してくれる襷。」
「どうしたことなく、顔が引きつってるよう見えるが気のせいなんだろ？
そうに違いない。」

対戯はその紙を持ち、先ほどと同じように浮かせて見せる。
それからまた、前に進むべき言葉を…。

「『前へ進め』」

の振りして後ろへ行けばいいのに。

「ユバ

「…」
「…」
「あはせ…」
「…あえて言おう」

ぴくぴくと、眉間に皺を寄せながら、襷は言つ。

「な・ん・で……また後ろに行くのだ……」
「えーと……浮けと見せかけて後ろー、とか思つてたから……？」
「どんだけ捻くれてるんだ貴様あ……」

盛大にツッコミを入れていだきました。

いやいやいやいや、と対戯は思わず自分でも脳内でツッコミを入れる。

確かに嘘吐きですよ俺。ええわかつてます。
だからとこつて…言靈まで？

先ほど意味を乗せて放つ言葉が言靈として成り立つとか、そんな感じのことを言つてたけど…、それ正しく言わなくともいいの？

「どんだけ性格歪んでるんだ…。普通言靈は言葉に沿つて出てくる。なのに、お前は…言葉じゃなく、思つた本当の意思に沿つて言靈として反映された。なんていうか…本当性格悪いな」

「ううせーよ、そこまで糞むな馬鹿」

「つていうか性格捻じ曲がつてる。普通ならありえない。なんで言葉通りに言靈が作用しない。どんだけおまえ捻くれてるんだ。思春期なのか?」

「お前も同じ年だろ」

「あー…はあ、もうビービー。それはそれでいいことしぃ。お前はかなり性格が悪いからな、とりあえず制御についての訓練を行つ」

諦めたように怒つていた声を落ち着かせ、改めて懐から紙を取り出した。

いつたい何枚持つてるんだ、と突つ込もうとしたがやめ。ビービー何言つても無駄だ。

ならやるだけのことはやつて、ちゃんと歸れ。

ふと、祝の食えない笑みが脳裏を過ぎつたが、『氣のせいだと自分に言い聞かせて目の前にことに集中した。

+++++ +++++ +++++

「よーよーやこの坊やさん」

「はー?」

代夜のお見舞いの帰り道であつたので、特にこれから用事もなく、いつも首にかけているヘッドフォンで音楽を聞きながら、ぶらぶらと散歩でもしようとしていたころだった。

人通りのない道、どこからともなく人の声が聞こえたので、自分のことか？と思い京は思わず返事をした。けれど、振り返っても、人の姿はない。

「あれ？ 聞き間違い…」

そう呟いて前を振り向いた。

瞬間、先ほどの光景とはかけ離れてものが

「こつちだ」

「え、えええええつ」

すぐ目の前に巨大なサングラス。思わず京はよろけるよつこー、三歩離れる。

「驚きすぎだろーが」

「お、驚くんですけどそりやつー？」

京が怯えながらまじまじと目の前の女性の姿を見る。すらりと高い背に、ウェーブした黒髪。大人びた色気を放ちながらそこに立つ存在。

おや、と京は目をぱちくりさせる。めっちゃ美人だ、この人。

「ところで綺麗なおねーさん俺になんの御用ですかー？」

がらりと態度を変えて笑顔で話しかける京。そんな姿に明らかに呆れの色が女性から浮かんだが、構わず京はにこにことしている。

「もしかしてお茶のお誘いとかー？」

「いーや、悪いけどあたしはガキには興味ねえんだよ」

「そんな、俺もう高校生ですよー？」

「あたしからみたら情けねえへタレにしか見えねーよ」

「ひどい…？」

俺泣くよつー?とたいしてショックでもない風で大袈裟なリアクションをする京。京自身も冗談のつもりだったのだろう。けろつとした顔でへらりと笑う。

今までつけていたヘッドフォンを外し、ちゃんと女性の話を聞くような姿勢を見せた。

「それで?道案内がなんかですか?綺麗なおねーさん」

「いや、聞きてーことあつたんだけどよ」

一瞬間を置いて言つ。

「お前虚室対戯を知つてるか?」

「ん、…対戯?」

「まあ知つてるよな」

「はい、友達ですけどー…、対戯がどうかしたんですか?」

首を傾げながら京はあの嘘吐きの友人のことを思い出す。

「んまーちょっとあいつに興味があつてなあ」

「えー?さつきガキには興味ないって言つてたじやないですか!…」

「あのなあ、そういう意味じやないっての」

懐から煙草を取り出して口元に銜え、ライターで火をつける女性。京は、体に悪いですよ、と言つたが軽く一睨みされ、困ったようこ笑う。

「対戯のことを知ってるんですか？」

「ああ、ちょっとな。面白い奴だな、と思つて」

「ええ、対戯はほんと面白い奴ですー！」

「おや、」

女性がにやり、と口元に嫌な笑みを浮かべた。

「まだ純粋にここにこと笑う少年へと、軽い悪戯心が生まれた。

「随分あいつのこと気に入つてるんだな」

「そりや友達ですか？」

「あいつは嘘吐きなのが？」

「はー？」

「あいつの言葉全てが嘘でも、お前はあいつを信じられるか？」

あよとん、と驚いたように京から笑顔が抜け落ちた。
ぱちぱち、ヒー、三度大きく瞳を瞬かせながら、女性の姿をそこ
に映した。

にやり、と女性は、…縁は笑う。

「あたしはあいつが嘘吐きだつて知つてゐる。そりやあ見事な嘘吐き
だ。けれども、お前嘘吐きってのを信用できるか？嘘吐きって奴は
甘い言葉で囁きかけて落とすところまで墜とす。這い上がれないく
らいまで深くな。あたしはそういう奴らをたくさん見てきた。それ
でも信じられるか？」

悪魔の睦言。人を迷わせる。

何かを試すような輝きをその瞳に宿しながら、あくまで楽しそうな
笑みを絶やさない。

縁。人と人との縁。それは本当に存在し、ここに在ると証明できるものであるのだろうか。

あの嘘吐きの少年が、そんなものを作れると、

「…何言つてんですか？」

けれど、心底わからない、とでも言いたげに、純粹な疑問の言葉が、ただ当たり前のように京から零れる。

「信じるとか信じないと、それ以前ですよ」

「は？」

「俺、あいつのこと好きですし、嘘吐かれても、友達だと俺は思つてます」

「…」

「信じる理由なんて、そのくらいで十分じゃないですか」

そこには表も裏もなく、ただ、当たり前で、日常的で、不变的で、
眞実のみ。
「…」

それこそが濁りもなく、京の一部の縁として、ただ繋がつていて、
悪魔の囁きなんて気にもしないで。
嘘吐きと云つこと気にも留めないで。
たつた一つ変わらぬことのよう。

「あいつが俺のことばつぱつと、俺はあいつを友達だと思つてゐる。これ以上に、信じる理由がありますか？」

「…」

信じきつてゐる。あの嘘吐きを。

予想外の答えに縁は一瞬呆けたが、すぐに口元に、面白いものを見たかのようなあの笑顔を浮かべる。

けれど、どことなく優しげである気がした。

虚室対戯と言う人間は、漫画の主人公のような人気者のような人間ではない。

けれど、近しい間のものは、これほどまでの信頼感をみせる。これじやあの襲われたという親友君も似たような答えが返ってくるかな、と縁は煙草の煙を吐き出しながら考える。

先ほどまで、対戯の、学校での交友関係を縁は辿っていた。対戯のこと聞き込み、それからあの親友とやらに会いに行こうとおもつたが、

「その必要はなさそうだな……」

「あれ？ 何か言いましたか？」

「いや、あたしは帰るよ。ありがとな」

「ええー…行っちゃうんですか綺麗なおねーさん…」

残念そうな顔の京を尻目に縁は悠々と帰路に着く。

ああ、そういうえば、と思考の淵で考える。そういうえば、あいつの記憶を『消して』なかつたな。

怪しまれないように証拠は残さないつもりだったが…、まあ面白い。にやり、と笑う。

せいぜい焦るがいいセペテン遣い。

+++++ +++++ +++++

鬼というものは、確かに存在する。

特に大男というわけでもなく、角が生えてるわけでもない。
ただ、『存在』するのだ。

人から作られる、溢れすぎて壊れた感情の、『鬼』が。

「あ、あああああ」

がちがちがちと、体が震えている。頭の中がぐちゃぐちゃと混ざり合って、何も考えられない。

今私は何をした、今私は何をした、今私は何をした、今私は何をし
て、今私は何をしよ。

手の中の冷たく固いもの。体中に張り付いた赤い何か。

今利は何をしたか何をしてしまったか

壊れた。溢れた。決壊した。破裂した。崩れた。零れた、千切れた。

引き裂かれた

落ちて墜ちて墜ちていく
視界が暗く沈んでいく。

「あああああ」

自分が何をしたというのだ。自分は何も悪い。何も悪い。
悪いのは全て目の前の男なのだ。 そうなのだ。男が悪いのだ。
自分は悪くなどないのだ。

「ああああああ、ああああああああああああああああああああ！」

あいつが悪い男が悪い私は悪くないあいつが悪い男が悪い私は悪く
ないあいつが悪い男が悪いあいつが悪い男が悪いあいつが悪い男が
悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い

男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い。

そうだ、全て男が悪いのだ。

そうだ、 そうなのだ。 男という存在全てが悪いのだ。 殺してしまおう。

それがいい、 それでいい、 そつしなければならない。

憎い。 男が憎い。

鈍く赤い光を灯した瞳が、 横になつた三日月型に歪む。

壊れた人はもうヒトして生きれるか。

言葉に壊れ、 崩れた心。 溢れた感情は声に乗り鬼と化す。

「ヴアアアアアああああ嗚呼嗚嗚呼嗚嗚呼……」

黒い霧が立ち込める。 叫んだ痛みによる声は、 一つの形を成す。 憎イ。 憎イ憎イ憎イ憎イ。 冷たき感情の伴う声は、 その体と共に、 現れる、 鬼。

殺セ、 男ヲ。

+++++ +++++ +++++

「あーあ、 綺麗なおねーさん行っちゃつたなー」

残念そうに唇を尖らせて、 京はため息をついた。

お近づきになれるチャンスだつたのに一とぶつぶつ独り言をしながら、 散歩をするといつ言葉のまま、 周りの景色を見ながら歩いていた。

ちゅうじゆは雲一つなく晴れの、良い天氣だった。うん、と伸びをす。

「でも綺麗なおねーさんに会えたし、今日は良いことがあるかもなあー」

少し気分を上げながら、大きく空を仰いだ。

暗いのは苦手だ。明るい方が良い。

だから、早く対戯の悩みが解決して、代夜も退院すればいい。ヘッドフォンの音量を上げる。最大音量まで合わせて、音楽をがんがんと響かせた。

凄まじい音が流れているのに、特に辛そうな顔もせず、悠々と歩く。代夜いわく『今時の子は…』なのだが。

ロックバンドの演奏と溢れてくる英語。それを聞きながら歩く京にはわからない。

後ろから来るものに。

ゆっくりと、後ろから、向かってくるもの。

+++++ +++++ +++++

「もうや…やめていいか…？」

「だ・め・だ」

「あのわあ…そのわ、制御の練習わ、なんで…、針に糸通すことなの？」

「無駄口叩いてないでやれ

「納得いかねえ…」

一方その頃対戯は、いまだ裸と制御の特訓を続けていた。

その内容は、小さな針に糸を通すというだけである。特にどうしてなのか理由も教えてもらっていないので、手先が特別器用でもない対戯は、イライラしながら精神をすり減らし、この行為を繰り返している。

通した針も20本越えた。ねえこれ無駄じゃね？帰つてよくな？

「ほり、早く続ける」

冷たい目で禊は対戯を急かす。

20本。20本だ。この面倒くさくその上役に立つかわからない行動をもう一時間も続けてきた。指に針が何回も刺さった。もうイライラも最高潮に達ってきて、ふつん、ビードルかでなにかが切れる音を聞いた。

何遠慮してたんだ俺。帰ればいいじゃん。

ぴりりりりりり…

「…ん？」

急に室内に携帯の音が鳴り響いた。

対戯がおや、と懐を探ると、ぴかぴかと光を発しながら鳴り響くそれがあった。

禊が電源を切つとけ、と言わんばかりにわかりやすく眉間に皺を寄せたが、お構いなしに対戯は電話に出る。

もしもし、とお決まりの言葉を言ってから黙り込み、時折頷きながらしばらく話を聞いている様子だったが、その顔がだんだんと強張つていく。

「母さんが……倒れた……？」

ぴくり、と禊の眉が跳ねた。

「わかった、今すぐ行く！父さんはそこで待つてろーーー！」

「お、おい……」

「悪い禊！急用が出来た！また今度なーーー！」

ぽち、と通話を切つてから、一田散に対戯は駆け出した。禊が止めようとした頃には、いつの間にか対戯の姿は声が聞こえないほど遠くなつていた。

けれど、これは仕方ないことではないか……？さすがに親が急病とあつては……、と禊が思い直すが、ふと、親、と言つ单語に違和感を持つ。

……確かにいつ、親は海外出張中とか言つていなかつたか……？

「……謀つたなあの嘔吐きめが……ーーー！」

そうかそうか、海外から電話か。いきなりいまから一人で海外に行くとでも言つのか。

……ふざけるなあああああああ……！…………

そう叫んだ声を万葉家中に響かせながら、真つ赤な顔で眉を吊り上げた。

+++++ +++++ +++++

かちやかちやと携帯を弄りながらふふん、と鼻歌を漏らす対戯。

そろそろバレてる頃だろうかな、
と能天気に考えながら、携帯の通
話ボタンを長押ししてみる。

するといりりり、と発信者が、まるで電話のかかつてきただときのように流れた。

それはいつごろのためを作られたものではないのだが。

「でもなんだかまだ嫌な予感がすんだよなー」

「この手によく当たるから嫌だ、とふつぶつ呟ながら家の進路をとる。

あの時間から開放されたことによつて、少しだけ対戯の気分は上がつていた。

た
そ

今日のことはやはつあまりに鮮明すぎて忘れることは出来ないかも

レルモー つねり 里子 一 はる トモ

方向を変えようとした、そのとおり、

ぞくり

背中に悪寒が走った。え、と立ち止まる。

なんかやばい、と、ただそれだけの『予感』が瞬間に体の中を駆

け巡った。

いや、気のせいだろ。

どうせ氣のせいだ。

そう自分を納得させて、先に進もうとした、が、どうにも体は動かない。

…悪い予感ほどよく当たる。

そして、ここ最近の出来事を思い返し、嫌な予感、と考えて、思いつくのはそれはただ一つのことだ。

不可思議な体験をしてきて、言霊をなぜだか使って、限りなく科学じゃ説明できないことを何度も経験したばかりだ。予感だつて、気のせいにしたらいけないんじやないか。

「…ひ

今日せやめよう、と決める。やつだ、やめておけばいい。面倒じとはもうたぐわんだ。

ぴりりりりりり…

「…ん？」

今度は本物の電話。嫌な感覚が脳裏を掠めたが、開いてみれば【芙蓉】という名前が出ていた。

なんだ、と安心のために舌打ちをしてから、あいつなら別にいいか、と電源を切ろうとした、が、なんとなく、また背筋に冷たいものが走るのを感じた。

…なんだよ。

「はいはい、なんだよ…」

別に、いつもだつたら切つっていたかもしけない。でも、なんとなく
だけど、切つたらいけない気がした。

今、話さないと、後戻りできないような、そんな事態になる気がし
て。

「…？ おい、京？」

電話に出ても、何故かしばらく無言の状態だった。微かな息遣いと、
走るような音だけが響いている。

おい、と再度対戦は呼びかけた。小さな声が、電話の向こうから漏
れる。

『…あ、…け、て…』

「は？ 聞こえねえぞ？」

『…て、…い…』

「…は？」

『…たすけ…、…いき…』

「つ、」

今、なんて？

『た、いき…』

「おい！…お前今どじだー！」

『わからん、ない…、おれ、追いかけ、られてるのに…、おん、なの、
人…なのに、違う…そ、れに、だれ、もいない…！』

「京！」

『こわい…なんか、ちがう…おと、が…、こえ、が…』

何を言つてゐる？ 何を言つてゐるんだ？
追いかけられてる？ 女？ 違う？ 怖い？

……嫌な、予感？

いつの間にか対戦の足は駆け出していた。逸る気持ちが頭の中を蹂躪し、吐き氣がする。

電話口では、ひたすら京の名前を呼び続けた。

「京ー返事をしろー京ー」

『お…なの人…こわい…まるで、おこ、みたいな…』

……鬼？

怖い、女？

『お…うひつてゐ…よく、わかんない、けど、怒つてゐ…』

怒つてゐ？

感情？

「まあか…」

そんな、こんなに、『都合悪く』、あるはずが…。
嘘だ、ありえない。まさか、そんな…、

対戦の頭の中で、入りたての知識が限りなく循環しながら悪い予感を引き立てる。

冷たいものが這い上がってきて、その気持ちの悪さに膝をつきたくなる。

「おこーお前本当にビリといいんだよーーー」

『わ…かな…、めぢやくぢやく、たつて、たか…』

『～～つーーじやあ何か田畠せーー?』

『え…あ…、なんか、薄暗い…』

「暗さでわかるかーーー」

『あう、え、と、青い、ベンチがあつて、黄色い、滑り台の、

公園

「、そ」なら知ってる! とりあえず気張って逃げろ!!!」

對戲

一大丈夫だ！！必ずそつち行く！！」

俺は何でこんな必死なんだろう。

何で誰かのためにこゝも金がで走ってるんだ?」

面倒くさいのには関わりたくないと思つて、いたばかりじゃないか。

確証もないはうなのには

「どうなつてんのか知らねえけど、絶対無事でいろよー待つてろー」

けれど、満足にも譲れない中、一番に電話してきて、一番に助けを求めて。

俺のことを、友達だと、当たり前のよう」、そう言った、あいつが。

「絶対、助ける」

うん、信じてる

何一つ疑わず、このペテン使いを信じるという。

京は馬鹿だ。間抜けだ。お人よしだ。けれど、嫌いにはなれない。あんなに、ぐちゃぐちゃな喋り方なのに、その言葉だけは鮮明に、明確に、はつきりと、言う。

対戦はひたすら走る。走る。走る。走る。早く見つけなければいけない。

嘘しか取り柄のない自分が、助けるなんて大見得張つて、自分に何が出来るという。

…けれど、嘘しか取り柄のない自分が、やさしさを助けることができた。

それだけは、眞実なのだ。

走っているうちに息が上がりてくる。苦しくなる。足も疲れのための痛みを放つ。

けれど止めてはいけない。止めではならないのだ。

「このやつ……！」

間に合へ。間に合へ。間に合つてくれ。

+++++ +++++ +++++

意味がわからなかつた。なんで自分が追いかけられているのか。なんで、自分が、包丁を持った女性に追いかけられてるのか。

女性は、田を走りながら、狂気に塗れた顔で自分を追つてくる。

よくわからない。耳が痛い。怖い。怖い。怖い。

いいことなんか、ぜんぜんなかつた。

涙を堪えながらただひたすら走る。数十分も走つて、息も苦しくて、もう倒れてしまいたい。けれど、倒れたらきっと自分はは死ぬ。ありえない、なんでこんな田に合つんだ。

女性は叫び声を上げながら、京をひたすら追いかける。

その田は血走り、理性などといつもの遠くに捨て去つてしまつたみたいだった。

「憎い、憎い憎い憎い憎い……男ガ憎い……！」

重く冷たく感情の強く籠もつた言葉、…『籠もりすぎた』言葉は、
大きい『何か』の力を得る。

人が鬼と為す理由。ヒトが鬼を生み出す理由。
言葉は人を殺す。その意味のままに。

一色に染まつてしまつた言葉は、その方向にしか動くことが出来ない。なぜなら、そうするしか生み出された意味はないからだ。京は言靈遣いではない。だから、見えるよしもない。

女性の背後にあるものを。

微かに輪郭をぼやかしながらも、確かにある、それを。

とばつちり京くん。
多分可哀想な役回り。

Episode 9 生まれし心の成れの果て

鬼。人はその感情により、鬼と成り、その感情に満ちた言葉は、その形を作る。

鬼は人から作られる。かくいう、人を殺す人間もそう呼ばれる。殺人鬼、と。

白いカーテンがふわり、と揺れる。淡い光が、窓ガラスを通して病室全体に降り注いだ。

つん、と鼻につく病院特有の臭いももう慣れた。代夜はただぼう、と窓の外を見ながら、その双眸の視線をどこか遠くに宿していた。窓は開いていて、外からの風が代夜の色素の薄い髪をさら、と揺らす。

「きっと、話してくれはしないんだろうね」

小さくぼそり、と呟いた。

呆れや、諦めに似た笑みが、八の字に垂れ下がった眉と共に顔に出る。

「そんなの、寂しいだけなのになあ」

そう零した言葉は空気を微かに震わせただけで、静かにこの病室内に溶けていく。

代夜は悲しそうな顔で、しうがない、という顔で、親友のことを思い浮かべる。

この傷を負つたあの日。

自分は気を失つてなどいなかつた。

全て覚えていた。

けれど、言わない。代夜は嘘をつかない。だから隠す。だから、誰にも知られることはない。

きっと彼は、自分を巻き込むことを恐れているんだろう。あのペテン使いは、そういうところで、人の気づかぬところで優しさを見せるから。

だから、聞くこともできない。彼のために。彼が自分に秘密にしようとしていることだから。

聞けない。知らないでいることしかできない。そうすることしかできない。

『あんな』親友の姿を見ながらも。

不意に、窓からなんだか生暖かく、嫌な臭いのする風が吹いた。

瞬のことだが、それは鮮明に代夜の脳内に焼きつく。あれ、と首を傾げたが、あまり気にすることじやない、そう考え、ぼすん、と体をそのままベッドに倒す。その瞬間、じくり、と傷が痛んだが気にせずにただ、目を閉じた。

+++++ +++++ +++++

「アア嗚呼嗚嗚呼嗚嗚呼つ……！」

「ひいっ……」

後ろから追いかけてくる女性の叫び声を聞いて、思わず京は情けない声を上げた。

ちら、と後ろの様子を伺つて後悔する。異様な光景を目に焼き付ける羽目になつた。

長い黒髪を振り乱しながら、ひたすら包丁を京に突き立ててしまおうと、それだけを考えているかのように、その田線は京を捉えて話さない。

（なんで…なんでなんで…なんでこんなことになつてんだよ…）

当たり前のようだし、京の中には疑問が湧き上がる。

（代夜のお見舞いに来ただけなのに…）

泣きそうになるのを堪え、必死に走つた。

（今日はいい天氣だと思ったのに…）

息が苦しくて、渴いた喉からときおりヒュードー、と音が鳴る。

（『明るく』て、いい日だと思ったのに…）

がんがんと、あまりの出来事に、酷く頭が痛んだ。痛むというより、嫌な音が耳元で騒いで、きーん、とした深いな金属音が響いている感じだ。

「ぐ、そお…！」

京は公園の中を、追いつかれないのでひたすらぐるぐると走つていた。

このまま知らない道を走つて行き止まりの道に出てしまつた、ここで助けを待つ方が余程良いと思つたからだ。

これだけの叫び声を上げてゐるのに、誰も気づかない。そんな確かな『異常』をひしひしと感じながらも、京は走る。

待つてゐ、と言われたのだ。だから、自分は待たなくてはいけない。

「ああアアアアア嗚呼嗚嗚呼嗚…！」

「うつむこ…！」

京は地面にあつた石を通り過ぎながら拾い、それを女性に投げつけた。これで少しほは怯んでくれたら、と思ったのだが、何故か石は女

性のすぐ手前で弾かれる。

はあー？ なんで！？ と声をあげる京。弾かれた石は地面に転がり、ぱきり、と半分に割れた。

おかしい。ひやり、としたものが背筋を凍えさせる。いくらなんでも、何も触れずに石を弾き返すことなど不可能なはずだ。しかも、二つに割つてしまつほどの。まるで、人間の力じゃないみたいな……。

…人間の、力、…『じゃない』、みたいな…？

待てよ、それじゃ、なんなんだ。ばくばくと脈打つていた心臓が、さらには音を立てて加速する。

もう一度確かめるよ、近くの石を拾い、思いっきり女性に投げつけた。勢いよくその石は女性に向かうが、やはり、女性に届く手前で弾かれる。

おかしい。絶対に、これはおかしい。ありえないんだ。こんなこと。

「ぬわあ…！」

石に気をとらっていたら、京の足首がぐきり、と曲がり、体が傾きそのまま地面に倒れる。右半身をそのまま吊きつり、一瞬だけ頭の中が衝撃に支配される。

けれど、あいつは、と京が女性のほうを向く。ナリナは先ほどのつもぐん、と縮まつた距離にいる女性が。

口元に歪んだ笑みを貼り付けて、包丁をその手に、ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、近づいてくる。走るのをやめて、ゆっくりと近づいてくるその様は、京の恐怖を倍増させた。

…でも、待つてうつて、言われたんだ。

唇を噛み締めながら、恐怖により固まる体に鞭打ち必死に立ち上がる。

もう諦めたかと思っていたのか、女性は驚いたように一瞬体を固めてそれから憎々しげに顔を歪めさせる。

足が震えて、正直立っているのさえ辛かつた。いつそ、もう諦めた方が楽なのではないかと。

でも、待つてろって、待つてろって、対戯が、言つたんだ。
だから、待たなくちゃ、いけない。

待つてろって、言つてくれたから。

「ぐ、るなーーー！」

無駄だと知つていながらも、地面に落ちているものを必死で投げつける。

がくがくの足も引きずつて、必死に逃げた。
けれど、次の瞬間

ドガアッ

「あぐ…！」

横から、いきなり強い衝撃が起ころる。なにか、『大きなもの』に殴られた感覚が体中を支配した。急激な痛みに頭がついていかない。地面にそのまま叩きつけられて、腹の空気が一気に漏れる。頭も打ち付けたようで、意識が震んだ。ぽたり、と。

赤色が地面に落ちる。

「…あっ…」

どうやら額が切れたようで、頭から血が流れてきている。右耳にそれは入り込み、片方の視界を赤く染めた。

頭を打つた衝撃はまだやまず、一歩一歩歩いてくる女性の姿が一人にも三人にも見えた。

これは本格的に、やばい。

きいん、と耳鳴りがする。口の中で血の味がした。

「ア、ハハハハッ！…！アハハハハ…！」

もう、目の前に女性が来ていて、包丁を振りかざしている。刃の部分が太陽の光を反射して鈍く光る。

女性の顔は狂気に歪んでいて、もう人間の顔とは思えなかった。
…いや、それこそ、『人間らしい』顔、なのかもしれない。

「男ハ、排除、さしるベキ、男は、死ヌベキイ…！」

女性が、包丁を、振り下ろした。

けれど、ぎりぎりで京は体を捻らせ、それを避ける。
ざくつ、と地面に刺さった包丁は、その半分まで体を沈めている。
なんていう力だ。

抜き出そうとする女性を横目に、なんとか立ち上がり、逃げ出そうとするが、数歩歩いてすぐ、よろめいて倒れる。

先ほどの吹き飛ばされたダメージが体を思うように動かしてくれなかつた。

「うう、う…」

逃げなきや、逃げなきやいけないのに、体がもう、動かない。
腕も足も頭もずきずきと痛んで、意識が遠のくのを必死に堪えた。

（待たなきや、いけないのに）

視界がぼやける。

（ちゃんと助けに来てくれる、人がいるのに）

何してんだよ俺、と小さく京は呟いた。
諦めたら駄目なのに、もう体が動かない。

「逃がサナイ……！」

包丁を抜いた女性が、左右に揺れながら、こちらへ向かう。
逆手に持った包丁が、いやに生々しく感じた。

「来る……なよ……」

なんとか起き上がろうとするが、体に力はもう入らない。さつともう、包丁を避けることもできない。だらう。

右目に入った血で見る赤い世界は、絶望的で、壊れたよつに見えた。
今度こそ、女性は包丁を突き立てようと、包丁を振りかざす。
そして、勢いよく、振り下ろした。

空は青くて、雲は白くて、明るくて、優しい日だと、思つてた。
暗いのは苦手で、光が差す場所にいるのが、好きだった。
きつと、そんな日は、いい日になると、そう思つていた。

「ひ……！」

ガキイツ……！」

高く鳴る金属音。

「 つ……？」

高く飛び、遠くに落ちる包丁。

女性の顔が、驚きに染まった。

京の目の前に立つ、後姿。

両手で鉄パイプを握り締めて、そこそこ、待ち望んだもの。

「つ……！対戦……！」

微かに声が震えた。どつと安心感が噴き出した。

顔だけこちらに向けた対戦は、にかり、と笑つて見せる。

「遅くなつたな」

「……ううん、信じてたよ」

対戦が女性の方に顔を向ければ、憎々しげにこちら睨み付ける姿が。そして、その背後に浮かぶ、大きな『それ』を見た。

全体的な茶色い体に、大きな鬚を生やし、きょろりと緑色の目を光らせ、両手が異常なほど大きい。その口には、大きな牙をつけていた。

「これが、『鬼』、か……」

鬼・感情量中の下級】憎悪

知らず知らずのうちに対戦の頭の中に流れ込んできた。

うわまじで普通じゃなくなつてきやがつた、と小さく零す対戦。

「対戦、あれは……」

「ん、大丈夫だ。よく頑張った。褒めてやるから感謝しそうなに」その上から田線……

「お前は寝てる。俺がなんとかしてやつから」

「なんとかつて……あれ相手に……よべ、わかんないけど、あれ、普通じゃ……ないよ……？」

「わかつてゐるさ。包丁持つてゐる時点で危険確定だ。これなんの火サスだよ、つかホラーだ。恐えよ」

「そんな…」

「まあでも、俺も普通つていえるかわからんねえし

とりあえず寝てろ、と対戯が言つ。なにそれ、と京は思わず笑みを零した。

安心やら、嬉しさやらで、京の張り詰めていた緊張が一気に解ける。かくり、と意識が遠のき、京の視界が霞んでいく。

大丈夫だ、と確信できた。彼は、嘘吐きだけれど、だけれど、信じることが出来た。

だつて対戯は、嘘をつくけど、至んだ人じやないから。ぼやけた視界の中でも、対戯の姿は、いつも通りに余裕たつぱりで、微笑みながら、京の意識は暗転した。

「…よくもやつてくれたな」

自分で驚くくらいに冷たい声だつた。

鉄パイプを強く握る。酷くぎらついた目で女性を睨み付けた。後ろには頭から血を流し、体に傷をつけた京。

「…ぜつてえ許さねえ」

人の二倍ほど大きい『鬼』は、その体に十分にその威圧感を纏わりつかせその存在を主張する。

ふと、それは、あの『入鹿』と名乗つたあの壊れたような男の周りにいた化け物に酷似している、と気づいたが、そんなこと考へてる場合じやない、と思考を打ち消す。

どうやって、あの鬼を倒すのか。

溢れすぎて壊れた感情の成れの果て。その叫びが命を灯し、『鬼』と為す。

哀れだとは思う。だけれど、同情する気なんかわからぬ。

「男、憎イ…、殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ、死ンでしまエばいイ」

「…てめーの親父今頃泣いてるぞ」

「男、男男男男男男男男。男男男男男男男…！！！！！」

「…きめえよお前…、男男つて…執着しそぎだつての…」

「男なんテ、死ねバいいイ…！！！」

女性の、喉が潰れそうなほど甲高い叫び声に反応して、鬼が襲い掛かってくる。

そんな姿を、くだらない、と対戯は吐き捨てた。

振り下ろしてくる鬼の手を避け、対戯は女性のすぐ横を通り抜ける。少しでも、とこちらの方に意識が向くより、わざと、あからさまに鼻で笑つてやれば、簡単に怒りをこちらに見せる。

「男男男つて…欲求不満か？みつともねーなあ

「…つツツ…！！！」

「はしたないぜ？いい大人が」

女性を見て、そんなことではないのは一目瞭然だ。長袖のシャツに長袖のズボン。けれど微かに見える痣。少し考えて、だいたい夫か何かのDV被害にでもあつてたのだろう、と対戯は思う。

男というものを恨むのはわかる。けれどだからといって関係ない人間を巻き込むのはお門違いだ。

どんな理由があつたって、どんなに同情されることがあつたって、それで京を傷つける理由にはならない。

こんなの自分らしくない行動だ、ときつと誰かは言つだらう。淡白

で、冷めてて、そんな普段の自分を知る人間は。

けれど、駄目なのだ。そのことを甘さだと対戯自身は言ひ。自分の世界を壊されたくない。ありふれた、自分が生きているこの場所を。そこには、京だって、もちろん代夜だつている。それを傷つけるつていうのなら、それなら。

俺だつて、容赦しない。

「口を開けばその単語しかでねえ、なんてそんなのが鬼生み出したやつ？ その執着ぶりにはある意味敬意持てるよ。ちいとも尊敬は出来ないけどな」

「なにヲ…！ 男ガ…！ 男ガ…！」

「じゃあ聞くけどさ、ここにいる京はあんたに何かした？ 跳つた？ 殴つた？ 酷い言葉でも吐いた？ つは、ありえねえ。自慢にもなんにもなんねえけどこいつひょろつちいぜ？ 体力ないし貧弱だし音楽ばつかガンガン聴いてる馬鹿だ。でもこいつの人の良さだけは保障する。こんな俺みたいなペテン使いに飽きずに話しかけてくるなんてほんと人だけはいいんだよ。こいつが誰かを傷つけるなんてありえねえ。んで、あんたは、そんな京をここまで傷つけたわけだ？ なんで？ こいつ何もしてねえよな？ 男だからって？ はあ？ 馬鹿だよな、あんたそんな性別以前の問題で、人として最低なことしてる。俺が言うのもなんだけど、けれどお前、自分がやるのは許されるとでも？ 男に酷いことされたから？ ふざけんなよな、あんたは低俗であり愚劣で、人間として恥ずべき醜態を晒してた女だ」

「つ…！」

相変わらずの空言^{ペテン}。ぐらり、と女性の感情の昂りに、一瞬だけ鬼の姿が歪み、それから肥大する。その大きな腕を振りかぶり、強く対戯に叩きつけようとする、がすんでのところでかわし、その手に強く鉄パイプを打ち込んだ。

少しだけ鬼が傾くが、あまり効いたとは思えない。

ふと、それが頭を過ぎる。使えるかもしない、が、使いたくはなかつた。

もし、使つてしまえば、もう、何一つ戻れない気がした。常にある日々も、ありふれたものも全て手の届かない遠くへいつてしまつよう。

けれど、鉄パイプだけで勝てるとも思えない。ここに来る途中の空き地で捨てられていたものを一本取ってきたが、あいてはなにしろ人外だ。

「どうすっか…」

そう零してから、ふと女性の様子がおかしいことに気がついた。瞳孔が大きく開き、ぶつぶつと何かをしきりに呟いている。なんだ、と対戯は耳を澄ました。

「殺す殺ス殺す殺ス殺す殺ス殺す殺ス…」

聞かなかや良かった。

「やるしか、ねーのかな…」

このままじゃ京共々この殺気に満ちた女性に、鬼に殺されることが確かだ。

かなり危機的状況なのに、どうしてこんなにも落ち着いていられるのか、自分でも不思議でならない。もう、慣れてしまったんだろうか。日常ではないそれに。

「…あーもう…やればいいんだろ俺が…」の俺が…それしかねーんだろ…！」

半ば切れたように叫び、それからきつ、鬼を睨むように見た。もういい。もうしょうがない。もう、やるしかない。それしか、『勝てる』方法は、ない。やるしかないのだ。

「……『動くな』あ…！」

一瞬だけびくり、と鬼の動きが止まる。けれどそれは一瞬だけで、すぐに「ひかりへ攻撃をしよう」と腕を振りかぶる。

対戦が逃げるのを邪魔するよつに女性が「ひかりへ突っ込んできた。

「『邪魔すんな』…！」

がしゃん、とどこかでガラスの割れるよつな音が内側で響いた。

女性は大きな音を立てて少し離れた地面へと言葉の発したとおりに吹き飛ばされ、叩きつけられた。

邪魔をするな。そう吐いた。けれどその本当の意思に従い、言霊は遣われる。

「ちくしょう…！成功しやがって…」

しかもやはり捻くれている自分の言葉。発したとおりではなく、結局のところ本心が曝け出される。いつかすゞい失態をおかしそうな気がして、ぶるりと体が震えた。

その少し気が緩み隙が出来たとき、突然脇腹に酷い衝撃が走った。

「いぐつ……！」

鬼に殴りつけられ、その勢いのままに空中に吹っ飛ぶ。なんとか無我夢中で体制を整え、そのまま落卜することは避けた。
けれど熱く痺れるような痛みが全身これでもかといつほど駆け巡る。
呻き声を唇を噛むことで堪え、鬼の方を向く。
どうやらもう本気の攻撃態勢に入つたようで、ぎらついていた目をさらに鋭くして、こちらを見ている。黒形の足を跳ね上げ、対戦の方へ向かって、飛んだ。

「ちつ……！」

その着地地点にいた対戦は痛む体を引きずつて避ける。ビーン、と大きく低い音をたてながら地面が揺れた。もしあのままあそこいたら、と一瞬考え、すぐに打ち消す。想像するのも嫌だ。

「あがつ……？」

着地してからもすぐにはその巨大な腕で殴ってきて、腹に思いつきり捻りこまれる。口から唾液が飛び出て、その中に赤いものも見えた。口の中に満遍なく血の味が広がり、気持ち悪い。

酷い激痛に、息をするのも辛い。もしかしてこれは、体の骨がどこか折れているんじゃないだろうか、と思つ。
体が地面に叩きつけられ、ずざざつと音をたてて肌が擦られる。
痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

一
九
九
九

口から呻き声が漏れる。目の前がちかちかして、頭がぐるぐる回る。落ち着け。痛みに支配されてるだけじゃあ、死ぬ。おそらく、確實に。

俺は誰だ。
ペテン使いが泣き言をいうものか。
負けない。
負けでは
ならない。
痛くない。
こんなのは平気だ。

۱۷۶

鬼が両手を握つて、こちらへ振り下ろしてきた。それを寸でのところで避けて、いつの間にか手元から離れ地面に落ちていた鉄パイプが目に映る。

きしむ体に鞭打つて、その場所に駆け寄つた。それを手に持ち、すぐ鬼のほうへ振り返る。

また殴るようなポーズの鬼のほうに、鉄パイプの先端を向け、もう片方を地面につけ、それを抱え込むようにして固定した。

「うれしうも念じるやうに口の中で囁く。
鬼ががつ、と地面を蹴つて、すいこスピードで対戦の田の前に来る。
いまだ。

「『伸びひ』……」

ぐさり、と。何かが潰れるような音をあげながら、その身に鉄パイプが突き刺さる。

さながら如意棒のように鉄パイプが伸びたことによつて鬼の腹に穴が開いた。

鬼は酷く汚い、言葉にならない声をあげながら口から縁がかつた青い色の液体を出した。鼻につんとつく嫌な臭いがするそれは対戯に頭からかかる。

「気持ち悪いん、だよ……！」

鉄パイプを抜き、鬼から出る体液を浴びながら、対戯は飛び上がる。その鬼の腹からも血に似た、けれどおかしな色の液体が流れ出していた。

汚い、と思つ。これが、人間の感情の末路なのだろうか。

「……何が男、だよ。結局男でも女でも、おんなじくらいの心を持つてるんだよ……。それを、ただの性別の違いのせいにしやがつて」

ちり、と熱い何かが頭を過ぎつた。考えれば考えるほど腹立たしくなる。

「殴られるのが嫌なら抵抗すればいいじゃないか。抵抗するのが怖いなら助けを求めればいいじゃないか。そんなことさえ弱い人間はできないんだ。それを、そんな自分の弱さを……他人のせいにしやがつて……！」

鉄パイプを握り締め、鬼の脳天に叩き落した。ごり、と低い音がし

た。

『伸びる』。そつまた、口が動く。

「勝手な言い訳で出来たお前の感情を…押し付けやがんじやねええええええ…!!!!!!」

人間は弱い。知っている。だから何かのせいにする。そうしないと、自分の中に痛みが出来てしまうから。憎しみ、嫉妬、罪悪感。マイナスな感情は、その心を蝕み、痛みになる。

それを見てみぬフリをして、自分の心を保っている。それが悪いことだなんて、自分には言えない。

これが見知らぬ他人だから、ここまで言えたのかもしないけれど、でも、間違つてはいない。正しいことはいえないのかもしない、けれど、間違つてはいない。

だつて一番おかしいのは自分の感情で人を傷つける人間なんだ。伸びた鉄パイプは、その鬼の頭から一直線に体を貫く。

「そんな腐った感情なんか、『消え去れ』えええ…!!」

感情の籠もりすぎた言葉は鬼と成り、その言葉のままに本能にしたがう。

どうどうとした感情の為れの果て。

人が生み出した、『鬼』

対戦が鉄パイプで貫いた鬼は、『消え去れ』のままに、その体が細かい粒子化して消えていく。紫がかつた黒色が、辺りに立ち込めた。対戦に被せられた体液も同様に細かい粒子の粒となる。ある意味幻想的な光景だ。

それらは空に向かいながら、シャボン玉のよつに消えていく。

「…心が死んでいくのか」

がくり、と力尽きたように片膝を地面につけながら、言葉を零す。その目は焦點を定まらずも、確かにその消えていく粒子を映していた。

そのぶれる視界の端で、ぱたり、と倒れる何かに気がついた。あの女性だった。

「馬鹿なもんだよ」

その女性を見た。

それは怒りや憎しみの顔ではなく、呆れや困ったような表情だった。ちつ、と舌打ちをしながら、呟く。

「つたく…もう、疲れ…た」

先ほどから、息を吸うたびに、少しでも体を動かすたびに、体が悲鳴を上げるように痛んだ。

意識が本格的に朦朧としてくる。

ぐらり、と頭の奥が揺れた。気持ち悪さが一気に押し寄せ、眩暈がした。もう、意識を保っているのも辛い。ばたり、と対戯は倒れた。土の匂いが鼻につきながら、そのまま暗転し意識は深い闇の中に消えた。

+++++ +++++ +++++

「君が端渡代夜くんですか？」

え、と代夜が振り向くと窓の淵に腰掛けている、黒髪で驚くほど顔の整った少年がいた。

「……ここ、八階なはずですけど」
「知っています」
「……誰ですか、人呼びますよ」
「怪しいもんじゃないんですけど」
「僕には十分怪しいようにしか見えない」
「まあ当たり前ですよね」
「……誰、ですか」

何かやばい、と自分の中の警報が鳴り響いていた。それはただの勘に近いけれど、自分の場合、悪い勘は良く当たった。少年はにこにこと笑つたままで、表情を崩す気配はない。それがさらになじみを漂わせた。

「……君の『体質』のことなんですか？」
「…………？」

思わず息を呑む。なにを、なんで、と冷たいものが背筋を過ぎた。このことは人に知られてないはずなのに、と内心焦る。それを見透かしたように、少年は笑みを深くした。

「実は、僕たちに協力してほしいんですよ、ねえ」
「……は、なにを……」
「それはこちらに来ていただかないと」

「なんだよそれ、僕たちって……、もしかしてなんかの宗教」と
？悪いけどそんなの興味な……」

「君の親友は、君に隠し事していますよね」

「つ……！？」

なんでそれを、と言いたげに代夜は少年を見つめた。少年の瞳がゆらりと細まる。

「多分遠くに行ってしまいますよ、彼。あなたとは違う道へ」

「……なにそれ、そんなの僕は……」

「信じません、か？嘘か本当かなんて、あなたにはわかるはずでしょ」

「……つ」

「……つ」

ぐるぐる、と得体の知れない恐怖が押し寄せてくれる。

少年はその代夜の様子を見て、ふう、と息を吐くと、近くにあったメモ帳を取り、一枚千切った。

そこへペンで、さらさらと数字を書き込んでいく。

「一応僕の連絡先です。決まつたらいひつで。僕たちは歓迎しますので」

「……」

そう少年は言つて、また窓から飛び降りた。え、と驚きながら窓の下を覗き込むが、そこにはあの少年の姿はなかつた。さつき代夜が言つていたように、ここは八階だ。もう、なにがなんだか、わからなかつた。

「……ふざけんなよ……」

酷く、泣きたい気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946v/>

ペテン使いは言靈遣い

2011年11月17日19時07分発行